

ならぬ。國外に於ても超集團的態度の導入が諸國民を融和協調させる端緒をひらくが、この事殊に國內の小集團のうちに顯著である。ミルラア氏はこの事に就て The problems of Americanization in New York, Cleveland, and Youngstown are not going to be solved by the state legislations, but primarily by international justice. The local problem by the city Americanization committee is not an appropriation for teaching English, but a just arrangement in Middle Europe. The problems of Ohio and Massachusetts are world problems. Americanization is not isolation と言つて居り、米國化は分離獨立に依らず、統合統一による意を明かにして居る。米國內の諸國民諸人種は急にその國の文化、傳統を忘れることができず、その離脱せし國の社會的、政治的壓制を忘れず、これが解決を米國に求めんとしてゐる。よつて、米國の文化、傳統、政治のみを強調し、それを型として、たゞ一途にそれに適合せんことを強いれば諸人種間の軋轢は甚だしくなりまさるばかり、たえて融和協調を見ることができないであらう。米國內に國際聯盟の如き超集團と、その態度や心理が生しなれば、國內諸人種は融和協

調することができなからう。何づれの國でも、平時に於ては、國內の諸集團は集團的立場にあり、集團的態度に終始するが故に、一致の歩調をとることができず、紛々擾々底止するところを知らない。が、一度び戦争の如き危急存亡の秋ともなれば、忽ち超集團的心理を生じ、和衷協同一致するにいたる。米國內に於ける諸々の國民は各その國より齎せし文化、傳統の立場にあり、米本土人亦急にその集團的立場からこれを容認せざらんとする態度をとるから、米國化はなか／＼困難で、容易に奏効しがたいのである。そこで、米國の文化、傳統、政治と、歐洲諸國のそれとを、須らく寛容して併存せしめ、一大集團としての心理を生ぜしめるようにするのが良策である。この場合、もし、異なる文化傳統に壓迫を加ふれば、被壓迫人種、民族は各その固有の集團を意識し、従つてそこに、各別な集團意識が現はれ、統一することに困難を感じる。この事は我國に於ても同一である。あまりに本土の風俗習慣文化を新附の民たる朝鮮人などに強要して、その固有の風俗習慣道徳文化を尊重せざるときは、其集團の意識を強烈にするばかりで、絶えて同化の實を擧げることができない。

國內に共存する諸人種や異分子の融合は徐々自然に行はなければならぬ。あまりに融合を



急げば、強いて融和協調せんとし、強制手段若くは高壓手段を行はざるをえない。異風異俗をしばらく容認すれば、異分子間の接觸交通交換は自づから行はれ、不知不識、融合の機運に向ふであらう。かくて、時期到来すれば、愈、諸人種間異分子間の融和協調を齎らすことができ。これに反し、諸人種間異分子間の融合を強ければ、自他の差異を一層明かに意識し、類同意識發動の下に異類反撥の作用を勃發せしむるばかりである。こゝに、異類反噬の擧となり、嫌忌と偏見とを生じ、相次いで、鬭争を誘發するにいたる。それ故、國內異民族の融合は徐々自づから行はれるが如き方法に依らなければならぬ。

急に融和協調の奏効せざるを見るや、法によつて、融和を強要せんとする愚擧ともなつて現はれてくる。かの少數同胞に對する一般同胞の差別を排除せんとして、法により、政治運動によつて、強要せんとするが如きは即ちそれである。各國の協調問題は内的であつて、外的でない融和せず、反撥するのは、類同意識によるのであり、第一、生物學的に異ふと感ずる生得的素質により、第二、社會傳統の異なることによる。この兩者は内的であつて、外的ではない。素質の交換融合は人種間にあつて内より自づから發する牽引によつてなされるのであるから、強い

て法律によつて異人種間の混血を強いとすると、その寸効なきは明白である。社會的傳統の融合は自づから行はるべく、これを強制することはできない。風俗習慣、職業、道德、宗教文化などの交流は自然に行はるべく、これを法によつて強要し強制するは望みなきことである。類同意識は同氣相求め、異類相撥く二の現はれとなるが、好むと嫌ふとに對し、法を以てこれを右に左に自由に變更をなすことはできない。好むも好まざるも自由であり、内より發するのであつて見れば、これを不都合なりと言つて方向轉換を強いることはできるものではない。たとへば男女の戀愛の自づからなる現れを制して、好むものを強いて憎ませ、嫌ふものを強いて好ませるといふやうなことはできるものではない。たとへば外形上、好まざるものを好ませ、好むものを憎ませることはできるが、如何に無力なるものなりとは言へ、その内心までも制壓し強制することはできない。法による強制はたとへば外形に止まり、内心に及ぶことはできぬ。この場合、強いて法を適用すれば、面従腹背か、全く死法たらしむるかのいづれかの外には出でぬ。法は國民の道德意識の發現なれば、國民が協賛せざるが如き法に對しては、如何に暴君と雖も策の施しようがない。國民の擧つて反感をもち反對するが如き法を實行しても、そ



の効力を發揮すること能はず、竟に、死法にいたるべきは明かである。世に、法としての形骸を保持しえても死法となつて存在するものはいくらもある。民心が既に法から離れ、時代が變つてその効力を發揮することの能きぬような法はいくらもある。法の効力は必ず國民の道徳意識を表現しなければならぬ。法が國民の道徳意識を反映する間はその効力を保持するが、民心離反すれば、法あつて恰も法なきが如き姿態を呈す。

少數同胞に對し、國民が道徳意識として差別せざらんとする域に達すれば、法によつて強制する必要なく、政治運動によつて外形のみを強いて整へるに及ばないが、一般民に於て、少數同胞に對し差別せざらんとする道徳意識なき場合に、強いて法によつてこれを強制せんとすれば、全く無効なるか若くは差別意識を一層熾烈ならしむるかの二の外には出でないであらう。藪蛇とはこのことである。法をつくり、法によつて強制するにいたり、差別意識は益々熾烈となるであらう。差別事象は法の威力により一舉手一投足で改めらるゝであらうとの期待は裏切られ、差別意識は愈々熾烈となり、差別は一層猛威を逞ふするばかり。少數同胞に對する融和方法は内的のもので、國民の道徳に據るものでなければならぬ。嫌疑し差別する心を外的に

ただ法によつて強要せんとするも實に寸効なきのみならず、却つて、反感を激成するであらう。數に於て少き少數國民が六千萬の多數國民の反感を買ひ、其憤激に會つて勝味あるを知らず。かゝる方法の慘敗の運命に逢着すべきは明瞭である。少數の國民が多數の國民を彈壓するといふようなことは考へても見ることできぬ。少數の國民が八千萬といふ大衆を彈壓したり糺弾したりすることは能きぬ。強いてかゝる愚擧に出づれば、大多數の國民の反感を招き、憤怒を買ひ、收拾すべからざる窮地に陥り、事態は一層悪化するだけである。然らば、少數國民の同情者としては斯る無効なる愚擧に出づるを肯ずるわけには行かない。法によつて差別を所罰するといふ方法は一見効果多き如く見えて、實は然らざるはこれがためである。融和は徐々に主觀的に内より行はるべく、決して急遽外から力になつて壓迫すべきではない。國民が道徳意識を開拓し、内より差別せざらんとするにいたり、始めて融和協調にいたるべく、従つて、融和は先づ國民の道徳意識の開拓より歩を進めなければならぬ。簡単に、驀直に、法によつて差別を所罰し、差別なからしめんことを期すれば、事豫期に反し、一般國民の差別心は猛然として勃興し、鎮滅すべからざる威力を逞ふするにいたるであらう。



この義により、國內の異人種異民族の融和協調は故ら外から壓迫するが如き方法、手段によらず、自他の社會的傳統を等しく尊重し、自然に融合するが如く仕向けなければならぬ。最も困難と思はるゝ人種間の交雜さへも、異人種の接觸によつて緩和することゝなれば、縦へ、猶太人の如く純粹たらんとつとむるも、ついに混血するにいたるべく、社會的傳統の融合は接觸し、交通してゐさへすれば、徐々として必ず實現するであらう。然らば、功を急がず、異人種の混血と社會的傳統との融合は竟に成し遂げらるべしとする前提の下に、先づ國內諸人種異分子の社會的傳統を等しく寛恕して存立せしめ、自他敬愛して晏如たらしめなければならぬ。然る場合には人種的反情を激成して、異ると感ずるメルクマールを擴大することなく、徐々自然にそれを萎縮せしむることができる。集團間の異なる要素は表徴によつて注意をひくから、反感の激成するや、忽ち異なる要素は擴大されて明かに注視され、これによつて嫌忌と差別とが勃發してくる。だから、強いて人種間、集團間の異なる要素を没却して、差別意識を外的に法若くは暴力によつて壓伏せんとすれば、反感となり反情となつて、忽ち異ると感ずる表徴に注意し、それを擴大して愈々益々反情を煽揚するにいたる。

これによつて、國內諸人種異分子の融和は徐々自然に成し遂げらるべく、決して強要してはならぬ理由を覺るであらう。然らば、米國の如く歐洲諸國民の集流する國柄にあつては、國內に國際心を横溢せしめ、超集團的態度を發達せしめて、問題の解決を圖るより外に策はない。國際聯盟は超國民超集團心理の發現であるが、同一のことが國內にも行はるれば、小集團はデモクラチックの觀念に統卒せられて一致の歩調をとるにいたるであらう。この場合、諸國民の言語、風俗、道德、宗教、文化を等しく尊重すれば、勞せずして、諸民族の融和協調を實現することが能きであらう。

米國には歐洲の諸國民が混在して居るが、これ等の國民を一視同仁に見且取扱ひ、すべての社會的傳統を尊重することにすれば、これ等の異分子は米國なる一大集團にまとめられて、敢て紛々擾々たるが如きことはなからう。然るに、一々小集團を壓迫すれば、小集團の集團意識を高め、却つて、反目對立の感を深うするであらう。米國には五〇%のアイランド人、二〇%の波蘭人、幾百萬の獨逸人があつて、諸都市の人口の三分一若くは三分二が歐洲に於て壓迫せられし被壓迫者により成り立つて居る。こゝに問題も多く恰も歐羅巴諸國の諸問題諸懸案



を一時に米國に寄せ集めたかの如き觀がある。これ等の諸問題諸懸案をただ壓迫し去り、米國固有の國風のみを強調し、これに應合すべく壓迫を逞ふするあれば、たゞ、反感反情あるのみで、却つて集團意識は煽揚されて、小集團互に遊離孤立し、各その立場を主張し、到底收拾すべからざる事態を生ずるであらう。たとへば、幾百萬の獨逸人を壓迫するとすれば獨逸人の集團意識は勃興して、その政治的聯帶觀念を煽り、米國內に恰も一獨立國の分立せしが如き趣きを呈するであらう。歐洲大戰當時、諸都市の少なからざる部分を占めて居た獨逸系米人は戦争によつて集團意識を高め、一團となつて獨逸を支持し、米國の不利をはかるが如き言動を敢てした。これは獨逸系米人のみならず、伊太利系米人でも、アイルランド系米人でも同じことで、大集團たる米國意識よりも小集團たる集團意識に脱出の糸口を與ふれば、國內の小集團はいづれも分立の狀を呈し、恰も國內に幾多の敵國あるが如き觀をなすであらう。一般に被壓迫集團を制壓すれば如何なる種類の集團でも、如何に劣弱なる集團でも、固有の集團意識を發顯し、一區劃としての意識を生じ、大集團としての國に對立的形勢をとるにいたる。殊に、米國では、移住民は政治的、宗教的、乃至、社會的壓迫を嫌つて移住したのであつて見れば、極

力これに對し自由人としての待遇を與へ、その感情を伸ばしてやらなければならぬ。こゝに、異民族の米國化の過程が用意せられる。かくて、米國化は心理的道德的問題たるべく、政治問題たり法律問題たるべきではない。我國では目下荐りに融和運動と政治運動とを結合することについて主張がなされて居るが、これは例によつて學の見解にすぎざる實際家の盲動で、取り立てゝ論ずるに足る價值もないが、我國では特に高壓的手段を以て手取り早く事功を收めんとする風潮がある。一般民が少數國民を嫌忌し差別するとすれば、因襲の久しきによるためであり、遽かに弊害を矯めがたいであらうし、尙ほ、根本的には、集團的な類同意識によつて反撥するのであるから、遽々然として、法的手段を用る若くは政治運動によつてこれを鎮壓することはできない。融和問題は心理問題、一層適切には社會心理問題であり、乃至、道德問題である。一般國民が社會心理的に餘儀なく差別するにいたつて居るとすれば、これに對し法を以て蒞み、制壓を逞ふするなれば、却つて、怨恨となり、反感となり、反情となり、相次いで嫌忌の情を高め、一層差別的觀念を熾烈にするばかり。集合感情は國民のうち差別するような不埒なものゝみを制するのではなく、一の例外もなく、一般民衆を支配するのである。こゝに全



集團が擧つて不合理な見解をもち、妄信に陥る理由がある。

階級問題、融和問題の社會心理的根據については拙著「階級闘争の研究」第五章「階級問題の社會心理的根據」を通讀せられたし。

融和問題が法律問題でなく、社會心理問題であり、道德問題であり、更らに、集團的問題であるとするれば（階級問題一般の集團的問題たることについては「階級闘争の研究」第四章「階級闘争の本質」によつて知られたし）短刀直入、法を以て、制壓し去るといふような短氣な方法の有効なる所以を知らない。法による強制は一般國民たる集團を壓迫して、少數國民に對立するとする意識を煽揚するから、事豫期に反し、却て、差別意識を尖鋭にし、それをして猛威を揮はしむる結果とならう。法を以て制壓する結果は、反抗的氣勢を高め、法をして死法たらしむる虞れがある。如何なる場合にも、法は國民の道德意識の表現ならざるはなきが故に、國民の首肯し賛同せざるが如き法は一般に流通せず、その儘形骸となつて愁然佇立するにいたる。融和問題を法律や政治によつて解決せんとするのは問題の性質を解せざるによる。たゞ法及政治は融和に若干の途をひらき、それを補足する補助手段たるのみ。

こゝに於て、米國に於ける同化の基本たるべきものも亦超集團的心理と態度とであり、小集團の意識を減衰せしめ、それに代つて、米國を全體としての意識を發達させることに依據するであらう。

#### 四 協力による同化

同化は徐々として行はれなければならぬ。急速に集團のもつ風俗習慣、道德、宗教、文化を變化することはできぬ。同化は自然的過程によつて行はれなければならぬ。人爲故造の同化はただ外形を整へるだけで内に及ぶことはできない。

融合、同化は集團意識を煽揚せず、超集團的心理により超集團的態度を喚起することによつてなされる。あまりに短氣に外形によつて融和協調をなし遂げんとすれば、不知不識、融和を強いることになり、はからず集團意識を呼びさますようになる。強制せず、壓迫せずして、集團の境界をゆるめるにはデモクラチックな形ちをとらなければならぬ。オートクラチックの形ちによつて融和協調を圖る方法は何づれも集團意識を喚起し煽揚するから、なるべく、民主々義



的な方法により、參與の形式によつて、融和を導入しなければならぬ。こゝに、米國に於ける人種同化の強味がある。

米國では弱者劣者の高揚にも必ず參加若くは參與の形式をとるが、之れ、米國が民主國としての面影を發揚するの然らしむるところである。融和協調をなすにあたり、日本の如き官僚國では法によつて徒らに命令したり、政治によつて強制したりする思想が眞先に現はれ來り、兎角外形の上でのみ勝ちを制せんと焦るが、眞の融和は内より發するものゝ外には何もない。且つ、融和協調と言つても、融和せしむる優等階級優等集團と、融和する劣等階級劣等集團とが、社會生活に於て交互關係する原則をとり、デモクラチックな形ちで、双方から融和に協力するから、慘與 Participation 若くは cooperation なる形式を帯びざるを得ない。融和させてやるのだ、融和を強いられるのだといふ心地からは獨裁的思想と主義とが現はれ、自づから集團意識を高め、融和をはかつて却つて融和にいたらざる結果となる。こゝに、デモクラチックな參與若くは協力の形式による融和方法の優れたる所以がある。參與による融和は融和せしむるのだとか、融和するのだとかといふ對立的觀念によるのではなく、共に、共同事業としての

融和に參與し、協力によつて同じ目的を遂行し達成せんとするのである。米國では平等思想によつて個人の自由が認められるから、融和協調に於ても個人の自由を極度に確保し、融和を強いるのではなく、我が事として自發的に融和せんとする形ちをとり、自力によつて難境を打破して融和にいたらんとするのである。こゝに、平等思想民主主義による融和の優れたる方法が現はれる。參與、參加の形式を通じて融和協調をはかれば、融和せしむる集團と融和する集團とは分立するにあらず、兩者を超越する一層大なる集團に兩方から融合せんとする意義を生じ、超集團意識は必然的に現はれてくる。超集團意識の開發するところには、必ず超集團的態度が生じ、融和させる、融和するといふ意味はなくなり、自づから勞せずして、一層大なる集團に双方から融合し合ひ、融和の實を擧ぐるにいたる。

參與若くは協力による改善形式については拙著「社會政策概論」七章一節を通讀されたし。

參與の形式を採れば、融合せんとする諸人種諸民族諸階級諸集團は急に融解せずして、混合の状態に止るであらう。融合せんとする諸集團は互に他の立場を尊重するため、風俗習慣、道徳、宗教など社會的傳統は相互に維持せられ、彼此相侵し相削り合ふことなく、従つて、諸種



の型が一時共存併立するであらう。米國に於ける Americanization の過程が順序よく完全に行はれるとすれば必ず諸國民諸民族の社會的傳統の併立共存となるべく、獨逸人の組織と、佛蘭西の精練と、伊太利の色の愛好と、希臘人の藝術と、波蘭人の音樂と劇とはその儘併立併存し彼此相侵さず、従つて高々混合状態を以て進むであらう。この場合諸人種の特徴は協力し參與することによつて、各そのはたらきを高めるけれども、これを形なき統一體にまとめるにはいたらぬであらう。參與若くは協力の形式による融和は第一次的には混合より以上のものではないであらう。併し、融和協調の過程はこれを以て止るべきものでも、打ち切らるべきものでもないであらう。更らに、第二次的融和にいたり、混合状態にあつて併立するものは、徐々に彼此交流して化合し、ついに統一體となつて、最後の融和の實を擧ぐるにいたるであらう。アメリカ人は Americanization といふことは、獨逸人のいふ Germanization とか、露西亞人のいふ Russianization とかといふことは全く別であると考へてゐる。ビスマルクの獨逸化、ニコラスの露西亞化は個性を殺し去る底の併呑であつたが、アメリカ化は如何なる國の市民をも等しく強く能力あり繁昌するものとして取扱ひ、個性をもつものと見、これを暴力により強壓

によつて併呑するようなことを目論見まない。アメリカでは、如何なる移民でも、その努力によつて立場を改善する権利ありと認められて居り、各個性を保存する権利ありと見られる。獨逸化だの露西亞化だのは個性を削り去るが、アメリカ化は個性を保存するといふ。そこで、米國化は特に困難で熟練を要する技術と見られ、寛容と忍耐と互敬と互助とを以て徐々その目的を達するのであるとせられる。米國では同化にあたり、本國人は極力移民を助けて、その固有な力によつて融合の實を擧げさせんとつとめる。衛生局、隣保館、遊戯俱樂部、青年會、婦人會など諸々の團體が出勤して、各その持場から移民に助力して、米國化の過程を進めようとしてゐる。

融和協調は徐々として發達し成立すべき心理的過程である。外的に壓迫し強制しても徐々として現はれる心理的變化は突然行はれぬ。心理的變化の伴はないやうな外形的變化による融合同化は似而非なるもので、眞の融合、同化ではない。たとへば、近隣團體 (neighborhood organization) をつくり、移民をそれに出席参加せしめて、融合同化の實を擧げんとするも、かかる命令的形式をとる理論的集團 theoretical organization によつては融合は導入され



ない。理論的な集團をつくつても、文字通り理窟通り自他接觸せしめ融合せしめることはできず、この形式によるときは、近隣のものとも漸次出席せざるにいたり、目指す同化の目的を達しがたいことを見出す。そこで、参加參與の形式をとり、會議を開いて共々諸問題を討議し協議會を起して共々改善の途を發見することゝすれば、近隣團體によつてよく融合の實を擧ぐることができる。この場合、接觸の機關としてはつとめて小なる機關によらなければならぬ。私の提議に基き滋賀縣では小隣保館の實驗を積み好成績を收めつつある。

小なる機關によつて改善する形式については拙著「貧民政策の研究」及び「貧民事業要領」に述べられて居る。人間を人間として保存しうる小なる集團によつて生活する形式は理想社會の面影を多分に具備する。讀者はこれについて著者の研究を解讀しをかるゝやうにした。

參與の形式による融合協調は徐々として行はれるだけだけでも、それは最も完全なる融和方法だと考へられる。國內の小集團は身體的にも精神的にも特定集團の成員であり。つねに特定の集團意識の下に集團的態度を保持せんとつとめる。そこに家族や、その他の小集團が風俗

習慣、道德、宗教など社會的傳統を固執して地理的乃至政治的變化に應合せざらんとする態度が発生する。國內に於ける諸人種諸民族は一々固有の社會的傳統をもち、それに對抗し來る反對勢力を極力排除せんとするのである。こゝに、集團意識が生じ、集團的態度 (group attitude) が現はれる。人間は共通な風俗習慣、共通な言語、共通な道德、共通な宗教、共通な地理などによつて他と區別せられる集團としての意識をもち、他の集團から分立する。よつてたとへ、第三者から見れば些少の差異でも、當該集團にとつては他と區別さるべき十分なる根據があると考へる。こゝに、集團意識が發現し、集團意識の指導するところ、自づから、集團的態度が現はれる。集團には大小如何にもあれ必ず集團意識が現はれ、集團的態度が附隨する。融和協調には、集團意識を高めないやうに心掛けなければならぬ。集團意識が煽揚すれば、對立的觀念が生じ、到底、融和協調の實を擧ぐることができない。支配階級と奴隷との分立するにたるは、いつでもこの集團の意識が鮮明となり、兩者對立するからである。若し、世界大の一大集團が出現するとすれば、支配するものも、支配されるものもなくするから、奴隷階級なるものは如何なる形ちに於ても消滅するであらう。



集團的意識を高めないように劣等階級劣等民族を融合せんには、これを壓迫し制壓し乃至撲滅するやうな方法と態度をとつてはならぬ。たとへば、征服者が被征服者にその言語を採用せしむる場合にも、征服者はその言語を被征服者に押しつけてはならぬ。如何なる方法を以てするも、押しつけるのは *domination* であるから、集團意識は必ず煽揚する。言語を採らせるにも、押しつけるよりも、それによつて利益をうけることを餘計に意識せしめるやうにする。征服者の言語をとれば故國の社會的傳統を忘れて容易に應化するであらうと考へるよりも、これによつて被征服者が利益を受けるとする見地をとる方がよい。言語によつて日本化を行ふとか、米國化をなすとかといふやうなことは一種の文化的征服であるから、被征服者が快く應ぜざるは明かである。かくの如き方法を以て言語を押しつければ文化的壓迫となり、其社會的傳統を消滅せしむると考へるから、集團的意識をあふり、集團的態度をもつて本國人と移住民との對立をつくる。この場合、もし、日本化、米國化として言語を採用せしめず、教育として新言語を教へるならば、集團意識をあふらすして、それを採用せしむることが出来る。たとへば外國語を大學やその他の學校で教へるとすれば、それは教育手段たるまで、何等征服的意味

はないから、教へても少しも集團意識を煽揚するようなことはない。獨裁的に言語を押しつくるのと、本國の文化に參與する形式によつて言語を採らしむるとの間には集團意識を煽揚するか否かの差がある。本國の文化に參與するために國語を習得するのは、其利益のため生存の機會を増大するためであるから、喜んでそれを採用し、毫も集團意識をあふつて、集團的態度を發揚せしむるが如き虞れはない。これに反し日本化とか、*Americanization* だとかといふ方針の下に言語の採用を強ければ、集團的態度を生じ、對立關係をつくるにいたる。新言語の採用にあたつても、集團的意識を激成しないやうな方法をとれば、平和裏に目指す目的に接近することが出来る。この場合に於ては、徐々變化推移して融和協調にいたるべく、性急なる突然變化殊に外的變化は、多くの場合事態を悪化するものとして差控ふべきである。

この事は文化に於ても同一である。すべての社會的傳統は社會的產物で集團のつくるところであるから、集團意識のうちへ織り込まれ、他の集團のものと差別せられるものとして生存權を支持するであらう。異なる社會的傳統をもつものは、つねに分離する傾向がある。同じ會合に男と女が集まれば、自づから男は男、女は女と各別に集合するが、これ正常なる現象で、決



して異常なる現象ではない。風俗習慣が異ひ、道德宗教が異ひ、文化が異へば、類同意識によつて各別に集團をつくつて分立するは自然の理である。社會的傳統の差異は必ず自然に集團の分立を促し異る社會的傳統をもつ集團は Like mindedness によつて夫々別異の集團に分立する。この事は生物學的法則の支配するところで、正常な社會現象であり、如何ともすることができない。諸々の集團が接觸するときは必ず類同意識がはたらき、それに基づいて自他隔離するを常とする。こゝに、集團が容易に融合せざる理由がある。併し、正常なる社會現象としての類同意識によつて分立する集團の對立的意識が強調され煽揚されるゝにいたれば、最早正常現象ではなく異常現象となる。風俗習慣、職業、道德、宗教、文化が異へば、自づから自他隔離して別異の集團に寄り集るが、故ら集團意識を高めれば對立觀念は著明となり、従つて、嫌疑、偏見、差別の觀念が熾烈となる。こゝに病的現象が起る。

人間は如何なる種類のもでも、同じ社會的傳統のまわりに寄り集り、隔離生活をなすことを常とするが、集團の差異を人爲的に高めれば、病的な集團意識を起し、嫌疑、排斥を逞ふする。一國の中に何等かの種類と程度とに於て異風異俗をいれざるものなく、異分子の存在せざ

るものはない。この場合、集團間の意識が病的に強烈となり居らざるため、國民生活を破るが如き事は行はれない、但し、一朝、國內の小集團間に集團意識が不當に煽り立てらるれば、對立作用を起して、國內の協調生活を破るにいたる。平常、國內の小集團間には、集團意識は協調を破らざるが如き限度に於て行はれてゐるから、一體として國民生活をなす妨げとはならない。もし、國內諸集團の社會的傳統が自他調和するが如き状態に於て存するならば、異質は同質よりも却つて國民生活を豊富ならしめるであらう。多少の軋轢があつても、異質な社會は同質の社會よりも健全であり豊富である。但し、一朝、集團間の意識が一定限定をこえて不當に高まれば、病的なものとなり、社會の協調を破り、國家の平和を脅かすにいたる。我國の少數國民問題は不當に集團意識が高まり、差別心が熾烈となつた一例である。多數國民と少數國民との集團が各異ふと意識し、それによつて嫌疑し差別するにいたつて、現に見るが如き病的な社會現象となる。多數國民の差別心が不當に高まるや少數國民の不平怨恨となり、二の集團の軋轢が起り、容易ならぬ問題となつて、今正にこの案を如何に處理するかについて識者は考慮を拂ひつゝある。米國の如き多くの異民族をいれる國では集團的意識の不當に高まり居るが如き



集團なしとせず、これ等の集團は少からず、アメリカ化の障害となるであらう。たとへば、ユーゴスラビヤ人は五の政治組織の下にあり、四の宗教をもち、二のアルフハベツトと、セルブ、モンテネグロ、クロート、スロウベンの四の歴史的區分をもち、いづれも教育の程度低く、各特殊の問題をもつて居る。かくの如き國民は米國にあつても容易に一致協調することはできぬ。墺地利に於ける墺地利人と匈牙利人との集團意識とその對立との如き、國內の軋轢と紛擾とを高める素因たらざるはない。

國內には大小様々の集團が分立して相争ふが、正常なる状態にある間は却つて、これによつて國民生活を豊富にする。が、一度び、集團意識を生じて對立するや、病的となり、國內の平和を破り、調和ある國民生活をなすことができぬ。國內の小集團はすべて個性を保つから、それを極度にはたらかせ、高めさせる如くなさなければならぬ。諸集團の自己實現を過度に抑壓すれば、不平怨恨鬱積して、ついに收拾すべからざる事態を生ずるにいたる。劣弱集團は兎角制壓されて自己實現をなすを得ず、個性を表現するを得ず、不知不識、不平怨恨を高め、國內の平和を脅かすにいたる。併し、如何に劣弱なる集團と離も、自己表現は絶対必要なれば、こ

れをいつまでも遮ぎりつくすわけには行かない。よつて、その個性を發揮させ、自己表現を可能ならしめなければならぬ。

この場合、同化は徐々として行はれる。同化と個性又は異質とは矛盾撞突しない。異質にてありながら、個性によつて進退しながら、各自己表現をなすと共に、漸次にそれを抱擁するが如き抱括的集團に包擁せられることは穴勝不可能ではない。この事についてミルリア氏はいふ

Problems arising from the presence of the immigrant among us are agitating many communities, and conscious efforts at Americanization have become manifold. The success or failure of these efforts depends fundamentally on our perception of the immigrant, not as isolated human entity, but as a personality not to be detached from its peculiar matrix of psychological relationships, and incomprehensible except as part of a functioning larger social whole. 此れ即ち超集團的態度であるが、國內の小集團が各小集團の意識を分有し、大集團にいたつて、超集團的に一致協調をなすにいたれば、國家は渾一體として、一糸亂れざる活動



をなすことができる。然るに、超集團たる意識微弱なるか、優等集團が劣弱集團を壓迫するおらんか、大集團たる意識を生ぜず、ために、國家的に統一され協調ある生活をなすことができない。國內の小集團は特殊の社會傳統によつて、各異つた態度をもつから、彼此矛盾衝突するやうなことは常である。こゝに於て、國內諸集團の生活を圓滑にするには寛容の精神がいる。この事は優等集團に於ても、劣弱集團に於ても同一である。優等集團はつとめて劣弱集團に對し寛容もつて協調をはからなければならぬが、劣弱集團も亦不平怨恨によつて不當なる鬭争心を動かし、事々に疾視し軋轢してはならぬ。國內の協調には優等集團にも、劣等集團にも寛容の精神がいる。

### 五 融和協調の原則

向きに論ずるところによつて、融合協調はデモクラチックに行ふを原則とすることが分るであらう。如何なる階級如何なる集團でも固有の社會的傳統をもち、これを維持することに力めるから、何等の抵抗なくして、融和協調の犠牲としてそれが放棄を命令するわけには行かない。

い。もし、命令によつて短刀直入融和協調を實現するを得ば、融和政策にとつてこれ程簡易な方法はないが、個人として、乃至、集團として自己主張に生きる人間に對して斯様な直截な方法を採ることはできぬ。殊に、人權思想明かとなり、彼も人なり我も人なりの思想旺んなる現代にあつては、無闇に他の思想や主義を押しつけ、若くは、好まざる思想や主義を強いることはできない。何でも獨裁主義を振り廻はし、統一思想を強制する程簡易なことはないが、獨裁主義は如何なる形ちに於ても、現代にいたつては凋落不振に陥り、これを以て人權思想の旺んなる現代人にのぞむことはできぬ。こゝに迂餘曲折として、相手の協賛を求め、その參與を乞ひ、民主的に協力の形式を通じて問題の解決を圖らなければならなくなつた理由がある。諸階級、諸民族、諸集團を融和協調せしめんとするも、現代思想の特質に則り、對者の思想と主義との維持を許容しなければならず、直截にそれが取り消しを命ずることはできない。よつて、最初は、たかく、社會傳統の混合を以て満足しなければならぬ。ミルナー氏は現代に於ては諸民族の融和、協調は直接的方法に據ることとはできぬとして、*The desirable result can be reached only by the methods of the paradox, which means that to secure*



a thing we must go away from it. Europe is the living witness of the failure of assimilation by the direct method. For example, language cannot be taken away from a people by trying to take it away. In my opinion what is sought by Americanizer could have been secured infinitely better if no attempt had ever been made to bring it about と言つてゐる。ミ氏は諸國民諸民族の融和協調は直接的方法により簡易に直截に目的を達することはできないから、寧ろ、無爲であるべきであるとなし、融和協調の方法として infinitely better if no attempt have ever been made to bring it about であるとしてゐる。恐く、ミ氏の構想は妥當であり、人權思想旺んなる現時、諸階級諸集團を融和協調するにはこれ以外の方法はないであらう。諸階級諸集團の社會的傳統を融合して、統一的標準を設定しやうなどいふやうな短氣な直截な方法は現代思想と相容れない。こゝに、法により政治運動によつて、外的に融和を強制せんとするも、の時代錯誤なることが分る。集團本能によつて原始人以來生物的遺傳として獲得せしものを向ふへまわし、法律によつて所罰するなどは頗る無智無學な考案で、これ程問題の性質

を理解せざる妄案はない。集團本能勝つか、法律が勝つかと言へば、集團本能や、根本的動向に對して法の威力の零なるは始より分り切つて居る。強いて本能、動向に對し法を以て蒞めば直に死法となつて本乃伊に祭りこまれる。ミ氏が言ふが如く、融和協調の目的を達せんとすれば、「矛盾の方法」(The Method of paradox)により、融和協調せんとすることから融和協調せざらんとすることに轉じなければならぬ (we must go away from it) 強いて相手の感情を度外し、思想を無視する位なら、却つて無爲の方がよいし、また、無爲の程度で急がず焦らず見るがまゝに融和協調させるがよい。その上、統一的標準 (uniform standard) といふやうな優勝者の立場を設定し、強いてそれに適應させるやうなことはしない方がよい。現代人はすべて人權思想に生き、自己主張に嚴であるから、それに對抗するやうな方法は凡て有効でない

これによつて、現代の特徴から各固有の社會的傳統をとつて下さぬ諸階級諸集團を融和協調させるには混合以上には出る能はざるを知る。混合から化合にいたるには、徐々なる變化にまたなければならぬ。諸階級諸集團が等しく個性をもつ時代には progressive democracy に參與



する形ちをとり、いづれの階級いづれの集團にも個性をその儘共同文化のうちへ織り込ませ、社會、國家 内容を豊富にする方針の下に進まなければならぬ。未開人にのぞむ直接的方法是文明人には適用することができなぬ。固定する思想なく、また、それを主張する考のない未開人には異なる思想や感情を押しつけうるとしても、既に固定する思想や感情をもつ國民、階級に對してはそのやうな簡單直截な方法をとることはできぬ。そこで、一見、無爲に似たるが如き融和方法をとり、一に寛容の精神をもつて、如何なる異思想でも容認し尊重して共同社會財産を豊富にする主義をとらなければならぬ。現時に於ては、如何なる程度と種類の壓制をも施すことはできない。政治的壓制や宗教的壓制は既に囂々として非難され、地平線下の問題となつたが、今正に經濟的壓制が排除せられつゝある最中であり、文化的壓制も亦容認せらるべくもない。現代人は如何なる形ちの壓制なりとも甘受するを肯じない。階級、集團、國民の融和協調は二の形ちをとりうる。第一、それは優勝集團の政治、經濟、宗教、文化を押しつけることによつて、第二、それは融和に參與する諸集團の政治、經濟、宗教、文化を等しく尊重し、これを融合することによつて。この二の方法のうち、現時實行可能なものは獨り後者あるのみ。

我國に於て問題に上りつゝある少數國民の融和問題にいたつても、強いて少數國民の風俗習慣道德等社會的傳統を一般國民のそれに應化させる方法を探らざるを要する。少數國民も亦一般日本文運に參與し貢獻するものとして見、自づから融和協調を圖るやうにするがよい。現時の如く特別な融和機關を設けて性急にその實を擧げんとするは蓋し失當でもあり無効でもあらう。融和事業といふが如きものは、そのやうな一時的のものではなく、従つて、速急効果の認めらるべきものでもない。融和協調問題が一國の重大問題となりたる場合、特にこれを取扱ふ機關を設けることについて反對はしないが、この機關の融和方針は恒久的なもので、一時的若くは即刻効果をあげる底の迷信をもつて進まざるものたるを要する。性急に融和の實を擧ぐることはできない。政治運動や法的手段によつて強制したり罰したりするやうな簡易な思想に依れば、かゝる外的方法によつても効果を齎らしようと想像されやうが、結局現代に於ける融和問題はそのような專制的獨裁的のものではなく、極めてデモクラチックなものである。そこで融和協調はすべて自他の社會的傳統を尊重しながら、徐々に混合若くは融合する方法をとらなければならぬ。こゝに寛容が在り、時間がある。これに對し、融和機關は恒久的なものとして特設



されたる融和課とか社會課の一部で取扱はなければならぬ、一時的の特設機關は用をなさないことが分らう。將來、我國に於ても融和問題を單に少數國民に局限せず、朝鮮人及其他新附の人民をも含め、なほ國內に跋扈跳梁して弊害を與へる諸々の集團に對する政策とする意あるならば、現在の機關を改編して一層恒久的なものとする必要がある。この頃、學閥の弊害大なりとして文部省は官立大學をすべて廢止すべしと言ひ、特殊な教員養成大學及専門學校を廢止し、若くは、必ずしも高等學校に依らず、すべての學生に大學の門戸を開放し、大學卒業者、専門學校卒業者、獨學者を等しく同等の資格をもつて待遇し、これ等を高等教員養成所に收容せんとする案を立てるなど、學閥の弊害はやうやく朝野注視の的となつてきた(閥の社會學的研究については近著「閥の偶像」を見られたし)集團政策はわづかに少數國民に局限さるゝやうな狭小なものではない。それはすべての集團間の問題を等しく抱擁する。

集團の互に遊離孤立するは自然であつて、避けることはできない。分散といふやうなことは無意義であり、又、無効である。同じ社會的傳統をもつものが寄り集るのが生物學的原則であり、若くは、社會心理的原則である。同じ言語、同じ習慣風俗、同じ道德、同じ宗教をもつも

のは互に一團をつくつて他と隔離する。これ程自然的なことはなく、これを人爲によつて遮る方法は一も有効なものとはならない。同じ社會的傳統をもつことから類同意識を生ずるが、同類としての意識をもつものは自づから一所に寄り集る。これ等に對し、人爲によつて如何ともなす能はず、従つて、爲政者の都合や方寸でこれを分散するなど、いふことは能きない。分散は對立する集團が彼此融合する程度に達すれば自然に行はれる。この場合、分散には二種ある。一は人爲的分散、二は自然的分散である。人爲的分散は社會的傳統を異るまゝにをいての分散であるが、自然的分散は社會的傳統を類似若くは同一なるものとしての分散である。社會的傳統の異なる集團は如何にしても分散しない。水と油とは融合することはできない道理で、異なる社會的傳統をもつ集團は分散して融合することはできない。然らば異なる社會的傳統をもつ集團を分散するなど、といふ事は問題の性質を解せざる思想であり愚見である。分散しがたい生物學的乃至社會心理的根據を有する集團を彼此融合することはできぬから、かゝる場合には、これを放置するか、若くは、自然分散の形ちによつて融合するかである。後の場合には、異なる社會的傳統を類似若くは同一なものとする條件に依るから、勞せずして分散させることができ



る。いづれの場合に於ても集團的意識を挑發しないような方策をとり、徐々に自然推移の方法をとれば、分散しがたいと思はれ、融合しがたいと考へられた集團間の調和協調も竟に成し遂げられるであらう。

現代人の特質の上より見たる融和協調はデモクラチックの形式により異なる社會的傳統をすべて尊重併立し、國民文化を豊富にする主義を以て徐々接近するものたるを要する。民主的融和方法は緩徐であり、自然であり、内的である。従つて、性急なる融和は効果を齎さぬ。人爲的融和は目的を達することができぬ。外的な融和はついに劣敗の運命に逢着するを免れぬ。融和の故に融和を行ひ、職業として融和を行ふが如きものは凡て成功することはできぬ。また、融和問題をもつて單に少數國民の問題であるといふような時流による取扱方を以てしては、融和そのものゝ基本思想に出入することができなからう。よつて如何に焦心し努力するも結局何の効果をも齎らさぬであらう。融和協調一般、各種不遇者を減少する問題に關しては深刻な科學的分析の結果樹立されたる法則に依らなければならず、然らざれば一切現に見るが如く無効であり従つて無用となる。現時の實際家本位の融和分析及理解は問題の根本を披開しその性質を

明かにすることができぬ。現時の職業本位の融和は職業の故に無駄な手段を弄したり、一種の閥根生となつて職業人以外を差別したりして、融和職業家自づから盛に差別するといふ自家冒瀆となる外はない。

よつて、この際、融和問題は少數國民に對する問題より、朝鮮人問題に轉せしめなければならず、これを、軍閥學閥財閥問題に擴大し、閥の對策となさなければならず、更らに、階級問題となし、階級的闘争を取扱はなければならぬ（拙著「階級闘争の研究」は科學問題として社會的對立、社會的闘争を嚴密に分析闡明せり、ついて見らるべし）その上、ついに國家と國家、人種と人種との問題に及び、一體として國際問題、世界の平和問題、協調問題に究まらなければならぬ。海野は今正にこの見地から世界平和と世界協調問題とを研究し且つ續々發表しつつあり、挺身、世界諸國民諸民族の間に平和と協調とを擴張し、世界文化の進歩に向つて若干の寄與をなさんとす。この企ての遂行には、如何にしても江湖の賛同援助を受けなければならぬと考へてゐる。



## 六 社會的産物としての奴隷

本書に於ては、集團の社會的鬭争の結果、對立する二若くはそれ以上の集團のうち、劣弱集團及それに依屬する個人が奴隷の境涯に沈淪するのを如何にして回避せんかの社會的研究とその基本原理とが研究されつゝある。

人間は個人として生存するにあらず、仲間として生存するが故に、個人の運命なるものも個人的のものでなく、社會的更らに集團的のものである。同じやうな素質と社會的傳統とをもつ個人が集團として寄り集つて仲間生活をなすのであるから、劣弱なる同一性による集團は他の一切の優勝なる集團より凡ての權益を剝奪されて奴隷そのものに沈淪するにいたる。集團は獸性に於て平等であるから（「閥の偶像」第十四章「獸性の平等」参照）如何なる集團でも殘忍で、利己的、功利的であり、凡ゆる權益を獨占するに古今變色はない。そこで、社會的鬭争に於て劣敗せるすべての閥、集團は優勝集團より一切の權益を剝奪され、かつ、それより用役を徵發されて *Dienstbarmachung* 自己のために生きず、優勝者のために生存することとなる。こゝ

に、奴隷が現はれる。この意味に於て、奴隷は社會的概念であり、社會的産物である。

然らば、奴隷の消滅は集團の弛緩と同時であり、集團が對立して争覇をなす限りは、そこに優勝する集團と劣敗する集團との現はれを避けることはできぬ。劣敗せし集團はいつでも奴隷たるべきであるから、奴隷は集團的鬭争の存続する限り、必ず出現して底止するを知らずと解すべきである。よつて、分立する集團が争覇をやめ、協調して超集團としての國際聯盟に結合するまで、奴隷は存続するものと考へられる。この場合、個人としての奴隷といふようなものはない。同じ運命にあるものは、如何なる場合にあつても結合して仲間生活をなすから、遊離して、個人生活をなすが如き個人とは存立しない。従つて、壓伏せられ、他の用役のために生きる運命を擔ふものは個人ではなくして集團であり若くは集團人である。これに應じ、個人としての奴隷なるものは曾て存しなかつたし、今も尙ほ存しない。優勝者はその權益を確保し、愈々益々、劣弱者から權益を剝奪し且つそれを奴隷として用役を命じ、その労働の成果を收奪しなければならぬから、同じような特權者は相寄り相集り、集團的行動をとらなければならぬ。劣敗者も亦一團となつて、少くも労働の提供を遮斷し、用役徵發を妨げなければなら



ぬので矢張り集團的行動に終始する。よつて、劣弱者としての奴隷にあつても、遊離し孤立するものなく、いづれも集團としての奴隷として出現する。現今、労働階級は資本家により權益を收奪され、用役を徴發され、労働の成果を搾取されるといふが、如何なる時代に於てもかゝる被搾取階級の存在なきはない。集團的闘争に於て劣敗せし階級、集團は權益を掠奪され、用役を徴發されるときまつて居る。獨り労働階級が資本階級より虐待せられ收奪せらるゝのではない。この事は労働階級でも同じで、労働者の天下となれば、労働者も亦他の階級を文字通り掠奪しその用役を徴發するに違ひはない。そこで、資本家ばかりが横暴なのでも、残忍なのでもなく、一切の集團が横暴残忍なのである。こゝに獸性の平等が現はれ、一の例外といふようなものがないことが分る。

奴隷の本質は集團生活によつて分析せられなければならず、其消滅も亦集團生活を支配する原則によつてなさなければならぬ。

集團的闘争に終始する人類は必然的に優勝する集團と劣敗する集團との別を生じ劣敗せし集團は必ず(一の例外なく)優勝集團より凡ゆる權益を掠奪せられ、一切の利益を剝奪せられ、

労働の成果を收奪せられ、且つ用役を徴發せられるにきまつて居る。こゝに奴隷が生ずる。然らば、奴隷なるものは個人的現象ではなく、社會的現象であり、個人としての奴隷なるものは存せず、奴隷と言へば、必ず社會的なものときまつて居る。なほ、奴隷たるべく強要する集團、階級が殊に不埒であり、不道德であるといふいふやうなことはない。何となれば、集團的闘争は自然現象であつて、倫理現象ではないから。すべての集團は獸性に於て平等であり、例外なるもの絶えてなく、いづれの集團も優勝的地位を制すれば何づれも獨占的專斷を敢てすること、恰も石が引力の法則によつて地上に落下すると同一である。石の落下が自然法なる引力によるとすれば、何の倫理的意識のない集團闘争の勝つた負けたも亦自然法則であり、倫理上優れたものが勝つてではなく、物理的法則に従つて勝つたり負けたりするのである。他の權益の掠奪と用役の徴發も亦動物の不可抗なる性情として、すべての集團に平等に均分せられる獸性によるまで、是又倫理とその法則とに何の關係はない。往古今來、哲學者や倫理學者は凡て一種のアニミズムに陥つて居り、中世の天動説に類する人間中心觀を今も尙そのまゝ種々の形ちに於て保持して居るから、著者の自然法則によつて集團生活を解釋する方法に對し左袒する



やうな哲學者や倫理學者は少いであらう。但し、著者の如く人間の大部分を生物動物（人間に對して）と解し、これを更らに自然に還元するをうるといふ哲學的解釋をとるものにあつては、人間の集團生活は大部分自然法則の支配するところと斷定せざるをえぬ。

これに従つて、著者は奴隷の本質分析に關しても、その解放に關しても、價值を重視せず、主として自然現象としてこれを取扱ひ、自然法則を用ひてこれに解釋を施す方針をとる。

## 参考文献

1. 海野幸徳「階級闘争の研究」
2. 海野幸徳「閩の偶像」
3. 海野幸徳「日本人種改造論」
4. 海野幸徳「興國策としての人種改良」
5. 海野幸徳「晩近の社會事業」第十五章
6. Miller, Races Nations, and Classes. 1924.

7. HONSE, The Range of Social Theory, 1924.
8. Le Bon, The Psychology of Peoples. 1898.
9. Stoddard, The Rising Tide of Color, 1920.
10. McDougal, National Welfare and National Decay, 1921.
11. Muntz, Race Contact, 1927.
12. Johnston, H. H., The Backward Peoples and Our Relations with Them.
13. Reuter, The American Race Problem, 1927.
14. Reuter, The Mulatto, 1918.
15. Hankins, The Racial Basis of Civilization.
16. Pitt-Rivers, The Clash of Races, 1927.
17. Wissler, Man and Culture.
18. Miller, Old World Traits Transplanted, 1921.



19. Park and Burges, Introduction to the Science of Sociology, 1924.
20. Bernhard, Die Polenfrage : Das Polnische Gemeinwesen im Preussischen Staat, 1910.
21. Günther, Soziologie des Grenzvolks, Jahrbuch für Soziologie, Vol III, 1927.

## 第六章 人種的差異の生物學的根據

### 一 人種的差異

著者は集團の鬭争及協調に對しても人種的差異を固執する。人種的差異は無論外界の影響の下に發達し來つたものではあるが、人種間に遺傳的差異あるは否むべからず、人種間には根本に於て形質上の差異あるは否むことができない。

最初、人種を科學的の對象となし、それを客觀的に研究せしものは十八世紀のリネアス (Linnaeus) であつた。リネアスは分類學者として、總ての生物を屬や種に分類したが、その結果として、人間をも分類中に配置することゝした。リネアスは人間にはたゞ一種 *Homo Sapiens* があるのみだとし、人種中の區別は單に變種 (Variety, Sub-species) であると見た。やれど、リネアスの斷定はその後、色々と檢討され、*Homo Sapiens* の外 *Homo Africanus*



なる人種ありとして、人種一元説に動搖を與へた。人種は或は一元なりとせられ、或は、多元なりとせられ、ダルウキン氏以來、色々と論議されて居り、十九世紀以後、今日にいたるまで、人種の界限についても、つきざる論争が戦はされてゐる。何が人種であるか、その界限は如何、人種は形質上差異あるか、その變異の程度と範圍とは如何、身體的遺傳は如何、精神的形質は遺傳するや（未だ精神的形態遺傳の確證されたるもの極めて少なく、且つ、曖昧である）身體と精神とは關係係々係なりや、性格と學習力との關係等、つきざる論争が戦はされて居る。今日、社會學者によつて研究されつゝある人種及國民問題は大體（一）生物學的に人種の遺傳的差異に關する論争、（二）文化的差異と諸々の文化的集團の接觸及交感に關する問題に分つことができる。この中、第一の問題に對しては、社會學者のうち研究能力のあるもの極めて乏しく、主として、生物學者の研究題目となつてゐる。

ラザルスや、スタインタールや、バスチャンや、ヴントなどの民族心理學的研究にあつては、國民乃至人種の差異は文化の差異に歸すべきで、人種の差異にきすべきではないことが明かにせられた。但し、これ等、民族心理學者の研究は遺傳と素質とに關し何等權威ある決

定的の斷定となることはできなかつた。民族心理學的研究のまわりに二の異説が生じた。一はラザルスやヴント氏などに従つて人種的差異は單に文化の差異に過ぎないとするもの、他は文化の差異は人種の差異によつて説明しなければならぬとするもの之れである。フランツ、ボア教授は綿密なる研究を積んで (Changes in the Bodily Form of the Descendants of Immigrants. Senate Documents, Vol. LXIV, 1911; The Question of Racial Purity, American Mercury, Vol. III, 1924; What is a Race, The Nation, Vol. CXX, 1925: The Mind of Primitive Man) 通常、人種の特質と見做されるものは變化すること不可能であるとせられるが、身體的特質さへも變化されると考へた。ボア教授の研究も決して正確といふことはできず、人種の特質として遺傳すべき精神的乃至身體的特質は絶對變化不可能ではないが、變化するとしても幾百年幾千年も要するので、それを可變的と言つてわけもなく片付けて了ふのは決して妥當でも正確でもない。ボア教授の研究はセルギ氏 (C. Sergi) ピヤソン氏 (K. Pearson) キニ氏 (C. Gini) 等によつて批評されて居るが如く決して完全無欠なものではない。リブレナ氏の歐羅巴人種の研究 The Races of Europe には文化と人種と



の関係についての綿密なる研究が施されて居るが、人種的差異によつて文化の差異を顯現することについての決定的判定をその中に求むることはできない。

如何に極端なる環境論者にしても、遺傳的な個人差までをも抹殺し否定することはできない。如何に教育によつて個人の優劣が岐れるとしても、低能者や白痴を化してダルウキンとなしヴェートーヴエンとすることはできない。ダルウキンの進化論は先代より傳達せし進化論的傳統を繼承するとしても、それを繼承したものは、ダルウキンと同時代のすべての英國人であつた。同時代の英國人はすべてダルウキンと環境を同じくさへすれば、稀有の天才ダルウキンたることを得るとは何人も考へないであらう。如何に極端な教育萬能論者と雖も、その間、嚴として素質の問題、遺傳の問題が据えられて居ることを見免し、それを抹殺することはできないであらう。ヴェートーヴンの音樂は獨逸の音樂的傳統を承けついでとしても、同時代のすべての獨逸人は幾多のヴェートーヴンたることができなかつた。その間にあつて、獨り天才ヴェートーヴンはその偉大な獨特な素質によつて音樂的天才たることができた。これによつて、同一の環境を以てするも、萬人同一なものとして現生するのではないことが分り、如何に極端な

る環境論者と雖も、遺傳的な個人差を否むことはできないであらう。環境は短時間に人種的差異までをも變化することはできない。一二代のうちに人種的特質を變化せんとすれば、交雜を以てするより外はない。一二代の間に教育によつて人種的特質を變化しうるなど、考へるのは根本的の謬妄である。人種的差異と雖も、ボア氏の言ふが如く絶対不變なものではないが、それは一二代で變り、又、容易に環境によつて變化することのできるやうなものではない。モルセリ氏は「人種的特質は屢々變化したように見えるが、科學的研究を施せば、いつでも變化したと思はれたのは、實は社會的心理現象としての人種の歴史に關する出來事であり、人種的範疇に關するものではないことを見出すであらう」と言つてゐる。(Morselli, *Le razze umane*) 天才は恵まれたる環境の產物であるとする説と、天才は寧ろ逆境の產物であるとする説とがあるが(著者はこの事を「日本人種改造論」に於て論じた)天才のうち逆境より出たものはいくらもある。大體、天才の開発を刺戟しうる程度の生活状態は天才たるに必要な條件である。良家とか、富裕な家庭とかといふやうな、才能を挫く如き境遇に成長せず、多少不如意で氣力を刺戟はするが、極貧で才能を伸ばし得ないやうな境遇にあらざるものが、天才を發輝



するのにも都合がよい。殆んど同一な環境に人となつても、同一な才能、性格を發現することなきを以て見れば、環境萬能の謬妄たるは明かである。概して、下層階級のうちには能才、天才の率は低いから、下層階級と上層階級との境遇を同一としても、能才、天才の比率は接近するものではない。素質を基準とする思想は一種の貴族主義に傾くから、デモクラチツクの時世と合はない。そこで、一體として、環境や教育の影響を重視し勝ちであるが、これ現代人の陥れる重大なる過誤である。かゝる根據なき薄弱な謬説を基礎としては決して堅實なる人生觀も文化觀も現はれ來らないであらう。

人種は身體的特質に従つて色々に區分せられる。個人の中に素質による差異があるが如く、社會階級も亦素質によつて上下階級に分れる。(たとへば、伊太利の Niefollo 氏の貧民研究に於て知られたるが如き) 人種の間にも素質による差異のあるのは争ふことができぬ。いづれの人種も交雜して居るから純粹な人種といふようなものは絶えてない。人種の間には必ず素質の差異が顯現する。但し、ゴビノーやチャンバレンのやうな粗雑な半ば通俗的な人種優劣論には何の權威を認むることはできぬ (Gobineau, Essai sur l'inegalite des races humaines,

Chamberlain, Grundlagen des Neunzehnten Jahrhunderts) ゴビノー氏は人種には素質上の差異あり諸々の人種は異なる根源より發生し、長き歴史と交雜とに拘はらず、解剖的身體的精神的差異があり、かゝる差異は永久的で、環境によつて抹殺されず、たゞ、雜婚によつてのみ變化することが可能なのであると言つて居る。かくの如き原則に關する斷定については、今から見ても何の誤謬はない。ゴビノーが環境說に對して批判せしところのものも確實で、現時の環境論者教育論者の蒙をひらくに十分である。チャンバレン氏の人種說も亦人種の形質上の差異に關する見解から出發してゐる。チャンバレン氏は人種は生得的な素質によつて異り、かくて優等人種と劣等人種との差別が生ずるとする。現時の文明は優等人種たる希臘人、羅馬人、チュートン人の造つたところである。優等なる人種は白人種であるが、その中でもアールヤ人が最も優良なる人種で、希臘人も、羅馬人も、チュートン人もそれに屬する。十九世紀の基礎は希臘文明と羅馬文明と猶太文明との合成するところで、この基礎の上にチュートン人殊にゼルマン人、ケルト人、スラヴ人が所謂西洋文明なるものを建造した。希臘人は詩と藝術と哲學とを寄與し、羅馬人は法律と政治と秩序と市民的思想と、家庭及財産の神聖なる思想



とを寄與し、猶太人は猶太教と間接には基督教を寄與し、かくて、西洋文明なるもの、基礎が据えられた。この基礎の上にチュートン人（ゼルマン人、ケルト人、スラヴ人、北歐諸人種、米國人）が特殊な西洋文明を造り上げた。但し、西洋文明の建造は素質によつてなされ、希臘羅馬、猶太及チュートン人の天才達が築造したので、言はゞ、西洋文明はこれ等人種の人種的特質の開展であると見られる。チャンバレン氏のやうな科學的でなく、思辨的哲學的な論究からは多くの誤謬が生じたが、人種の特質によつて異なる文明が産出せられたこと、文化の中心を天才に求めることは現時の學説を以てするも毫も搖ぎはしない。個人の効績が素質によるが如く、人種の効績も亦素質の開展である。たゞ、諸人種が如何なる素質をもつて居るか、披開闡明せられないままである。従つて、優等人種と言つても、劣等人種と言つても、科學的に正確なものではないのである。この間、諸人種の差異と優劣とは單に環境、歴史の差異であるといふような謬見が陰現出沒する餘地がある。

人種間に素質上の差異があり、階級間個人間にも素質の差異がある。この事については最早何の搖ぎなく確定することができる。たゞ、素質と環境との關係の見地がいつも動搖するの

で、環境偏重や教育萬能といつたやうな謬説がたえず繰り返へされるのである。階級間、集團間には身體的にも精神的にも生得的な差異があり、それに従つて、上下階級が分立する。階級間の反目が血の問題に纏綿することあるはこれがためである。然る場合、血の問題をも解決しなければ階級間の融和は成し遂げられぬ。何か異ふと考ふるところに反目も偏見も行はれるから一切を平均し同一ならしめなければ融和協調は完全ではない。すべての社會的傳統が類似し同一とならなければ、類同意識は異なる階級間集團間に差別と偏見と従つて鬭争を呼び起す。この事は血統に於いても同一である。階級間、集團間に血が異ると想ふ間は、縦へ、それが空想の産物であつても、反目、嫉視、鬭争にいたるを免れない。

階級は身體的に異つて居り、上層階級は下層階級に比し身長、體重、頭腦の重さと容積とに優つてゐる。上層階級は死亡率も低く、生存年齢も高く、健康に於ても優れてゐる（拙著「閥の偶像」第十章参照）人種間にも身體、精神並に生活力の差異があり、精細には一として他の人種と同一なものとはない。よつて、個人に於ても、人種に於ても、階級に於ても、身體的特質並に精神的特質の間に差異があり、これによつて同類相ひき、異類相撥く社會現象を遮



り止むることはできない。精神力の異つたものが一團をつくり、これが諸階級に分配されて居る。いづれの階級も略同様な精神力をもつものが一團としてまとめられて居る。然るに、單に教育や環境によつて個人差ができるように民衆に阿るやうな口吻を弄する科學者で一杯であるが、精神的に平等などいふことは事實としては存在しない。事實としては、階級間に精神力に於ても無数の差異がある。上層階級は下層階級に比し一般に精神力が優れて居り、思想に於ても、感情に於ても、意志に於ても、劣つたものは下層階級に下降するとも考へられる。米國、英國、獨逸、佛蘭西、露西亞で研究されたところに據れば、大體、上層階級は下層階級に比し精神力に於て優れるを見出す。歐羅巴に於て最上層を占むる王族のうちから最も數多き天才を産出して居り、ウツヅ氏 (F. Adams Woods) は八百人程の王族を研究したが、その中、二十五人は天才であつた。(Mental and Moral Heredity in Royalty) エッス氏の The Study in British Genius によれば、上層階級、全人口の四・四六%を占むる専門職業階級 (professional class) は六三%の天才を産出するに對し、全人口の八四%を占むる勞働者、手工業者は僅かに一・七%の天才を産出せしのみ。これと同様なる研究は左の學者によつてなされ、略同じ結論を得てゐる。

1. Galton, English Men of Science.
2. Odin, Genese des grands hommes.
3. De Candolle, Histoire des sciences et de savants.
4. Maas, Neber die Herkunftsbedingungen des geistigen Führer.
5. Cattel, American Men of Science.
6. Clark, American Men of Letters.
7. Cooley, Genius, Fame and the Comparison of Races.
8. Yerkes, Eugenic Bearing of Measurement of Intelligence.
9. Goddard, Human Efficiency and Levels of Intelligence.
10. Terman, The Intelligence of School Children.
11. Duff und Thomson, The Social and Geographic Distribution of Intelligence.



- lligence in Northumberland.
12. Bridges and Color, The Relation of Intelligence to Social Status.
  13. Pressey and Ralston, The Relation of General Intelligence of the Children to the Occupation of Their Fathers.
  14. Nash, Mental Capacity of Children and Parental Occupation.
  15. English, Mental Capacity of School Children Correlated with School Status.
  16. Gilby and Pearson, On The Significance of the Teacher's Appreciation of General Intelligence.
  17. Stern, Die Intelligenz der Kinder und Jugendhichen.
  18. Dexter, Relation between Occupation of Parents and Intelligence of Children.

これ等の研究を通じて、上層階級は比較的多くの能才、天才を産出し、素質の上から下層階級に異る貴族的なるものだといふことが分る。

人種に於ても、これと略同様なる研究が發表せられて居る。デキソン教授 (Prof. Dixon) によれば、頭、脳の容積、顔面、鼻などにわたり諸人種の間には差異がある。人種間に身體的差異があることは否むことはできない。ただ、それが、正確であるか否か、それが人種の分類に標準たりうるか否かについて異論があるだけである。これと同じく、人種間にも精神に差異あるは明かである。普通、人種が勃興して歴史上に大なる役割をなすとき、直ちに、それを環境の影響に歸するのであるが、人種間に遺傳的差異あることは否むことができない。それに、人種的精神の差異についてはこれまでの實驗によつても證明せられつゝある。これまで研究せられしところに據れば、白人種と黒人種との間には精神的差異があることが分つた。但し、白人種と黒人種に對して優等人種であるかどうかといふやうな斷定を下すことは困難であらう。人種の優劣はすべての點に於て比較しなければ決定せられず、一の點に於て優れて居ても、必ずしも、その他の點に於ても優れて居ると言はれない。ただ併し、人種間に差異があるといふこ



とについては安全に確定することができる。一として他と同一な人種なるものはない。人種的差異についてンローキンはかく言つて居る。This means that the school is right as far as it maintains these differences in various racial types, but that it is wrong in its exaggeration of them. As we have seen, they are considerably less conspicuous than the school contends. The difference between the upper and the lower classes of the same race is rather greater than that even of the white and the black races. The school is wrong also in so far as it finds in these differences the characteristics of superiority and inferiority ..... If we drop such evaluations, the above racial differences are as indicative of superiority as are the opposite ones かくて、人種間に身體的並に精神的に差異あるは竟に否定することはできないであらう。これ等の差異は環境の影響に因るのではなく、主として素質上の差異に基づくものである。

## 二人種の交雑

諸人種間の融和乃至協調はただに社會的傳統の類似若くは同一によつてなされるのみならず、人種的素質即ち血の問題によつてもなされる。すなはち、血が同じであるのと、異ふとの間には、人種間の關係は右と左とに分れる。人種が血の上で同じであり、類似すると想はれるときは融和提携し協調するけれども、人種間に血が異ふと考へられるときには人種間に嫌忌反撥が起り、鬭争が開始せられる。

人種間の血の問題は交雑によつて解決せられる。二の人種が嫌忌反撥するとき、兩者の間に人種的に認むべからざるまでに差異が交雑によつて除かれるならば、一と先づ反撥すべき根原を取り去ることができるであらう。人種的交雑の結果は未だ不明で、十分明白なる何等の斷定を下すことができない。通常、二の異つた人種が交雑する結果は悪しく、混血兒は兩方の人種に劣ると言はれる。殊に、雑種の生産力は兩方の親人種に劣ると考へられる。基督教徒と猶太人による雑種は兩方の人種よりも子供が乏しいと言はれるが、これは混血兒に於て人爲的制



限をなすため、果して雜種たる基督教徒と猶太人の混血児が生殖力を低下するかどうか分らない。マルキユース氏は一九二二年の *Sexualprobleme* 誌上に *Die christlich Jüdische*

*Mische* なる論文を掲げ、基督教徒と猶太人との混血児の生殖力を吟味して居るが、一見、混血児の生殖力の劣つて居るのは産兒調節のためであると言つてゐる。白人と黒人との間にできた混血児 (*mulatten*) も亦黒人よりも一般に生殖力が低いと言はれるけれども、是又、人為的な産兒調節の結果に外ならない。Eal Enoch 氏は混血児の生殖力が兩方の人種より高くなつた幾多の例證を提示して居りフイツシエル氏はブル人とホツテントットとの混血児は生殖力が親人種よりも高いのみならず、その精神力に於て如何なる點より見ても兩人種に優れて居ることを證明して居る (Fischer, *Die Sozialantropologie und ihre Bedeutung für den*

*Staat, Die Rehböther, Bastards und Bastardierungsproblem*) Lusehan 氏によれば、歐羅巴人と黒人との間の混血児は少くも黒人と同一であり、その知能と文化とは遙かに黒人よりも高いと言つて居る。これによつて、混血児はいつでも親人種より能力が低下し、生殖力が減衰するときまつたわけでないといふことが分る。ただ、親人種としての父母兩者が劣悪なる

素質をもつ場合に、その産兒が劣悪だといふことは分り切つてゐる。スタインメッツ氏は異人種としての父母の素質が劣悪なる場合、その子兒も亦劣悪だといふことを示してゐる。その外環境が不良なとき、異人種を親とする混血児の能力も生殖力も減衰すべきは明かである。プロム・バーデル氏は歐羅巴人とマレイ、マオリ、グリーンラント、南北アメリカのニグロ女との間にできた混血児は非常に美貌であることを記載してゐる (*Das Weib in der Natur- und*

*Völkerkunde, 2 Bd, 1919*)

概して、文化に於ても文化的能力に於ても接近する二の人種間の交雜は良結果を齎らすけれども、文化に於ても文化的能力に於ても隔絶する二の人種間の交雜の結果は悪結果を現はす。殊に、精神的素質に於て隔絶する人種間の交雜は悪結果を齎らすから、この種の雜婚はつとめて避けなければならぬ。文化と文化的能力との隔絶する二の人種間の交雜は兩人種の間位に位置する混血児若くは優等人種よりも劣れる子兒をうるから獎勵すべきではない。メンデル法則によれば、優劣兩人種の素質は後に分離して二の人種に分れ、少しも積極的に種の改良とはならない。概して、親人種の素質が優良であつて、悪質をもたない場合には、混血児も優良であるが



然らざる場合にはこれに反す。すべて交雑の結果が悪いとするゴビノーやラブーヂ流の断定は非科學的で顧みる價值がない。

異人交雑種の結果については今のところ何等確定的断定を下すことができない。諸家の實驗と研究とは彼此矛盾し衝突し、一致の見解に達して居ない。それ故、異人種の交雑がよいと言っても、悪いと言つても、今のところ、それに信賴することができない窮状にある。ダン氏 (Dunn, L. C., A Biological View of Race Mixture, Publications of American Sociological Society, Vol XIX) シヤール・メイエル氏 (W. Schalmayer, Vererbung und Auslese) ルーター氏 (E. B. Reuter, The Hybrid as a Social Type) リントン氏 (Linton, Anthropological View of Race Mixture) ヲムローン氏 (J. Mjoen, Harmonic and Disharmonic Race-Crossing, Eugenics in Race and State, 1923) サボルグナン氏 (E. M. East and D. J. Jones, In-breeding and out-breeding) などは、いろいろと異人種の交雑の結果を研究發表したが、未だ何にも確定的な断定に達しない實状にある。従つて、人種間の融和並に協調を圖るために科學を利用する程度にまで事態

明瞭なるにいたらず。人類の血の問題を解決して人種間の融和と協調とを企圖することは今のところ望みあるにあらず、たゞ、人類が實驗遺傳學の研究に曾て示されざりし熱心を將來に於てあらはすか否かが、この種の問題を解決する端緒を發見するだけである。

### 三人種的偏見

人種的偏見については夙に佛蘭西のフィノ氏 (Jean Finot) はこれを科學的問題として客觀的に研究することができるとし、人種的態度の内容と起源とを説明してゐる。これによつて、人種的偏見乃至人種の鬭争が科學的に客觀的に研究されうるとする感を起し、文化的人類學者の蒐集せし資料と研究方法と相まつて、人種的偏見の研究を開始する機運となつた。こゝに於て、トーマス氏 (W. I. Thomas) ツザニエツキ氏 (Filorian Znaniecki) ハルク氏 (Robert E. Park) ミラー氏 (Herbert A. Miller) 等の研究發表となつたが、殊にトーマス氏並にツザニエツキ氏は The Polish Peasant in Europe and America に於て人種間の風俗習慣などの接觸を究め、大いに問題を明かならしめた。なほ、ヤング氏は應用社會學誌上 What is



Race Prejudice ? なる論文を発表して、人種的偏見の正體を披開し、バルク氏は同じ誌上に The Concept of Social Distance なる論文を発表して人種間的態度を研究した。ルータ氏は一九二七年に公にせし American Race Problem に於て、矢張り人種間の問題を究め殊にアメリカに於ける人種問題を詳説した。

二の人種の間にはグンプロウキッチ氏の syngenetischen Gefühl と稱する感情が発生する具象的集團は抽象的社會若くは抽象的集團に對して同類相ひき、異類相撥く現象を呈する。ミラア氏はこの種の具象的集團に重きを置き、それから集團的感情も集團的對立も生ずるとして

A generalized social instinct is not adequate to explain all the conditions. No individual ever survived through society in general, but always by belonging to a specific group of which he was in his very nature an integral part and from which his social qualities are derived. In other words, the instinct does not come from the need of an association with people in general, but from experience with specific groups without which no indivi-

dual has ever survived (H. H. Miller, Races, Nations and Classes, p. 4) と語つてゐる。ミラー氏の *specific group* はグンプロウキッチ氏の *syngenetischen Gruppe* のことであり、私の「具象的集團」と同一義である。人間の生存はミラア氏の言ふが如く一般的社会 (general society, general group) に於てなされるにあらず、往古今來、特殊な集團 (*specific group*) に於てなされた。人間は素より孤獨で生活の能力なき生物である。人間は特定の集團に入り込むことによつて保護せられ生存をなした。特定の集團の中で、仲間と共に食物を採收獲得するため、群によつて進退した。獲得した食物は共同の所有として仲間すべて分與した。その外、具象的集團のうちに生活する方が孤立せし家族生活をなすよりも子孫を残すに都合がよかつた。かくて、集團生活をなす人類は然らざるものと角逐して勝利を得、多くの子孫を残したであらうと想像される。人間の生存は素より個人的なるにあらず、個體保存の外、種族の保存を要するが、種族保存は個人生活によつては成し遂げられない。こゝにも、集團生活が起つてくる。集團生活によつて個人の生存を保護するのみならず、種族の生存をも保障する人間はヨリよく生存をなし遂げ、適者残存として、その足跡をとどむることがで



きた。こゝに、特定の具象的な集團に執着し、それに忠誠を勵み、それと共に進退する性質が發露した。これがグンブロウキツチ氏のシンゲネチツシエン感情となつて現はれたのである。人間は抽象的な一般的な集團社會に於て生存するにあらず、特定の具象的な集團に於て生存する。よつて、國家内の小集團は國家といふやうな抽象的の包括的集團に於て生存するよりも、その所屬集團に於て生存するといふ感が強い。これ、平時に於て、大集團たる國家の利害よりも、小集團たる政黨、學閥、財閥、組合の利害の方が強い所以であり、これ等の小集團は屢々政黨や軍閥の利益のために國家の福利を犠牲になし、學閥や商業團體の利益のためには國家の利益をも無視度外するが如き行動を敢てする。平時政黨は國家に住むよりも、政黨内に住み、商人は國家に住むよりも商人團體内に住むので、夫々特定の具象集團の利害を最先なりとなす心情を發露する。こゝにシンゲネチツシエン感情が現はれ、ミラア氏の specific group による感情乃至性情が生ずる。如何なる人間でも、社會一般といふが如き抽象的形式に於て生存せず、各特定な具象的集團に所屬し、それから個性をえ、特殊な性格を得て、その組成要素だと感ずる。よつて以て、特殊的集團に忠誠を勵み、それと生死進退を共にする性情を獲

得する。かくの如き具象的集團による生存は、それを組成する個人をして各その部分たるを感ぜしめ、集團即ち個人、個人即ち集團といふ性情を獲得させる。よつて個人と集團との分界は抹殺され、個人は何でも集團として言へば自分のことのように思ひなす。こゝに同氣相ひき、異類相撥く性情が現はれる。集團としての個人は同類ならざれば集團と同一視するをえざる爲め、「同等」といふことが集團人に對して絶大の制壓力を有するにいたつたのである。クーリイ氏はこれを Idea of Identity と云ひつゝる (Social Process, p. 278)。この同等は單に生物的生理的同等でも、單に社會的同等でもよい。ベルンハルト氏のいふ同等とは單に觀念的なものであるが、それでも、個々人が、それによつて同じであり同等であると想ふことができさへすれば足りる。同等なるものゝ實體は生物學的なもので、原形質に固着するものに限つたわけではなからぬ。一九一〇年 I. Bernhard 氏は其著 Das politische Gemeinwesen im preussischen Staat に於て波蘭人は生物學的意味で人種といふことができないが、十九世紀の終り廿世紀の始めに當り、獨逸プロシヤに對抗して、國民性を獲得するにいたり、國民として成立するにいつたと言つてゐる。この場合、遺傳するプロトプラズマに關する何ものもないのであ



るが、社會的に一の集團と想ふ性情を發露することができ、よつて一體として成立したのである。これに對し、クーリイ氏の「同一の思惟」は無論單に生物學的なものにあらず、社會學的たるでもあらう。かやうな同一の思惟若くはシンゲネチツシエンなる感情は文化的差異の著しいこの國民、人種の中に、意識的若くは無意識的に潜在し、絶えず勢力を揮ふが、時あつてその傾向を揺り動かす如き事情を生ずれば、一層そのはたらきは顯著となり、時に暴威を逞ふして相殺傷する。たとへば、國民的感情の疎隔、好戦國民であるとの想像、軍事的能力の秀拔であるとする脅威、勞働賃金の低下など、いふ事情が手傳つて例の米國に於ける排日が猛烈を極めたのもこれがためである。政治的猜忌、經濟的利害などによつても集團心が煽揚される。こゝに同一の思惟によつての生物學的社會學的傾向が威力を逞ふす。

海野は主として集團的感情を集團的本能に基く遺傳的なものとするが、グンブロウキツチ氏はそれを穴勝素質によるものとせず、寧ろ環境の結果出現せしものとして、*Denn ein solches Gefühl kann unmöglich ein angeborenes, es kann nur ein anerzogenes, ein angewöhntes sein, das uns freilich durch Erziehung und Gewohnheit*

*(zweite Natur!)* als ein natürliches und sogar angeborenes erscheint. と言つて居る。この論點については海野は十分明細に先著「階級闘争の研究」第四章に述べて居り、同一の思惟、類同意識、シンゲネチツシエン感情の根據を「集團本能」(Herd Instinct)に歸して居る。トロツタア氏は集團本能を遺傳的のものとするに對し、ギンスベルグ氏の反駁あり、再び海野の反駁も先著に明かにされて居る。よつて私は今茲に何の證據を提供することなしに、集團本能は生物學的のもので遺傳的也と斷言する。

具象的集團はそれに所屬する個人が生きるか死ぬるかか死ぬるかか集團で、言はば、個人はいづれも生きたがために具象的集團に寄托したのである。個人的生残は個人に依るよりも、集團に依らなければならぬから、個人に對しては集團の生残と存続とが個人よりも大切であるとするイルージョンを起す。個人が獨力生存することができないため、仲間生活をなすにいたつたのであるが、仲間生活によつての保證が前線に現はれ、却つて、目的たる個人が後景に退いて、手段化するにいたつた。この錯覺は強く人類意識に根をはつて居り、習慣として傳統として繼承され、人間社會を支配するが故に、個人とその生存とが目的であるとする思想はもう一度明かに認



識させなければならぬ。これが私の「社會の偶像」を打破する策戦となつて現はれるのである。兎に角個人とその生活よりも、集團の生活が主であり目的であるとする錯覺が生じた後の人間は本能により若くは半意識的に想像により傳統により習慣によつて然か信ぜしめるにいたつた。かやうな性情は素質にその根據をもつと思はなければ、その強烈なる壓迫力を理解することはできぬ。ミラー氏も海野の如く具象的精神をもつて生物學のものであると解し、

Instinct or urge, or predisposition, or wish is a product of the evolutionary process which persists both the biological and psychological organization of the individual. It originated through the selection of spontaneous reaction which enabled the individual to survive *иначе* *или* *и* Such a driving emotion could only be held as the fulfillment of a basic impulse, never derived from the abstract reasoning. Each individual unconsciously postulates his own existence in the continuity of his group, because in the struggle for survival there was no other possibility of existence *и* *или* *и* *или* *и*。集團的生存なる

ものは、抽象的な論理によるものでなく生物學的原形質のうちへ織り込まれた具體的な性情による。論理よりも感情が人生を支配するといふ義はこゝにも明かに指し示される。この場合、個人は集團人として行動する外何事もなし能はぬのである。クリーイ氏の idea of identity や グンプロウキツチ氏の Idee des Gleichheit は類同意識の邊に等しく注意するもので、集團人を制壓するものは「同一」である外に何でもないとす。こゝに、同一でなければ必ず反撥するといふ人種的反情の根據がある。

同一思惟の發現するところ、最も強き反情が起り、人種はこれが爲め生きるか死ぬかの闘争をなす。

#### 四 白色人種と黄色人種の闘争

血に於て異なる人種間には融和乃至協調は行はれない。「同一」の條件が欠けるからには、そして、血の異なることが、集團にあつても最大最高の事件であるからには、異なる人種といふことによつて（異なる血統に屬するもの）生きるか死ぬるかの闘争が行はれることは避けがたい。屢



々、白色人種と黄色人種との反目が亡霊となつて、西洋人を脅かすのもこれが爲めである。

西洋の學者は最も優等なる人種はアールヤ民族だと考へる。白人種、殊にアールヤ民族が最も優等人種であり、それには古くは希臘人、羅馬人が屬し、現今ではチュートン人種としてのゲルマン人、ケルト人、スラブ人、北歐羅巴の諸國民、米國人がそれに屬するとなし、これ等の國民が地球上の最優等人種として支配的地位を占得しなければならず、その他の人種は時に死滅した方が却つて人類全體の向上發展のためには都合がよいとさへ考へる。ダルウキン氏の生存競争適者生殘の理法に従へば、比較的下等人種たるべき黄色人種以下は滅亡した方が世界文化發展の上に裨益あるべく、従つて、これ等の諸人種を滅亡に導く如き行動をとることも生物學上許さるべきであると考へられる。チュートン人は、アールヤ諸人種の工合のよい混合の産物で、十九世紀の文明建造者だとチャンバイン氏は考へる。チュートン人は丈が高く頭が長くて、創造的で、ねばり強く、勇氣に富み、自由を愛し、忠誠である。自由と忠誠とはゲルマン民族の特質をなす。ルートルも、カントも、ニュートンも、シャイレマンも、シエーキスピアも、モンテスキューも、ウアグネルも、チュートン人であつた。チュートン人の文明への

寄與は偉大なもので、他人種の遠く及ばざるところであると言ふ。

個人が集團に所屬するから、個人心理は集團心理となつて現はれる。何でも自己集團に屬するものが一バン偉く尊いと考へる。自己集團の吹聴はいづれの人種いづれの國民にも附隨し、影の形に従ふが如く必ず隨伴して離す事ができない。米國の商業會議所は自國の人口を餘計に計算することに一致するといふ。そして、國勢調査の數字が期待せしものより少いと言ふて非難しつゞける。東部歐羅巴の諸國のうち、異人種によつて構成せられて居るところでは各人種互に、その多數なるを主張し合つて下らず、互に同一人種同一國語を用ゐるものゝ多數なるを主張し、各自優勢を固執して下らないといふ。米國を旅行せし波蘭女は米國は全體として波蘭語を話す國民であると報告してゐる。アメリカ人はボストン、クリーヴラント、市俄古では皆英語を喋舌ると思つてゐるが、實はその半分も英語を用ゐてゐない。ラブランド人は歐羅巴人の入り込み來るを見れば、歐羅巴人はラブランドの善良な風俗習慣を見習ひに來たと考へるといふ。かくの如く人間といふ動物は實に話にならぬ自惚動物で自己集團に對し誇大妄想を逞ふして下らぬ。自分のまわりを世界が回轉するものゝ如く考へて、何でも自分の價值を最上と見、



地球は自分のためにのみ造られてゐると信ずるのが人間の人間たるところである。

この流儀で諸人種は自國人だけが最も優等な人種だと思つてゐる。皮膚の色などと言つて馬鹿にできぬ。私は米國で排日を反駁する米國人の演説を聞いたことがあつたが、その演説者は白人種と黄人種との差別は單に皮膚の色の問題であつて、皮一枚ひきむけば兩者の間に何の異つたところはないではないかと言つて、不合理なる東洋人排斥を非難した。但し、皮相淺薄だと考へられる皮膚の色が、人種的反情に對しては實に重大問題で、抜くべからざる強烈な感情を發露し、排斥するにも、排斥せられるにも、一番重大事件だといふ印象を與へる。殊に、白人種は黄い皮膚が下等で下賤であると考へて輕蔑し嫌忌する。白人は、東洋人を眞に輕蔑してかゝつて居る。如何なる人種と雖も皮膚によつて相手方の人種を嫌忌し差別するに變りはない。白人が日本人や支那人を輕蔑するが如く、日本人は又正直のところ、色によつて黒人を嫌忌し差別して、それに接觸することさへ嫌つてゐる。何人も米國で汽車旅行中、ニグロが寢臺をのべてくれるのを決して心地よいとは思はぬであらう。こゝに、皮膚の色によつての反情が起り、嫌忌が生ずる。この事は理性によつて行はれず、本能によつて行はれるが故に、如何な

る人道家と雖も如何ともすることができない。たゞ、嘘を言ひ、或は顧みて他をいふだけのことである。本音を吐かすれば、ニグロは忌だと考へてゐる。何も米國人が殊更日本人や支那人を毛嫌ひするのではない。いづれの人種と雖も皮膚の色によつて嫌忌し差別するに變りはない。

然らば、皮膚の色を絶滅せずして排日もやまらぬし、又、人種に關する面倒な國際問題も終熄にをもむかぬであらう。これ程、皮膚の色が猛烈なる勢威を以て人種的反感と反情とをよび起すのである。皮膚の色を絶滅するには先づ諸人種間に大規模なる混血が行はれなければならぬ。それには、未だ實驗遺傳學の知識が幼稚であるため、混血して人種的反感を緩和し進んで人種間の融和をなし遂げ、協調を圖ることができない。皮膚の色によつて排日をなすが如きは非理であると言つて人道家は絶叫するけれども、人種的特質中、皮膚の色が最もよく目だち且變化しない爲め、これが最もよく「同一」若くは「同等」によつて牽引しその反對によつて反撥する具象的集團の本質によつて、基本的な差別的表彰となるのである。

かくの如き理由で、白人種と黄色人種との嫌忌排斥鬭争は到底終熄しない人間界の一大病患



である。將來と雖も人種は單に皮膚の色によつて相闘ぎ相争はざるべからざるか、この課題に對しては集團學說上然りと答ふる外はない。人種的特質のうち重要なと然らざるとに關はらず、單に「見立つ」といふことだけで、類同意識を喚起するから、皮膚の色によつて人種間の反撥闘争を呼び起すことあるべきは自明であり、これ以上、人種間の反感を生ずる原因としてはなからうと思はれる。表面、白とか、黄とか、黒とかいふ表章により、各絶對に異ふと感ずるところに、抜くべからざる異類反撥の心理が現はれる。然らば、一見明白なる皮膚の色は人種間反撥の最大原因たるであらう。何故皮膚の色がそのやうな著るしき差別の原因となるかといつて問ひ質す必要がない。それは素より理性によるものではなく、感情により本能に因るのであるから、一見黄い黒いといふ意識だけで、乾坤一擲の一大悲劇が行はれるのである。これによつても、人間は決して理性的動物にあらず、感情動物であり、本能によつて右にも左にも翻弄せられる動物なるを知る。

### 五人種の接觸

世界の諸人種は前代未聞の接觸をなしつゝある。交通通信機關の發達せし今日、世界の諸人種は前代に於て想像すべからざる程の容易さと迅速とを以て接觸し、或は交驩をなし、或は紛争をなしつゝある。世界諸人種の交通、接觸は廣大で不可避であるが爲め、世界的過程として取扱はざるべからざるにいたつた。新なる通信交通機關の發達する毎に、諸人種間の接觸は増大され、競争と闘争とは到るところ繰り返へされつゝある。前代未聞の規模と程度に於て諸人種が接觸するのであるから、紛擾と闘争とは曾て類例のないものであらうが、接觸によつて、諸人種間に融和協調の度を進めしことも亦見免すことはできない。これ等の紛擾と争闘とを通じて、絶えず新たなる人種や國民の結合ができ、提携が行はれる。交通、接觸は紛擾と闘争とを齎らす、また、愛好と協調とをも生む。交易、商業が世界の各所に行はれるに連れ、人口の移動あり、分業が一層増進して行く。新たなる經濟組織が出来れば、それに伴ふて新たなる政治組織ができる。諸人種諸國民の接觸によつて經濟上の競争となり、物資の争奪となるが、競争は單に物質的範圍に限られるにあらず、政治上の特權、社會上の地位、榮譽、表章なども争奪の對象となり、紛々擾々、世界の四隅まで争ひの響きが傳へられる。かくて諸々の人種、



國民は(一)接觸をなし、(二)競争をなし、(三)自他協調し、(四)融合する過程を繰り返す。

人種の接觸によつて現はれたものは、抽象的には接觸、競争、協調、融合であるけれども、具體的には、(一)皮膚の色といふが如き顯著なる表章によつて類同意識を刺戟し、異なる人種、國民の間に反撥闘争を惹き起す。(二)經濟的關係、社會的關係、政治的關係を通じて諸人種、諸國民は競争をなし、従つて、軋轢をなし、人種的偏見を惹き起す。(三)國內の諸集團は漸次集團圏を擴大して一致の歩調をとるが、平和なる間は蝸牛角上の紛争は絶え間なく行はれる。(四)國外諸集團は集團圏の擴大に連れ愛好と協調とに入る。

全體として、諸人種諸國民の接觸は後に述ぶるが如く相互の意志疏通となり、超集團的態度を生じて集團間の愛好と協調とを擴張、よつて以て諸人種諸國民の融和協調を促進する。

## 六 人種間協調の生物學的根據

社會的傳統の場合その類似若くは同一によつて融和協調が行はれるのが原則であるならば、

人種間の協調は又究極に於て人種間の交雜の問題まで進めなければならぬであらう。何となれば、究極に於て融和協調問題は血の問題に關係するからである。諸人種間の血統をその儘となしをき、異なる生物學的形體の上に融和若くは協調を策するも、蓋し望みなきことであらう。皮膚の色の差異が何故最も人種間の悪感を挑發するかと言へば、それは人種を區別する最も明かな看板であるからである。無論、その他に重要な人種的差別はあるけれども、一見輕微だと思はれる皮膚の色の異なることが、人種間の愛好と協調とを齎らす大なる障害となつてゐる。然らば、諸人種、諸國民間の協調はその生物學的根據にまで溯らざるべからざる理を發見するであらう。

我國では、ただ、少數同胞の問題が差別と偏見との名に於て囂々論議されて居るが、單に少數同胞のみを切り離して問題の解決を圖らんとするものは決して有効なる方法ではなからう。國內には無数の被壓迫者がある。一の集團は他の集團を必ず蔑視し差別する。差別と偏見とはただ少數同胞に限り行はれるものではなく、二の集團が對立しさへすれば必ずその一が他を差別し偏見を擅にするのである。一般國民は少數同胞に對し、資本家は勞働者に對し、官學は私



學に對し、甲の政黨は乙の政黨に對し、甲の縣人會は乙の縣人會に對し、甲の學會は乙の學會や協會に對し、熟練職工は不熟練職工に對し、男は女に對し各差別待遇を與へ、偏見を擅にしてゐる。いつくにも、集團間に差別と偏見とのないものはない。然らば、少數同胞のみをその他の一般差別問題より切り離して取扱ひ、その解決を圖らんとする方法は聊かも効果あるものでないことが分らう。

個々の差別問題は一般差別問題よりの派生であり、分出である。一般に差別問題が解決せられるとき、個々の差別問題も亦解決の緒に就くのである。一般的差別を解決せずして個々の差別を解決する場合を想像すれば、一時それが多少効果あるが如く見えても、差別問題一般が解決せられずして、その儘残つて居るのであるから、そこから又芽をふいて差別が再燃するであらう。一般的差別をその儘になしをく個々差別の解決は瞬間的利那的で、効果あるを知らず。然らば、現今、融和運動家がなしをるが如き少數同胞問題を單獨に取扱ふが如き方法は何の効果あるものにあらず、その無効に終るべきは今より豫見することができ。こゝにも、實際家によつての非科學的な思ひつき半分な方案の無効なるを見る。實際家は研究もせず、思ひつき

で十分であるが如く妄想し、殊に現今の如く社會事業界の物知りや顔役といふ素人達が科學問題をも取扱ふが如き能力あるを妄信するが如き利那に於ては無効な金つぶし暇つぶしの妄動が融和事業界にも繰り返へされるは毫も異例ではなく、従つて不可解ではない。

よつて、融和問題は少數同胞問題より一轉して、一般的差別問題を抱擁しなければならぬ、一般的差別問題は即ち具象的集團間の問題で、一般に集團的差別を對象とする問題である。少數同胞問題、黄色人種問題、學閥問題などが續々登場するが、いづれの差別問題を取つて見ても、その解決は殆んど不可能なるが如く思はれる。ただ、少數同胞問題の解決が困難であり、不可能である如く思はれるのではない。人種問題の解決も困難であり、一見不可能なるが如くである。排日問題は容易に終熄せぬ。それに、日本人は好戰國民であり、殊に日露戰役に於て示せし如き軍事的に優秀なる國民であるといふことで、疑心暗鬼を生じ、黃禍説を流布して、益々排日感情を煽揚した。黃禍に關する疑心暗鬼の根ざすところ即ち競争し角逐し、兩者互に他を絶滅し合ふ。集團感情の背後により、強く見ゆる黃人種は危險に思はれ、疑心暗鬼が生じついに黃禍説となつて現はれるのである。かゝる無稽な説が西洋人に妄信せられるもの、集團



本能による集團感情からである。有色人種は白人種より嫌忌せられ、虐待せられて、人間であると思はれてゐないやうに見える。日本人は強く敏い人種であると思ふが、到底、白人に比べものにならぬ劣等な人種だと考へられて居る。理性によつて、西洋人と日本人との間に差異がないときめても、感情ではどうも日本人は下等に思はれ、下劣に考へられてならぬであらう。人種間の評價は理性によつてなされずして、感情によつてなされるから、いよ／＼以て、日本人は下劣な人種であるといふことに相場が決まるのである。威武堂々たる日本人にしてかくの如し。黒人の如きは表面如何に装ひ繕らうとも、畢竟、白人と比べものにならぬ劣等なものとして居ることは確かだ。

かゝる熾烈な人種的偏見反情が如何にして發生するかと詮索すれば、その根據なるものも漸次明るくなるが、それでも感情に基礎を置いて居るから、手のつけやうがない。同一の言語、同一の風俗習慣、同一の道德、同一の宗教、同一の政治的境界を有つものは、いづれも類同意識に燃え、差別意識が勃然として起つてくる。然らば、單に言語、風俗習慣、道德、宗教、國境の相異はそれ程深刻な差別意識を生ぜねばならぬかと言へば、質の差異によりその間上下、

高下を議する餘地がないと思ふ場合と雖も集團感情による差別意識は不可抗の威力をもつて勃興してくる。外國人の間には差別意識が生ずるが、それは音聲が異ふ、身振りが異ふ、風俗が異ふといふ外、何の理由もない場合にも、どことなく對者が氣に入らぬし、卑く見えてならぬのである。こゝに、差別意識が不知不識登場する。如何にして差別せざるをえぬのであらう。差別するのが悪いの不都合だのと言つても、造物主が差別すべき生物に人間を造つたので仕方がない。個人が差別してゐるのではなく、個人に内在する集團魂が差別させるのである。

理窟から言へば、言語に於て、風俗習慣に於て、道德に於て、宗教に於て、國境に於て差別する理由なしと決めても、「どこともなく」差別がしたくなり、又、事實差別するのである。強いて、この「どこともなく」を押し切つて、自から説得して見ても、まだ、どこともなく晴れやらざる思ひが残る。こゝに、いつの間にか血の差異が現はれて居る。血の異つたもの、人種の異つたものは融合せず、差別するにきまつて居り、従つて、差別をするのだといふことになる。然るに、再び皮膚の色がそんなに重大なる問題であるか、それは異人種互に猛烈にして残酷なる鬭争をなし殺し合はなければならぬ出來事であるかといふことになれば、呆然自失す



るのみである。理性は一度びかゝる問題を提起するであらうが、理性が何といつても、何と囁いても、どこことなく有色人種は劣等に見えて仕方がないのである。六億もある黄色人種であるけれども、この大衆は八億の白人に對しては何の値打のあるものとも思はれぬ。文化も低いし生活も賤しい、道徳も下劣であるなど、思はれてならぬ。そこに理窟がないと見るや、今度は血が異ふと考へ、こゝに最後の差別意識の根據を置く。この根據も亦理窟によつて維持されぬし、また、現今、科學的にも確證しうるやうな人種優劣の根據なるものもない。かくて、人種的偏見、反情の根據は残りなく覆される。然らば、人種間に差別事象なるものはなくなるかと言へば、毫もなくならぬし、また、その影を少しも薄くはしない。いつでも人種的差別は依然たり嚴然たり矣。

これによつて、差別問題の解決殆んど困難に立ち到るを知るであらう。根本的方案まで行つて、一般差別問題としての集團的態度を對象とすれば別であるが、差別の一問題としての某々階級集團問題を切り離して取扱ふ場合、人種差別問題と同じくその解決は殆んど不可能に見える。なぜなれば、それは理窟の問題ではなく、感情の問題たること、人種的偏見によつて指し示

せしが如くである。いづくにも某々階級集團に對し偏見を以てのぞむ理由なしと論定しても、未だど、となく異ふとする感情が蔓り、如何とも策の施しやうがない。實は差別問題は理性に對するものにあらずして、感情に對するものである。差別の不都合なる説法や、すべての合理的方案や、合理的施設の一切無効なる所以はこゝにある。現今、融和事業家、融和運動家は如何なる方法によつて居るかと言へば、そは一から十まで合理的計畫に終つて居り、感情を對象とするものは一もない。こゝに、融和方法の根本的な謬想があり、現今見るが如くその効果見らるべきものなき理由も亦こゝにある。よつて、融和事業をして効果ある如きものたらしめんとすれば、科學にその基礎を求め、集團感情、集團本能、具象的集團に對して方策をめぐらす外に策はないであらう。

なほ、閥の偏見と差別とについて見るも事態は少しも異つて居らぬ。そこに、いろ／＼理窟が提起せられるけれども、それは餘分な添物で、いつでも集團感情が跋扈して然るのである。

この頃、やかましい行政整理と稱するものを見るも、一に集團的立場によつて、縁日の商人



然と、整理が賣物買物となつてをり、懸引によつて取引が行はれつゝあるを見る。政府閣、與黨閣、軍閣、各省閣が夫々獨り自己集團の立場からのみ懸引を行ひ、毫も國家的觀念の發露を見ることができない。整理案に於て、軍閣が最も大なる讓歩をしなければならぬのは國論の一致するところであるが、軍閣が横暴で、強力で、政府を解散せずしてそれを打ちのめすことができない。そこで整理案にまで弱者いぢめが現はれて居る。拓務省廢止、農林省商工省併合案といふのがそれである。井上藏相は行政整理の徹底を期するには如何なる反對あるも斷乎として省廢止を斷行しなければならぬと言つて居るが、大藏省廢止ときまるとすればそれでもよい國家的見地は止むを得ぬと井上藏相は言ふであらうか。農相、商相、拓相と選を異にして、藏相だけは大臣をやめるに勇敢でありうるか奈何。國民中一人として井上藏相に限り虚心坦懐であると信じないであらう。行政整理は濱口若槻内閣の金看板であるから實行しなければならぬが、それは能率増進、事務簡捷、民間の利益といふことで決行すべきで、たゞ五、六年度以降の赤字補填のため一千二百萬圓の節減をはるためになすべきではないといふ。然るに、赤字補填のため同僚大臣をやめて貰うのであれば、海軍省と陸軍省を合併して國防者となし、陸海大

臣にもやめて貰ひ、鐵道省と遞信省とを併合して、鐵相、遞相にもやめて貰はなければならぬかも知れぬ。ぜんたい、如何なる根據によつて昨今同じ若槻内閣の拵へた拓務省を廢止するといふ口實を發見するのであらう。前の若槻内閣は國策上、殖民政策の遂行上なくてはならぬと稱して拓務省を新設したのであるのに、今の若槻内閣は豹變して廢止すると言ふのであるが、それではあまり朝令暮改にすぎはしないか。但し、政府や政黨の行動が出來心や、一時の便誼や、政略によつてなされると相場がきまつて居るから、拓務省廢止は朝飯前で敢て不合理ではないかも知れぬ。よつて、獨り若槻内閣を責むべきではなからう。併し、これによつても、如何によく集團的な氣隨氣儘が隨時隨所に勇敢に斷行せれるかを知る。畢竟、拓務省廢止に何の理由もないが、廢止するとすれば弱者たる大臣が居る省ならずば實行ができない。農林、商工兩省を合併する位なら、何故、鐵道省と遞信省とを合併して交通省としてはならないか。また、何故、陸海軍省を合併して國防省としてはならぬか。但し、交通省については江木鐵相の威壓で沙汰止みとなり、國防省は軍部の反對を恐れて暗に葬り去り、無力な新大臣の坐つて居る拓務、商工省、農林省の併合廢止を行はんとする腹案であると言はれる。廢止併合案のうち



へ交通省、國防省だけは實施を見合すべしとする確手たる理論的根據がありとは思はれぬ。拓務省は昨今同じ内閣の新設にかゝり、農林商工を一省に併合すれば、時に農、時に商に偏する恐れあり、廢合のため各部内既存機關を縮小し、廢止によつて事務を澁滞せしめ、財政にも利するところがないと言はれる。これによつて、單に赤字補填といふ大藏省の利己主義と、それに占據する首脳部が自己の位置の保障あるを幸ひ、他の弱き新閣僚をいぢめる外に意味のないものとも見られる。赤字補填位で省の廢合が易々實行できる國柄も可笑いが、その時の都合次第、その時の強者の胸勘定で何でもやれる世態に願れば、別に例外でも不思議でもないであらう。省の廢合に關しては既に貴族院一部の議員間に物議を醸し、農林省については農林出身議員よりなる農政研究會、前政務官、現政務官の反對があり、今後形勢の開展如何によつて實行難に陥るかも知れぬが、然る場合にも、何にも理窟などのためではなく、たゞ、一層強い力の出場によつて退却を餘儀なくされるまである。これを懸念して井上藏相などは省の廢合の實施を急いで居といふ。自己の立場より自己集團の立場よりのみ見る世態はこゝにも開展し、相も變らぬ利己主義が臆面もなく見參する。

軍閥は異常の不景氣にも拘はらず、國民の生活を脅威しても、勝手な理窟に立籠つて緊縮をしないといふが、是又、力によつて集團的な非望を遂げる一例である。鐵道省と遞信省とを併合しないのも力であつて、理窟ではない。整理をする氣なら弱い新大臣の坐つて居る省のみに限らず、少くも拓務、農林、商工、鐵道、遞信、陸軍、海軍にわたらなければならぬ。

かゝる不用意な出來事にさへ、集團本能による偏見と差別と利己主義とは鮮かに示されて居る。新大臣の反對意見も利己主義なら、井上藏相等の廢合に勇敢なものも利己主義の顯現であらう。いづくにも集團的利己の跋扈するのが人間社會の常態である。

集團本能、集團感情の本據は生物學的な素質と、その遺傳とである。集團感情は先天的な遺傳に關するものであるから、單に理窟や説法によつて如何ともなすことはできない。人間は徹底的利己主義者であり、我儘勝手な振舞をもつて常に他人、他の集團、殊に、弱小集團を虐げ、これを奴隷とする。軍部は國民を奴隷視し、たゞ軍備のみの辻褄が合へば、國民が食へないでも幸福であるはづであるといふ筆法である。かくて、軍閥によつて國民が虐げられ壓制される。軍閥の勢威獨り盛なるときは如何なる我儘勝手な振舞も通るから、利己的人間の集團た



る軍閥だけが公平であり正義であるべきはづがない。こゝに軍閥によつて國民は奴隷たる境涯に沈淪し、國民の好むところに反し、軍閥は軍備一天張、一本調子で命令を發しつゞけることができる。政府では、國民の利益に反しても、緊縮政策を押し通して、其面目をたてさへすれば宜いといふ筆法で自己集團の利益のみ維れはかり國民の福利を眼中にをかざるが如き姿態を呈す。軍閥といひ、政府といひ、特に横暴惡辣なものではなく、いづれの集團でも生物的に事こゝにいたらなければならぬやうに出來上つてゐるまである。然らば、如何なる集團にあつても、政府や軍閥の利己主義を非難する資格のあるものは一もあるまい。

國內無數の小集團、國家、人種間の反目鬭争は一に生物學的根據からくる。かゝる排他心は最後には血の問題に極るから、血の異なる人種間に平和と協調のあるはづがない。すべての社會的傳統と遺傳的素質とに基き、同一若くは類似するものは一團となつて愛好し協調するが、異なるもの若くは類似せざるものは又寄り集つて反目し鬭争を事とする。

### 七 人種的類同意識

以上、縷説するところによつて、人種的類同意識が生ぜざれば、竟に人種間、國民間、集團間の協調は望みなき所以を知るであらう。但し人種的類同意識といふやうなものは結局實現不可能であらうから、人種間の協調はもとより、國民間の協調も、大小集團間の協調も、ついに不可能と見る外はなからう。たゞ、ある程度の融和協調は集團間に行はれるであらう。諸人種の文化は流通し、社會的傳統は統一に向ふでもあらうから、諸集團、諸國民、諸人種間に類同意識を高め、それだけ協調と平和が入來するであらう。併し、文化、傳統の同一といふことにも限度があるから、竟に人種的類同意識といふやうなものが發生すかどうか分らぬ。ただ、小集團の間に類同意識の成立する事については疑をいれぬ。國內諸々の小集團は「同一思惟」の程度まで接近することができると考へられるであらう。この事については世界諸國民、諸人種間に於ては傳統文化が凡て同一なりうると考ふることは能きなからう。従つて人種的類同意識といふ程のものは竟に現はれぬであらう。國民間の融和及協調にも限度があらう。結局、世界的諸國民は國民的類同意識の成立の下に融和し協調することができるとは考へがたい。

然らば、世界諸民族、諸國民、諸集團は一定限度の融和をなし協調をなし得るのみで、全體



として世界はいつまでいつても闘争、修羅の巷としてつゞくであらう。たゞある程度の融和と協調とは自然に進められるでもあらうし、また、人爲的に進められるでもあらう。

### 八 人種的集團生活の悲劇

人間の集團生活は人類の生活に暗き影を投げるであらう。仲間生活をなす人間は仲間との争ひを十分克服することができずして、争ひつづけなければならぬ運命をもつ。併し、それにしても、人間は利己的であると共に、愛好し合ひ、少くも共同心をもつから、利他心も亦少からず發露するに違ひない。この事は現今でもさうである。オツペンハイマア氏は人類社會には闘争と共に協調も行はれるとして、*aber es ist ebenso einseitig, das Gemeininteresse und die ihm dienende Tätigkeit des entfalteten Staates nicht zu sehen oder abzulenken* と言つてゐる。人類社會を闘争の一に歸するものも誤りであるが、協調の一を以て説明するの亦誤である。オ氏は人類の生活は闘争と協調との併立若くは混合であるとして *Der Staat ist eben ein Mischform menschlicher Beziehungen* と言つてゐる。海野も亦人類の歴史

を以て闘争と協調との歴史とするが（拙著「階級闘争の研究」第一章）人類社會より残りなく闘争を驅逐し去つて、オツペンハイマア氏の想像するやうなただ經濟的手段だけあつて權力暴力なき自由社會なるものありと考へることはできないとする。人間社會には終始集團と集團とが分立して闘争が繰り返へされる。集團分立の事實さへなくなれば、融和と協調との世界の實現を期待することができが、集團分立の消滅は如何にしても考へうべからず、従つて、全く闘争なき社會を想像若くは期待することはできない。一切の社會的傳統が世界を通じて同一になるといふような無法な想像を逞ふすることもできないし、世界諸人種が混合して形跡を止めないやうになるといふやうな空想を弄することもできない。こゝに、人類社會に對する暗影があり、人間はついに地球上より絶滅するのではないかと想はれる。現今、隆盛を極むる西洋文明も恐く遠からず集團的争覇と闘争とのために没落するにいたるであらう。それに代つて如何なる人種が世界に覇權を握るか知らぬが文化の發達があればある程、人類の破壊力も大となるであらう。西洋文明の發達は寧ろ凄まじいものがあつたが、西洋人はこれを悪用逆用することによつて一層その死期を早めるであらう。世界諸人種間に集團的利己とそれに基き現はれ



る暗影が消失しなければ、世界と人類との不安は毫も減退しないであらう。西洋文明滅亡後の諸人種の争覇とその闘争とは毫もその色調を變へず、相も變らず、集團の惡辣なる利己主義が跳梁するであらう。かくして、世界の諸人種は一樣に衰退し或は死滅するであらう。人類の仲間生活によつて開拓せし集團生活の最後は恐く悲劇に終る外はないであらう。

## 参 考 文 籍

1. 海野幸徳「階級闘争の研究」
2. 海野幸徳「閻の偶像」
3. 海野幸徳「日本人種改造論」
4. 海野幸徳「軌近の社會事業」第十五章「優生學的社會政策」
5. Gobineau, Essai sur l'inegalite des races humaines.
6. Chamberlain, Grundlagen des Neunzehnten Jahrhunderts, 1899.
7. Ammon, Die Naturliche Auselese beim Menschen, 1893.

8. Galton, Hereditary Genius, 1892.
9. Galton, Inquiries into Human Faculty.
10. Pearson, Grammer of Science.
11. Pearson, The Scope and Importance to the State of Science of National Eugenics, 1909.
12. Woods, Mental and Moral Heredity in Royalty, 1906.
13. Ellis, Men of British Genius.
14. Odin, Genese des grands hommes, 1895.
15. Sorokin, Social Mobility, 1927.
16. Sorokin, Contemporary Sociological Theories, 1928.
17. Boas, The mind of Primitive man,
18. Grant, The Passing of Great Race, 1916.



19. Stoddard, The Rising Tide of Color. 1920.
20. Gregory, The Menace of Colour.
21. McDougal, The Group Mind, 1920.
22. Miller, Races, Nations and Classes, 1924.
23. Hankins, Racial Basis of Civilization, 1826.
24. Young, What is Race Prejudice, Jour. of Applied Sociology Vol. X.
25. Park, The Concept of Social Distance, Jour. of Applied Sociology, Vol VIII.
26. Hankins, American Race Problem. 1927.
27. Schmallyer, Vererbung und Auslese 1827.
28. Oppenheimer, Der Staat, 1926.

## 第七章 人間の生理能力による豫測

### 一 人種の生理能力と人間生殖の減衰

人類の將來の運命奈何。人間は鬭争と協調を行ひながら進んで來たが、生物學的法則の支配を免るゝ能はず、茲に若干の生物學的考察を附加することとする。

人間の生殖力減少と人種の生理能力とを關係せしめ、人口増加の減少は生理能力の減衰によるとなし、英國の John Brownlee 氏、伊太利の Corrado Gini 氏はこの説の優れたる支持者となつて居る。

Brownlee, Decline in the Birth-Rate and the Fecundability of Women, Eugenics Review, XVII (1926), 258—74.

ギニ氏は諸々の論文に於て生物學的要因を支持主張し、生殖の原因に關する總ての關係と、動物飼養の結果は飽食と安易なる生活は生殖力を減衰するものだといふことを結論した。



National Birth-Rate Commission に於ける人間生殖力の論議に於て、ブロンレイ博士説を支持せしものは Dr. A. K. Chalmers だけである。生殖力の生理的減衰説は到底人間の生殖力が社會に於て現はるる態様を説明することができない。諸々の國、都市、經濟的乃至社會的階級、宗教、都市並に農村の環境、人種等の間には顯著な人口増加の差異があるが、かくの如き差異は到底生理的に説明することはできない。そこに社會的原因があり、生殖はそれによつて左右せらるゝは明白である。

## 二 生殖の社會的原因

この道の權威たる E. Reynolds 氏と D. Macombe 氏 (Fertility and Sterility in Human Marriage) は家族の人爲的制限は一般に人口減少の眞の原因たることを結論して居る。この説は廣き經驗をもつ産科醫の一樣に左袒するところである。Ehel Elderton 女史 (Report of the English Birth-Rate, Eugenics Laboratory Memoirs. Vol. XX. pp 246) は徹底的に英國の出産率を研究し、生産率の減少は生殖力の生理的減衰に因るのではなく、一

般に傳播する家族の人爲的制限に起因すると斷定して居る。W. S. Thompson 氏 (Race Suicide in the United States, American Journal of Physical Anthropology, II, No 1. 97-146) も亦エルダートン女史と同様なる結論に達し、生殖力は諸々の原因より影響を受くるが、これは人種的不能によらずして、寧ろ個人的不能に因ると言つて居る。

これによつて、人間の生殖力減衰は生理的原因にあらずして、社會的原因によることを知る。すなはち、人爲的に生殖を統制し、生産を制限し、結婚を後らせるなど、任意的に制限することが生殖力減衰の眞の原因であるといふ結論に達す。

生殖力の眞の原因が社會的なものだとして、社會的原因なるものは數多くあるが、その中、顯著なものは經濟狀態、教育、都市化である。

## 三 經濟狀態

生殖力の減少と經濟との關係は Sanford R. Winston 氏 Baber an Ross 氏 (Changes in the Size of American Families, chap. IX, University of Wisconsin Studies, No.



10) Hornell Hart 氏 (Occupational Differential Fecundity, Scientific Monthly, XIX 527—32) の米國並に英國スコットランドの比較研究により、J. C. Dunlop (The Fertility of Marriage in Scotland, A Census Study, Journal of the Royal Statistical Society LXXVII, 259—88) のスコットランドに於ける國勢調査による研究により、J. H. C. Stevenson 氏 (The Fertility of Various Social Class in England and Wales from the Middle of the Ninetenth Century to 1911, *ibid.* LXXXIII, 410 ff) のイギリス並にウェールに於ける調査により、Fallquist 氏の 一八八六年に於ける調査により、Stewart 氏 (The Relation between Large Families, Poverty, Irregularity of Earnings and brooding, *ibid.* ZXXV, 539—50) の大家族について諸々の社會的要因に關する統計的研究による、Heron 氏 (Drapers' Company Research Memoirs, pp. 22) のロンドン區に於ける研究による、P. Sorokin 氏 (Social Mobility, pp. 351, 352) の米國國勢調査の分析により、Ederton, Barrington, Jones, Jones, Lamotte, Laski, Pearson 氏 (Or Correlation of Fertility with Social Value, Francis Galton Eugenics Laboratory Memoirs, Vol. XVII.

pp. 72) のイギリス並にスコットランドの材料に基づく研究により、Bertillon 氏 (Nombre d'enfants par famille, Journal de la Societe de Statistique de Paris, XXII. 130—46) のパリ、伯林、維納、倫敦の資料に基づく比較研究により、Lucien March 氏 (La natalite selon le degre d'assistance, Bulletin de L'Institut de International de Statistique, XI, XI, 163—76) のE国國勢調査に基づく研究による、G. Udny Yule 氏 (On the Changes in the Marriage and Birth-Rates in England and Wales during the Past Half-Century, Journal of the Royal Statistical Society, ZXIX, 88—132) の研究發表により安全に斷定することができる。これ等の説は何づれも生殖力減衰を經濟的原因に歸して居る。

#### 四 教育的 原因

教育と生殖力との關係は十分明かでないが、全體として、米國に於ける調査は多産と無學とが一致し相關々係にあるを示す。



カリフォルニア大學の學生家族を調査せし S. J. Holmo 氏 (Size of College Families, Journal of Heredity, Oct, 1924, pp. 406—15) 伊太利に於ける無學と出産率との關係を研究せし Del Vecchio 氏 (Brentano's article, The Doctrine of Malthus and the increase of Population during the Last Decades, Journal of Economic, XX 371—93) カンチ出身の女子と然らざる女子との比較研究をなせし M. P. Smith 氏 (Statistics of College and non-College Women, Journal of American Statistical Association, VII, 11—26) D. Heron 氏 (Drapers Company Research Memoirs) に據れば無學と多産とは相關するを示す。その他、長き教育的準備を要する職業に従事するものは小家族をもつことが證明せられた。

これに由つて觀るに、教育と生殖力減衰との間には相關々係ある如くである。

### 五 都市化的原因

都市化は生殖力の減衰を來すが如く、都市に於て一層人口を制限する必要を感じしむるが如くである。都市化が小家族の原因となることについては Hornell Hart 氏 (Differential Fecundity in Town; A Study in Partial Correlation, University of Iowa Studies in Child Welfare, Vol. II, No 2) のアイオワ州の郡に於ける研究、W. S. Thompson 氏 (Race Suicide in the United States, American Journal of Physical Anthropology, III, No. 1, 97—146) の一九一〇年國勢調査に基づく研究、E. M. East 氏 (Mankind at the Crossroads pp. 306ff) の一九二〇年の國勢調査の研究、Jean Bourdon 氏 (Les statistiques des familles norvegiens au recensement de 1920, Journal de la Societe de Statistique de Paris, ZXVIII-LXVIII, 9—15) のノ威國勢調査の資料に基づく研究、Lucien March 氏の佛蘭西の都市に於ける比較研究、J. A. Coghlan 氏 (The Decline in the Birth Rate of New South Wales and other Phenomena of Child-Birth, Sydney 1903) のニュー・サウス・ウェールズの統計に基づく研究によつて、何づれも都市化と生殖力減衰との間に相關々係あることが證明された。



## 六 宗教的原因

非新教家族は新教の家族よりも多産であるとの見解は研究によつて確められず不明といふ外はなご。W. S. Thompson 氏の米國に於ける非新教と新教との比較研究並に中西部及南部カレッヂ學生の家族に於ける研究、S. J. Holmes 氏の極西部カレッヂ學生家族の研究、T. A. Coghlan 氏のニュー、サウス、ウエールズに於ける研究、Hornell Hart 氏のアイオアに於ける新教並に非新教家族の大きさの研究は悉く新教家族の小産を立證するが、これは新教若くは非新教がその原因をなすよりも、他の諸々の社會的原因によるものと解釋せられる。この場合、寧ろ經濟的原因と教育的原因とが重きをなすと思はれる。よつて、或は宗教が生殖力を左右する一原因と見做すべきではあるが、他の社會的原因に重きを置く方が一層妥當であると考へられる。

併し、經濟、教育、都市が單獨に生殖力に影響するよりも、交互的に影響を及ぼすものと解釋しなくてはならぬ。經濟の上進に従ひ、教育の普及に連れ、都市化の進むに伴ひ小産にをもむきつゝあるが如く見える。無學は漸次減少するし、都市化は益々その歩を進めるし、収入は増加し、その欲望も分化するから、將來の生殖力は減衰する方向にあることは明かである。經濟と教育と都市化とは單獨に生殖力に影響を及ぼす外、結合して交互にそれに影響を與へる。現今諸々の國に於て生殖力が漸次減衰しつゝあるは生理的原因によるにあらず、社會的原因により、環境によつて然るのであつて、經濟、教育、都市の影響である。

## 七 優生政策としての去勢

米國では優生政策としての去勢が導入せられたが、素より、それは非立憲であるとして非難せられ、現代には容れられぬ過激なる手段として容易に國民的に認容せらるるにいたらない。一八八九年、インデアナ州シヤフ、ソソヴィルの感化院醫師 H. C. Sharp 氏は優生學的目的に向つて去勢を開始し、こえて、一九〇七年にはインデアナ州は犯罪人、白痴、低能の去勢を行ふ法律を發布した。一九二二年一月一日現在では、インデアナを含めて十八州に去勢に関する法律ができたが、その中、アイダホ、ヴァモント、ネブラスカの三州は特別な手續をとらず、



知事がこれを廢案とした。紐育州では去勢法を廢棄し、インディアナ、オレゴン、ネバタ、ユウジェルシイ、ミシガンの五州はそれを非立憲と宣言した。但し、ワアシントン、南ダコタ、ウイスコンシン、カンサス、北ダコタ、カリフォルニア、コンネクチカット、アイオア、ネブラスカ州はそのまま繼續しつゝある。この九州中、現行法は裁判所によつて審理されないが前の去勢法は審理を受け、上級裁判所の審理にかけられて居る。

諸州の去勢法は夫々異つて居るが、生産の望ましからざるもので (undesirable) 改善することのできぬものに對し去勢を行ふ一事にいたつては何づれも同一である。何が生産の望ましからざるかについては兩親並に本人の身心に關する遺傳を調べた上でこれを決めることにして居る。去勢法の雜多なるに拘らず、それは緩徐として急進しない。米國では一九〇七—二八年にわたる廿一年間に去勢されたるもの僅かに八千五百廿人に過ぎず、その中、カリフォルニアのみで去勢されたるものが五千八百廿人の多きに達するを以て見れば、如何に米國全土に於ける去勢の實行が遅々として進まざるやを知ることができらう。

米國に於ける去勢法遲疑の原因は三あり、法の紛亂、教會の反對及輿論の退嬰がそれである。裁判所では法律が彼此錯綜して居り、一が他と衝突し、若くは、解釋を異にするを以て、屢々、去勢法の實行に對し非立憲なりと判決を下すことがある。但し、去勢法の反對は裁判所よりも民衆に於て一層峻烈なるものがある。一九一三年、オレゴン州が去勢法を發布したところ、民衆は八千二百七十五の連署を以て去勢法の可否を一般投票に付すべきを強いた。オレゴンの一般投票に問ふべしとする票數は二千票であるから、餘儀なくこれを一般投票に付せしところ、一千以上の多數を以て否決し去られた。オレゴン法は習慣的犯罪人、道德的廢類者、性的變質者に適用せられるもので、これ等は素より望ましからざる人間に屬する。一般投票によつて去勢法の廢棄せられたものはオレゴン州のみであるが、カリフォルニアを除くその他の州に於ても事情は大同小異である。

頑固に去勢に反對するものに教會がある。なぜ教會が去勢法に反對するかと言へば、舊教は去勢を以て産兒調節、離婚、友愛結婚と出入し、放縱なる色慾と關はり合ふと考へるからである。教會や信徒はいろ／＼と去勢に難聲を放つが、その中、重なる理由は左の如きものである。



る。

一、現代の優生的熱心家は馬小屋から考へつゝいた理窟で人類の生産を調節することを主張する。

- 二、現時に於ける人種改良は精神的側面を無視する。
- 三、現時に於ては個人の福利は重きをなさず、社會の福利と進歩とが寧ろ重要である。
- 四、去勢は生理的乃至道德的に人間の重要な機關を損傷するものである。
- 五、強者のみで成り立つ世界は残酷となる。

これ等五の保守的見解の謬妄なるは明かであるが、舊慣によつて律せらるゝ民衆が傳統と相去ること遠き去勢及その法律に急に賛同するものと考へられない。この事はその他の場合に於ても同一である。併し、かくの如き反對や偏見に拘はらず、廢頽者の數を減少することは民族存続及繁榮上絶対に必要である。米國に於て去勢法を施行する所以のものも、この見解が支配するためであり、米國では移民の中望ましからぬ分子を除去し排去することにとめて居る。米國の移民法は白痴、低能者、癩病を排斥する。その他、二三回繰り返へし起つた精神病患者、

習慣的飲酒家、乞食、職業的乞食、浮浪者、肺病患者、嫌忌すべき傳染病患者、醫師によつて精神並に身體に異常ありと認定せられるものは凡て排斥せられる。なほ前記の異常者及犯罪ありと認めたるものに對してはその到着をまつて退去を命ずる。これによつて、米國は優生學の見解によつて支配せられる進歩せし國であるといふ斷定に達するであらう。

進歩せし州では惡質者の繁殖を防止し精神病患者、白痴、低能者、癩癩等の望ましからざるものゝ結婚を禁ずることに一致して居る。これに應じ、法はかくの如きものゝ結婚は不法であるとする見解を支持する。されど、斯くの如き進歩的見解も亦實施すべからざるが如くである。法によつて惡質者の結婚を禁ずるとするも、惡質者は法によらず勝手に生殖するから、それは畢竟廢法たるべく、又、戸籍吏によつて如何なるものが望ましからざるものであるやを判定することが容易でない。惡質者を隔離する方法は惡質の傳播を遮斷する最上の方法であるが、これは一生隔離するか、若くは、生殖期間隔離しなければその効果を確保することができない。長い期間逃走せしめないように看守することはなか／＼難事である。カリフォルニアでは惡質者を防止する方法として去勢と隔離とを結びつけてゐる。そこでは、去勢は優生的目的



を達するためで、刑罰を意味するものではないとして居る。そして、監獄では厳に去勢の権利を保留する。監獄から社會に放免して宜いものは兩親の許諾をえて去勢に付する定めである。この場合、監獄では兩親又は家族に對して、放免しても社會に害を與へるようなことはないが、惡質のため親として子孫を残す資格のないことを言ひきかせる。去勢は病院でなし、これを一定看護に付する。去勢に際し、それを法によつて強制しうるが、なるべく相談の上任意に實行するようにして居る。この場合、たいてい、兩親又は保護者より書面で許諾を徴してをく。患者は去勢を嫌忌するようにはなく、寧ろ、これによつて自由をえ、社會へ復歸することができると言つて喜び迎へる。かくて、去勢がすむと放免するが、二年間の看護期間に社會に生活するの不能なることが分明せしものに對しては再びこれを院舎に收容する。精神病者は去勢後家庭に歸へし、精神薄弱者にして勞働可能なものは、たいてい家族や保護者が保護能力がないから、これを信用すべき雇主に引き渡す。

實に、カリフォルニア州は優生政策の旺なる唯一の州であり、こゝでは官憲は勿論、民衆も亦去勢の優生上必要なことを一般的に了解し、社會と病院と官憲との間に協力の精神が發達し、ひとへに種の質を優良ならしめんとして居る。かくの如き見解が一般化するにいたれば、人種、國民の質は改善せられ、文化増進の根本動力を獲得することができるやうになる。似而非なる人道觀や、頑迷なる偏見のため如何程人類が惡質者の傳播によつて損害をうけてをるか分らない。カリフォルニアでは一九二八年一月一日現在で五千八百二十人の患者が去勢をうけたが、その中、男子は三千二百三十二人、女子は二千五百八十八人である。去勢をうけし百七十三人について調査するところによれば、その中、百三十二人はそれを喜び迎へ、二十二人は無頓着だと言ひ、十九人は忌だつたと言つて居る。

惡質を傳播するが如き非法は將來嚴重に遮斷しなければならぬ。民衆の優生學的知識の欠乏は急速補正しなければならぬ、又、誤れる人道觀は徹底的に擊退しなければならぬ。優生政策の理解に乏しき現代國家及國民はこれによつて如何程その文化政策に根本的の障害を與へて居るか測り知ることができない。但し、身心の特質が如何なる程度に於て遺傳するものであるかの研究は今のところ頗る不完全であるから、實驗遺傳學の研究については急に人類の熱情を購はなければならぬ。それに、去勢の方法も完全無欠ではないし、隔離も亦徹底して行ひがたい



實状にある。なほ、去勢を悪用して亂淫を行ひ、花柳病を傳播する虞れがあるが、いつでも、善いことには悪いことも附随する道理により、弊害は方法をつくして除去すればよい。それよりも優生政策の確立が根本義であらう。

参考文献

1. Francis Iswald, Eugenical Sterilization in the United States, American Journal of Sociology, July 1930.
2. Harry H. Laughlin, Eugenical Sterilization in the U. S. (Chicago Municipal Reference Library Press, 1922.
3. Charles P. Bruehl, Birth Control and Eugenics, New York; J. P. Wagner, Jne. 1908.
4. J. Mayer, Die unfruchtbarmachung Geisteskranker in Bonner Zeitsc-

brift für Theologie und Seelsorge, 1926.

5. Thomas J. Gerrad, The Church and Eugenics, London; P. S. King and Son, 1912.
6. Sanford R. Winston The Relation of Certain Social Factors to Fertility, American Journal of Sociology, March 1930 (Volume XXXV, No. 5.)
7. Sorokin, Contemporary Sociological Theories, 1928.
8. Haeckel, Prinzipien der Generellen Morphologie, 1906.
9. Spencer, The Principle of Sociology.



## 第八章 人口増減の豫測

伊太利のギニがたてた人口法則即ち民族は個人の如く生れ生長し死滅することが (C. Gini, *Le leggi di evoluzione delle nazioni, Economia, 1934*) 確實な科學的事實であるかどうか分らぬとしても、恐く民族の消長に關してはこれに類似する法則が設定せられるであらう。これまで歴史の示す民族の消長は、その科學の進歩に伴ふて、古生物學、人種學、動物學、植物學などの提供する資料により、人種は個人の如く生れ成長し死滅するものであると確められつゝある。人種の質即ち優良人種たると劣等人種たるとにより、無論、その消長を異にするが、人種の年齢によつて一時代に於ける消長を異にすることも亦否むことができぬ。如何に優良人種と雖も老境に達すれば、劣等人種にさへも取つて代はられるやうになるのはかゝる法則の支配に因る。

現時に於ける歐洲諸國民の消長を見れば殊にこの感を深うする。一度び歐洲諸國民の人口は

固定して動かなかつたが、十八世紀にいたり、人口の急激なる増加あり、以て、今日にいたつた。これが爲め、異人種は白人種によつて滅されたと思はれたが、その後歐洲國民は一様に減衰の方面をとりつゝある。現今尙頽勢を維持し若くは人口増加を繼續する國民もあるが、これとて間もなく減衰の方向にあるは明かである。それ等の國では、現時に於ては死亡の數が出生よりも超過するもの多く、それによつて成人々種は漸次減衰の方向にある。かくの如き状態にあるものは獨逸、奧地利、瑞西、白耳義、佛蘭西、英國、諾威、瑞典、フィンランド、エストニア、ラトビヤである。これによつて、北歐洲、中央西歐洲の全部は(丁抹及和蘭を除く)人口減衰に傾きつゝあるを知る。米國も亦今正にかくの如き状態に接近しつゝある。これによつて白人種は全體として、人口の見地に於て衰頽しつゝあるといふ斷定に達する。

異人種に接觸することによつて衰頽するといふ斷定は確實ではないやうに思はれる。異人種が白人種に接觸することによつて衰頽するといふが、それは異人種が既に白人種に接觸しない前に衰頽の道を辿つゝあつたことを見免してゐる。異人種の白人種に抵抗する力も亦白人種に接觸するか否かによつて異つて居るようである。すなはち、白人種に接觸する異人種は然らざ



るものより抵抗力が強いように見える。この見地からも白人種のみ優勢であるとする見解の誤つて居ることを知る。

これによつて、白人種は全體として人口法則に照らし生長しきつて、死滅の境に彷徨するにいたりしかの如き観がある。

但し、人口の増減を單純な生理的法則のみによつて説明すべからざるは明かである。ギニ氏の如く社會的法則を無視度外し、人口の増減を以て生理能力の減衰に歸するのは誤りであり、殊に、これを現今の歐米文明國の人口増減なる當面の問題に當て箝むるのは失當であらう。人間生殖力の減衰は表流として經濟、教育、都市化など社會的原因の影響であり、産兒調節の結果であるが、底流としてはギニ氏の主張するが如く、人間老衰の生理法則を無視する事はできぬであらう。すなはち、全體として人類歴史の進行に於て、人間は現はれ榮え竟に死滅するもの也との生理法則はギニ氏の如く立しうるであらうが、これを當面の人口問題に當て箝め、現時文明國民の生殖力減衰を直ちに生理法則の支配するところと見るは誤りであらう。要之生理法則のみを以て人口の増減を説かんとするものも誤であれば、社會法則のみによつてこれを律

せんとするものも亦誤りである。それよりも、人口の増減は、底流としては（基本的には）生理法則に支配せられ、一種の老衰現象であるとして説明はするが、表流としては（當面のものとしては）社會法則によつて説明せらるべきであると解する方が正しい。

ギニ氏は歴史の證明するところによれば支配民族は老衰して人口の減少する境界線上に現はれて居るが、これは確かに異つた方に進化し若くはそんなに進化しない二民族交雜に原因するものであらうと言つて居る。かくの如く、古典的希臘の境界線上にマセドニア民族は生長し、當時知られたる世界に蔓延擴張した。かくの如くエストルスカン國の境界線上に羅馬が現はれ、羅馬の境界線上に現代文明の造營者たるチュートン民族の勃興が用意せられた。黒人種やハム人種の境界線上に純粹ニグロ人や亞弗利加の大部分を占むる原始民族に代つてパンタス人が現はれ、支那と馬來人種の境界線上に日本人が現はれ、タアタア國の境界線上にスラブ民族が現はれた。これ等の例證はいづれも生理的に説明しうべきものであり、交雜によつて生物學的に人種が強壯になつたことを物語るものたらざるはない。かくの如き現象は社會的法則によつて説明することはできぬ。よつて、人口の増減、人種の興亡を單に社會的法則を以て説明し



つくすことの能きざることを知る。

ギニ氏はいふ歴史に現はれし新人種新國民は交雜によつて成立せしものゝ一部分に過ぎない。なぜかと言へば、交雜によつて現はれしものゝ中、成立するにいたりしものは一部分であるからである。交雜民族については、その特質が存立不可能たらしめしものもあらうし、生殖力の足りないものもあつたらうし、雜種が生存競争、雌雄淘汰、又は移住によつて適當なる淘汰をうけ、劣等種を除外しえなかつたこともあらうし、生存競争に打ち負けたこともあらう。スラブ民族の消長は最も明かに追究することができるが、その興隆は矢張り出産率が死亡率に優るといふ生理法則の結果である。人種の中に階級が分化し、階級間の通婚ある場合には、その中の老衰階級を強壯にし、全體として一人種一民族を繁榮せしめる。人種が他の血を交えるときに、それが存続するのみならず、繁榮にをもむく狀顯然たり。人種が交雜する結果として、老衰人種は新興人種に吸収せられ、よつて以て、その生命を保存する。新舊人種の交雜はスラブ人に境する諸國民の如く新人種が舊人種の中へ徐々入り込むこともあり、また、舊羅馬の如く、人種間に障壁を設けて通婚を防げ、それが突然入來するようなこともあらう。羅馬

や希臘の場合の如く、舊人種が全く亡び去らずして、その根跡を残すものにあつては、侵入人種によつてそれが吸収せられるか、或は排除せられるかであり、時に征服者の達しえざるが如き地域に於て比較的純粹なものとして残るかである。かくの如く、全世界には、舊人種が新人種によつて破碎された破片によつて充されてゐる。かくの如き破片は到るところ不毛な土地、山岳地帯、砂漠、原始林地帯、島嶼に残存するを見る。たとへばピグミー、ブシユメン、ネクリトス、アイヌ、ラブランド人、エスキモー人、フエギア人などがそれである。

以上の事實は動植物の交雜に於ても見ることができるのであり動植物は交雜によつて諸々の新種をえ、その中より優良なるものを選択し、これを固定することにより、優良種をつくり出す。こゝにも抵抗力のにぶきこと、形質の悪いこと、生殖力のないことなどによつて數多き雜種は死滅する。ただ、その中に、優良なる特質と生殖力との旺盛な新種のみ殘留して繁榮にをもむく。

人種や國民の中、他の血を混へないような純粹なものは絶えて存しない。人種や民族は交雜によつて其種勢を維持して存続し又強壯となつて繁榮をつづける。人種や民族は偶然變異



(Mutation) 以外のものは交雑によつて出来たものがあるが、一度び成立せし人種が餘り長く純粹なものとして存続すると生理的法則によつて衰頹するを免れぬ。こゝに人類進化の循環法則が成り立つ。この法則は人種は必ず生れ成長し後死することに關する。

人種、民族が死せざらんとすれば老衰の鐵則たる生理法則を交雑によつて打ち破らなければならぬ。人種が純粹なものとして餘り長くつづくと考えするを免れぬ。人種は隔離してその固有の集團としてつづく、生れ成長し後死する鐵則に支配せられる。この鐵則を破るものはただ交雑あるのみ。

今日、歐洲文明國民の人口が減少する方面にあるのは、疑もなく經濟、教育、都市化のためで、産兒調節なる社會的原因によるのではあるが、この基本的原因は、白人種の集團精神が旺盛で、他人種と交雑しないため、人種の種子が古びて死滅することに關するのではないか。生物學的に成立せし集團精神は純粹なものとしそれを保存すべく凡ゆる努力を以て死滅を急ぐやうな結果となる。希臘や羅馬は生物學的に造り上げた集團精神によつて死滅するのを救ふために野蠻民族と交雑することができなかつた。その如く、今日の白人種はその旺盛なる集團精神

によつて他と隔離し、荐りに他を拒斥してゐるから、是又生物的法則と生理的法則との挾撃によつて死滅する外はないであらう。

集團的本能が深く固く人類に植えつけられて居る。これあるがため、人類は存続したが、又これあるため、人類は死滅して行く。白人種、殊にチュートン人種の死滅は集團本能に關はり合ひ、類同意識によつて同種相引き異種相撥くことに關する。茲にも亦老衰死滅の一例を見出す。歐洲大戦は集團本能によつて現はれたものであるが、これによつて交戦國民の何づれにも害を與へただけで、何の利益もそれに齎さなかつたことは明かである。今後、必ず現はるゝであらうどころの幾回かの世界戦争は矢張り集團的本能の慘禍たるであらうが、かくて人類は集團本能の暴威によつて竟に滅亡する外はないのであらう。白人種衰亡の眞の原因も集團本能にありと信じえられるであらう。白人種の人口減衰は當面のものとしては社會的原因であるがその奥底に既に純粹な集團精神の毒がまわり始め、集團本能の維持強調のため生物的法則と生理的法則とがその威力を逞ふし始めたと解釋することはできぬであらうか。當面の歐米諸國人口減衰の原因は社會的なものであらうが、それと共に、既に生理法則生物學法則がその姿を



現はし始めたと警戒することは不妥當ではないと思ふ。集團本能の活躍は人類の全局面を蔽ふて居る。

世界文化のためには一人種一民族の消長興敗は問題ではなく、それよりも文化諸民族の残せし異なる文化とその総合とが問題に上る。カルデヤも埃及も亡んだが、その文化はどれ程残されたか、希臘と羅馬との文化はどれ程世に残つたか、現時の西洋諸文明國の死滅は大問題ではないが、それがどれ程の痕跡を後世文化にのこすかが寧ろ大問題であらう。世界の文化は原始以來階段的に發展しつづけたか、若くは、前の文化は亡び、後の文化が現はれるといふやうな斷續的なものであつたか。これが世界文化の上より眺められる最重大なる問題であらう。

参考文献

1. Corrado Gini, The Future of Human Population, The American Journal of Sociology, September 1930.
2. Gini, The Cyclical Rise and Fall of Populations, University of Chicago

Press, 1930.

3. Gini, Le leggi di evoluzione delle nazioni, *Economia*, 1924.
4. Gini, Il diverso accrescimento delle classi sociali e la Concentrazione della ricchezza, *Giornal degli Economiste*, XIII, 1909.
5. Gini, I fattori demografici dell' guerre, *Rivista Italiana di sociologia*, 1915.
6. Gini, Les mouvements de population, *Revue d'hygiene*, Nov. 1927.



### 第九章 集團の接觸と融合

#### 一 接觸の限定

接觸 (contact) 若くは社會的接觸 (social contact) とは個人と個人との間の接觸、個人と集團との接觸、若くは、集團と集團との間の接觸を意味する。かやうな限定は接觸を最も一般的に抽象的に限定したものであるが、この種の限定は例へばスモール教授 (Prof. Small) などによつてなされてゐる。スモール教授は Term contact be used as a most general term applying without further specifications to all phenomena which involve relations between individual and groups と限定して居り、ス氏は接觸を以て個人と集團との間の關係であると解してゐる。

これは形式的限定であるが、接觸の内容に立ち入つてその機能を吟味すれば、接觸は先づ交通 (communication) によつて行はれると解せられる。然らば、接觸は個人と個人と、若くは個人と集團とが交通によつて接觸するのであり、精神的交感 (mental interaction) をなすこととであると解せられる。なほ、接觸は商業上の交換、取引によつて發達したものと考へられるから、商業は接觸を促せし要因であると見られる。バルク及バルヂェス教授は Then it must be said that modern commercial developments have in effect brought everyone into real though indirect contact with everyone else と云ふ流儀で、商業に重きを置いて接觸の内容を定めてゐる。商業が國家的より國際的に進みまさりつゝある現時に於ては、經濟的交換を通じて人間の交通と接觸とは前代未聞に行はれて居り、これが爲めに、協力も盛になつたが、これが爲めに又鬭争もふえた。商業の擴張、分業の増進、國際的移住、人口の流動は世界の隅から隅まで波及し、現時に於ては文字通り孤立し遊離することをうる國民も民族もなきにいたつた。日本が明治維新當時は、ベルリの通商交通條約を締結せんとする提議に抗しかねて鎖國政策を一擲せし如き事態は普く繰り返へされて居り、商業の擴張、人口の流動によつて、最早、一國が他國から隔離するといふことはできなくなつた。ノルマン、エルゼル氏は



「現代戦争論」に於て、列國は政治經濟によつて蜘蛛の巣の如く互に結びつけられたから、最早、戦争は不可能になつたと論斷して居る。然るに、その後、間もなく、歐洲大戰が勃發し、今後も世界大戰勃發の危険が聊かも減退しないのは、エンゼエル氏が集團學說に通ぜず、集團心 (group mind) の何であるやに通じなかつたからである。なる程、世界人類の交通接觸によつて、政治的にも、經濟的にも、文化的にも、他から斷ち切ることはできなくなり、その爲め一國が勝手に兵を擧げることも不可能になつたが、それよりも強い力を人類に加へつゝある怪物が現はれてきた。これ即ち集團精神で自己集團を限り生存を全ふせんとする本能に發現するもの。現今では未だ聯帶主義に立脚する國際心よりも、集團主義に立脚する國家心の方が強く人間を支配してゐる。それ故、如何に商業交通によつて國際關係が濃厚になつても、それよりもヨリ強い力を以て國家心が働いて居り、世界人類の活動に對し壓倒的勢力を揮つてゐる。そこで、國家的関の怪物が世界を兵亂の巷と化しうる可能が今尙ほ存在するのであり、この一點をエンゼエル氏は見免して居たので、國際關係の發達と共に平和が増大して、戦争が不可能になると考へたのである。現今では、國際心よりも國家心の方が強く、世界は集團的繩張根生

と、その利己主義とに支配せられ、虎視眈々、世界を兵亂の修羅場と化し、世界の人民を災厄に陥れても、猫額大の自國と自國民との福利を増大すれば足りるとして、得々たる體である。そこで、如何に政治的、經濟的、文化的聯帶が増進しても、世界諸國民の集團主義が減退しなければ、世界の平和は毫も増進しないと考ふべきであらう。海野は世界の集團主義は古今變色なしとする社會哲學觀の上に立つから、今後と雖も、エンゼエル氏の想像するが如き平和は斷じて入來しないだらうと考へる。その代りに、近き將來に於て、第二次世界大戰が必ず勃發すると思ふ。最早、エンゼエル氏の所謂聯帶的世界時期に唯二の國が戦ふといふようなことは有りうべからざることと思はれるから、戦争ありとすれば、その影響、その利害は、地球の隅から隅まで波及すべきで、世界諸國は何づれも劍をとつて立たざるを得ざる形勢にある。今や、單獨で一騎打ちなどといふことは能きなくなつたので、戦争勃發するとすれば、世界戦争の外にはない。戦後、世界諸國の間には協調の精神が旺んになつたが、それと共に、集團意識は益々煽揚せられ、敵愾心と憎惡と怨恨とは一層深くなつたと想はれる。これに應じ、早晚、必ず世界的戦亂が勃發し、歐洲大戰に數倍する科學的破壊力を用ゐて、世界の人類を灰にまで還元



するであらう。この豫測は集團説に基くものであるから、恐く將來適中するだらうと想ふ。さて、商業の擴張と、分業の頻出と、人口の流動とにより、世界の人類は遊離分断することができず、必然的に交通し接觸するにいたつた。この意味に於て、商業がその經濟的活動を通じて諸人種を接觸せしめ、それが爲め、文化的に遊離するをうる人種、民族、國民なきにいたり、世界の人類はひとしく文化的交通をなすこととなつた。

融合 (assimilation) の第一歩は接觸による。パルクス氏及バルヂェス氏は雜婚に次いで接觸を以て最も有効なる融和協調手段だと考へ The rapidity and completeness of assimilation depends directly upon the intimacy of social contact. By a curious paradox, slavery, and particularly household slavery, and particularly slavery has probably been, aside from intermarriage, the most efficient device for promoting assimilation と言つてゐる。奴隷が征服階級に接觸するとすれば、自づから混血するにいたり、この途を通じて最も確かな奴隷脱出の途が行はれるが、又、接觸によつて征服者の社會的傳統が奴隷に加はり、彼此融合すれば、奴隷階級たらざるにいたる。著者は我

國に於ける少數國民の融和問題についても接觸に重きを置いて、その改善その解放を策せんとするが故に、接觸を基準とする隣保事業 (settlement work) に重きを置いて、これが實施を慫慂しつゝある。

隣保事業については、左の拙著を参照せられ、その何であるやを知られたし。

- 一「輓近の社會事業」第十章
- 二「社會政策大系」第七卷
- 三「階級闘争の研究」第十四章

隣保事業は接觸を通じて融和を實現する社會改良の一形式である。海野は隣保事業を限定して、「隣保事業とは、長兄として機會の優者が隣人の觀念により、小弟の集團地域に入り込み、心理的・道徳的接觸を通じ、協調作用により、當時の文化的水準を目標とし、小弟の人格的發達を促し、かねて、社會の全般的福祉の發達を圖るものである」としてゐる。海野の心理的・道徳的接觸は生物學的接觸に對して、それとは異なる Mental interaction による接觸たるを意味する。奴隷消滅の前提として、奴隷階級は先づ優勝階級と心理的接觸をなし、これによつて



文化的發展をなし遂げ、文化の邊より優勝階級と類似若くは同一なものとならなければならぬ。パルク氏、バルヂエス氏及海野は融和問題に關し「社會的接觸」の機能を重視し、これを混血に次ぐ有効なる融和方法だと考へる。我國にも融和事業は夙に行はれてゐるが、一般に實際家の低平なる理論が徒らに蔓るのみで、科學的見解が取り入れられてゐないので、未だ社會接觸の融和に重大なる關係あることだも感知するにいたらないのである。著者が屢々隣保事業に謂ふ *settle* の意義を強調するに拘はらず、融和事業界、社會事業界の鈍感なること恰も頑石そのものゝ如く見ゆ。

異人種異國民間の社會的接觸は人種の身體的特質によつて、時に遮斷され、時に妨害される。パルク氏は人種の身體的特質は人種的偏見を惹き起す最大なる原因であると見て *The physical marks of race, in so far as they increase the racial visibility, inevitably segregate the races, set them apart, and so prolong and intensify the racial conflict* と言つてゐる。人種的偏見には可見 *visibility* と言ふことが最も勢力を揮ふ。人種的差異を區劃するにあたり、頭の形状、大小などが重要であるとしても、かくの如き特質は一般の民衆にはよく

分らない。すなはち、可見でないため、一般に注意をひかないのである。然るに、皮膚の色が不當に人種的偏見を引き起すのは可見であり、何人にも目立つからである。これ、パルク氏は *Race prejudice is a function of visibility* と言ふ所以である。

可見的な人種的特質が最も人種間の融和協調の防げとなる。個人的特質は人種的特質の背後に押しやられるから目立たない。そこで、人種的特質に對して偏見をもつものは如何に個人的に親和愛好しても畢竟融和協調することができない。人種の融和協調には先づ個人間、個人的關係に於て、その好ましく愛らしいと思ふところに従つて融和し協調しなければならぬ。が、個人的特質は通常人種的特質に蔽ひ隠されて目立たない。東洋人から西洋人を見ればたとへば英米人は區別ができず、佛蘭西人も獨逸人もすべて英米人たる範疇に屬すると思ひ込む。日本人には西洋人はどれもこれも同じであると思はれ、個人差が見分けられぬのである。恰も羊は如何に數多くとも同じであると思はれるやうに。但し、羊飼には個々の差異が見分けられ個性が識別される。

こゝに、人種間の融合が困難であるとせられる理由がある。融合は類同意識に従つて *like-*



minded であると思ふことから始るが、身體的特質の差異に關しては容易に類同精神をもち合ふとは思はれない。そこで、身體的特徴の異なる人種間の融和は更らに進んで思想、感情、信仰の類似若くは同一に着目しなければならない。異人種に屬する個人にもいくらかも思想や感情や信仰の類似するものはある。但し、かくの如き個人的類似は人種的差異に押し隠されて見分られぬ。こゝに、社會的接觸が必要なる所以がある。異人種に屬する個人と個人とが接觸すること久しければ、漸次人種的特質の外、個人差にも注意する様になる。

東洋人と西洋人とは身體的特質が目立つて異なるため容易に一致提携することができないが、個人としては東西兩洋人の間に親交と愛好との成立は稀れな出来事ではない。東西兩洋人の間にも思想も職業も通ふから交互に入り込むことができ、記憶、思想、感情、社會的傳統の交流と融合をなすは不可能ではない。思想、感情、社會的傳統の相互貫通 interpenetration によつて、個人の間、たとへ、人種を異にしても同じであるといふ心情が生るれば、こゝに個人的類同意識によつて融和協調が成立するにいたる。何でも類似し同一であるとする心情が発生しさえすれば、一團として結合することができる。異人種間の融和に接觸の必要たるはこれが

爲めである。接觸を通じて、異なる人種的特質のうちに同じものとしての思想、感情、文化を見出す。たとへ、人種が異つてゐても、個人としては思想と感情と文化とが同じであると見るにいたるのは、個人的接觸 (personal contact) によつてである。これ、商業、外交、學術などを通じて異人種に接觸する機會が與へられるうちに、相互了解にいたり、融和する所以である。商業や外交や人民の交通は人種的特質以外、個人的類似若くは同一をも認める機會となるから、これにより、期せずして融和提携にいたるのである。バルク氏は Personal relations and personal friendship are great solvent であると言つて居るが、これ接觸が融和提携を困難となす打ち越ゆべからざる人種的特質をも押しやり、そのはたらきを逞ふする所以を示すに外ならぬ。

接觸する二の人種、階級、集團は最初互に隔り distance, aloofness を感じ、互に混迷し合ふ。最初新環境に入り込みし新來者は新たなる社會的形勢 social situations に適應しかねて、たゞ皮相淺薄なる形勢に適應するだけである。そこで、最初はたゞ、言語とか、風俗とか、服装とか、職業とかに適應せんとつとめる。これ等初手の適應は眞の融合にいたる豫備手段たる



まで、在外異國人はたいていこの程度の適應をなすのみで、これより進まぬため、眞の融合にいたらず、恰も一國の中に異分子異集團の屯在するが如くに思はれ、問題を惹き起すのである。在米日本人は多くこの程度の米國化をなすのみ。眞の適應はその國の思想、感情、信仰、道德、文化に融合するのでなければならぬが、たゞ、言語と職業と衣服を變へるだけでは、厄介なる客分たるを免れない。在米日本人が米國魂をもつにいたらず、米國の風俗習慣傳統のうちに入り込むことができず、洋服を着たサムライたるにいたつては、實に厄介な客分であると言はなければならぬ。第二代目の日本人即ち外國生れの日本人と雖も未だ日本人としての異質を脱却する能はず、アメリカ人から見れば、自國民と異ふジャツプの亞流と思はれ、外國生れの日本人は自づからも卑下して米國人になり切れざる米國人と思ひ耻ぢらつてゐる。米國生れの日本人は國籍の日本にあるものと米國にあるものとを問はず、日本人たることを忌み嫌ひ、これを蔑視し、自づからを卑下し切つてゐる。恰も、米國人が日本人を忌み嫌ふ如く、それ等米國生れの日本人は同國人を忌み嫌ひ、日本人と結婚することを耻ぢらつてゐる。これ等の日系米國人若くは外國生れの日本人は自づからを inferiority と感じ且つ認め、なぜ、こんな日本

人として生れるべく運命づけられたのであるかと言つて嘆じ且つ怨む。この感情は主として素質が異ると想ふ見地即ち身體的特質によつて區別せられると考へる日本人たる特質より暗々裏に發するものであるが、その上、日系米國人、外國生れの日本人には未だ米國そのまゝの思想感情、信仰、文化、傳統を所有せず、若くは所有せずと思ひ、且つ、米國人よりもさう思はれるところに、どことなく純粹の米國人でないとする inferior feeling が現はれ、自づから卑下して hate my race I hate myself などをいふ自暴自棄の感想を洩すのである。素より、在米日本人は單に外形に止るべき言語と、衣服と、職業と、若干の風俗習慣とに應合するだけで、所謂洋服を着た軍事探偵式のサムライだと思はれる程度以上のものではないから、進んで米國化しようなどいふ氣は毛頭ないのである。但し、子供は急速米國化するので、米國人に接觸することによつて親よりも速かに米國化するにいたる。これ、兒童は適應力が優れて居るためでもあるが、また、古き社會傳統と習慣と記憶とをもたず、容易に新状態に推移することができるからである。女は男よりも適應力がない。これ、女は家居し、米國人とその環境とに接觸する機會に乏しいからである。職業婦人や娘は既婚婦人よりも自由であり、米國人とその



環境に接觸する機会が多いから適應力に富んで居る。なほ、無學なものは學問のあるものよりも適應力に乏しい。但し、適應は徐々として成し遂げられなければならず、急速に適應するときには部分的適應となつたり、又は有機的組織的に異なる文化を組み合せることのできないために危険なる状態を生ずる。急速異分子を融合せんとして焦れば移住民のうち不健全なる分子たる犯罪人、乞食、不良少年などをいれて人種の質を低下し、社會組織をゆるめることとなる。人種をつくり、國民をつくるは最も微妙で頗る困難なる作業である。接觸によつて徐々相互貫通交流を行ひ、十分なる用意と組織とをもつて、文化と傳統とを融合しなければ、健全にして優良なる新國民を造り出すことができない。單に見本的に少數の文化に適合したり、恣意によつて出鱈目に社會的傳統を取り入れたり、一時の必要によつて適應するものを選んだり、實際的必要によつて偶然的に接觸したりするような輕率な方法によつては、新來者を本土人に融合し一層優良なる國民を造り出すことはできぬ。人種と人種、國民と國民、階級と階級、集團と集團の接觸交流は組織的に行はれ、科學的に進められなければならぬ。皮相なる集團的特徴に注意して言語、職業、衣服、習慣などを交換し合つても、種族魂、國民魂、階級及集團の精髓を

交換し合はなければ、眞に融合協調することはできぬ。外形に止る衣服や言語や習慣の交換から心理交感としての思想、感情、傳統に及ばなければ眞の接觸交通に入つたとは言へない。接觸は單に外形に止るべき *actively, practically* なる邊に於てなすのみならず、*ideally* になし、*imaginatively* になし、集團の中核に肉薄するを要する。かくて、始めて融合し融合させる二の集團、國民、人種が共同生活に入ることが出来る。かくの如き目的を達するためには外的接觸と内的接觸とを動員し、あらゆる機會に接觸を勵行しなければならぬ。社會事業の形ちで接觸をなし遂げんとすれば、隣保館によつて二の集團を接觸せしめ、學校、夜學校、圖書館に於て接觸せしめる等、すべての社會事業團體を動員して接觸の機會を増大するやうにする。就中、近隣團體 (*neighbourhood Guild*) としての隣保館を動かすやうにする。これには小隣保館主義によつて個人的接觸 (*personal contact*) をなし遂げうるやうにする。大隣保館は形式的標準的機關で、人種的特質の對策以上には出でず、個人的交感によつて親和と愛好とを導き入れることはできない。皮相な外形による接觸と融和とは大隣館によつてなしとげうるが、内的な接觸 (思想、感情、信仰、傳統に關する) と融和とは個人的接觸による外なく、個々直接



應接する外に途はない。大會館と小會館とは普通考へて居るよりも意味深長なる機能的區別があるが、未だ一般的には私の學論はよく分らない。著者のこれに關する學論は「社會事業學原理」に於ける歴史的學論と、「社會政策概論」に於ける第十章「個別事業法」第八章「個別的方法と綜合的全體」第九章「歴史現象としての社會事業」の熟讀翫味を乞はなければならぬ。通俗な實際的施設の背後にも深遠なる學論があるから、現時の如き皮相淺薄なる實際家の經驗偏重によつて到底紛糾錯綜する社會改良の實を擧ぐることはできぬ。實際家經驗家の社會改良が若し改良となれば偶然の結果で、犬も歩けば棒にあたる流儀であり、時に實際家、經驗家の盲動は却つて社會改悪に終るは稀有ではない。

接觸には外的接觸と内的接觸とを併せ行はなければならぬが、内的接觸の方が重要で、接觸と言へば内的接觸のことであり、心的交感 *mental interaction* のことであり、更らに、心理的道德接觸のことであると考へなくてはならぬ。その上、接觸はついに人種的特質による人種の接觸より、個々接觸し、その個性を識別することによつて行はれる個人的若くは人格的接觸 (*personal contact*) でなければならぬ。個人的人格的接觸は小なる機關によつて行はれる。

我國に於ける被壓迫集團としての少數國民の解放に關しても以上の原則によつてその目的を達するやうにしたい。

## 二 融合の限定

集團の融和協調より見たる融合 (*assimilation*) は一の集團のもつ社會的傳統、文化を結合して、平和なる集團生活をなさんとするにある。バルヂエス氏及バルク氏は融合をもつて

*attempts to establish and maintain a political order in a community that has no common cultur (Introduction to the Science of Sociology, p. 734)*

と言つてゐる。政治的に秩序を保持するために二の異なる文化的集團を統合することを融合であると思へば、これは向きにいふ集團の融和協調より下されたる見方である。この見地によりする融合は異なる社會的傳統、文化を異なる集團のうちに分立するのは社會の存立に危険であるから、先づ兩者を融合しなければならぬとするのである。そこで、融合とは同一若くは類似する過程 (*a process of becoming alike*) とする義となる。何故、類似若くは同一たらなければならぬ



らぬかと言へば、異分子が存立してゐては社會の平和を破り、國民の政治的鬭争を惹き起すと考へるからである。融合とは異なる集團が反目し抗争して社會、國家の平和安全を脅かさないやうに同一若くは類似すといふ義となり、その終局の目的は文化的同質にある。文化的乃至社會傳統に於て同質となれば喧嘩し鬭争することなきにいたり、社會の平和を維持し國家の安全を保障することができる。よつて、融合の目的は文化的同質といふことになる。

融合について、米國と歐洲とに於て少しく其意義を異にする。米國に於ては融合は一國の文化を養子たる國民に傳達する義であり、積極的の意味をもつが、歐洲では消極的の意味をもち、非國民化 (denationalization) として解せられる。何故、歐洲諸國で融合が非國民化を意味するかと言へば、歐洲では列國相接して覇を争ひ、つねに被征服國を征服國に併合し、異なる文化團體を一國に收容しなければならなかつたからである。この場合、被征服者の文化を衰滅せしめて併合するのであるから、非國民化の過程を履まなければならぬ。但し、積極的に新附の國民に本土の文化を傳達するも、消極的に被征服國民の文化を潰滅するも目的は同一であり、いづれも同一ならんとして、同質ならんとするに外ならぬ。前者は本土文化を新附國民に傳達すること

によつて、後者は被征服國民の特殊文化を打壞衰滅することによつて同一となり同質にならんとするのである。こゝに於て、融合とは「同一にならんとする過程」であると言へる。

融合は同一にならんとして上下二の集團の文化から交流を始め、相互に貫通貫徹し、若くは融解して兩者のもつ思想感情信仰文化を共有にし、共同なる文化生活に達することであると限定することができる。バルク氏バルヂェス氏はこの意を表はして、

Assimilation is a process of interpenetration and fusion in which persons and groups acquire the memories, sentiments, and attitudes of other persons or groups and, by sharing their experience and history, are incorporated with them in a common cultural life といつてゐる。

絶えず接觸する異なる國民異なる人種は皮相で外形的な特質に融合するのみならず漸次内的な中核にも肉薄し彼此融合して一となる。如何に人種的素質が異つて居ても、社會的傳統や文化は漸次必ず混合し化して一となり、共同生活をなすことができるやうになる。

新來の移住民は皮相な輕微な社會的傳統に融合することから始め、先づ生活に必要なべき



傳統を獲得し、輕視嘲笑を避けんとつとめる。そこで、服装をかへて嘲笑されざらんとし、言語を學び、職業を獲得して本土の人々に類似せんとする。かくて漸次歩を進めて内的な社會的傳統を融合するところになるが、新來の移住民はそれ自づから孤立して集團をつくるが故に融合の過程は緩徐として進む。

融合の過程は最初は新環境に於て生活可能となるが如き適應と、新移住地に於て輕視せられ蔑視せられるので *humiliation* を避けるべく新狀態に適合することである。新たなる土地に來れば、土着の人々は新來者に對しその價值如何に拘はらず、自己と類似若くは同一ならざる單なる理由によつて嗤笑し蔑視するから、輕視蔑視を免れんとすれば、外形上目立つやうな皮相のものに急に應合しなければならぬ。これに應じ、新狀態に步調をそろへて、それに押し移るのが生活上便利であると思はれる。そこで、外形上目立つ服装をかへたり、風俗習慣をかへたりして、土着人の集團本能に迎合するやうにする。土着人の嗤笑し蔑視するのは價值が劣つて居るからといふ根據からではなく、自己集團の社會的傳統に異なるからといふ單なる理由に基づく。人間は何でも自己集團の掟から異つたものに對しては、その是非善惡に關係なく嗤笑し蔑

視する性情をもつ。米國生れの日本人や在米日本人に接すれば鼻もちならぬ底の米國最良で、何でも米國のことと言へば褒めちぎる。その盲目的賞讃にいたつては寧ろ滑稽である。さへ思はれる。在米日本人は一も二もなく米國の國風人情を賞讃するのが常列である。この場合に於ても、在米日本人の米國最良は價值判斷に關係せず、一時假住ひを米國ときめたため、自己の住む集團を己が集團と見立て、集團意識を生じ、米國の集團と言へば、何でもよく見へよく思はれるのである。痘面も靨で、米國の痘面が悉く靨にうつるのは、米國在住、米國加入といふ一時的假寓の集團意識より來る當然の結果である。價值に關し、正否に關するとして眞面目に受取り面に皺をよせなくてもよい。東京人が京都に移り住めば同じ心理を生じ、依然東京人である筈なるに京都の人情風俗を褒めれば一も二もなく心地よく感じ、罵れば不快に思ふ。東京鯨と關西鯨との優劣といふやうなことを論ずるのが既に愚で、かやうな些末の事柄にまで集團意識がつきまとい、何でも自己集團に屬するものと言へば良く見え、よく思はれて仕方がないのである。

かくの如き集團心理のうちへ移住者はまづはまり込むのである。移住民は移住地では何一つ



可笑といつて嘲笑せられぬはない。新來者の風俗人種など社會的傳統がすべて劣るが故に嘲笑惡罵せられるのではなく、たゞ異るといふ單なる理由で輕視せられ侮蔑せられるのである。一々嚴密なる價值判定をなせば、何づれか是、何づれが非なるや判明しないのであるが、人間は何でも自分のものと異なるものを嫌忌し差別する生物であるから新たなる土地へ移り住む新來者は生活の條件を確立するために先づ新なる土地の傳統に適應しなければならぬ。新なる土地に適應するときは、その集團意識を利用して、何でも同じものとなるといふ義である。集團意識は類同意識なるが故に、集團は何でも類似し同一なれば喜び迎へるのである。こゝに、新來者の新環境に應合する原則が樹立せられる。

そこで、新來者は新狀態に即して先づ生活可能とならなければならず、従つて、國語を習得し、その歴史に多少通曉し、衣服や習慣をかへて、土着人の仲間入りをしなければならぬ。かくて、最初の融合の過程は生活條件を確立すること、侮蔑を免れることに主力が向けられるであらう。

同じものは寄り集る原則から新來者はそれ自づから一かたまりとなり、容易に土着人に混合

しない。國內の諸人種は互に一團となつて愛好を感じ合ひ、容易に本土人のうちへ入り込み融解混和しない。こゝに、隔離なる現象が起る。隔離は集團本能によつて似たものが一所に寄り集り、他と分離する状態をいふ。集團意識は事々に干涉するから、容易に異つた集團が混り合ふことはできず、従つて、分散は困難となる。但し、集團意識の故に土着人と新來者との混和混合も漸次行はれるのである。

國といふやうなやゝ大なる集團へ入り込んだ諸々の小集團はその見地より見れば各分立するけれども、國といふ見地より見ればそれに抱擁せられて居る。國は又東洋とか西洋とかといふ一層大なる集團に抱擁されてゐる。この場合、大小諸集團の關係は併立關係にあるのではなく、抱擁關係にある。すなはち、最も小なる集團は中位の集團に抱擁せられ、中位の集團は上位の集團に抱擁せられるといふやうに、大小様々の集團は包攝關係に依つて小なるものは大なるものに包攝せられて居る。こゝに、諸集團が分立し對立する状態を發すると共に、また、包擁融合する關係をも齎らす。小集團が中集團に含まれるといふ見地に轉すれば、今度は兩者同一の集團といふこととなり、兩者の間に類同意識を發生する。集團の包攝關係によつて生ずる類同



意識は小集團をついに中集團に完全に融合し、中集團を大集團に完全に融合する。

そこで、最初、外形により皮相なる社會的傳統に應化したる國內小集團が國に包攝せられるといふ意識を發生するにいたれば、國家的傳統に漸次に適應すべく、かくて、ついに國家的傳統を採用して融合の過程を完了するにいたる。如何に集團間に隔離的傾向が盛なりとは言へ、包攝關係の支配を免れることはできないから、併合關係をたどり、異なる集團として對立する關係より一轉して、一の集團内へ入り込み、包攝關係に轉じさへすれば、不知不識、小と大との集團間に類同意識を發生し、最初混合であつたものは、ついに化合に進む。それ故、皮相で外形につきる融合はついに國民の中核をつくる個性にまで及び、國民の個性を全體として融合するにいたる。

包攝せられる集團に對し包攝する集團の壓迫強く、これを酷待若くは排斥するときは、包攝せられたる集團は融合すること難く、一時、社會的傳統、文化の崩解状態を招くであらう。バルタ氏及ミルナア氏はこれに關し The person who has been completely controlled by a group, whose behavior in a limited number of possible situations has been

predetermined by his community, tends to behave in wild and inculcable ways to act on any vagrant impulse that invade in wild and inculcable ways: to act on any vagrant impulse that invades his mind when withdrawn from the situations he knows and removed from the background of a permanent community. The result is behavior that is incomprehensible because it follows no known patterns と言つてゐる。包攝する集團に全く若くはそれを基準とし融合することは無論文字通り行はれぬ。如何に劣弱なる集團と雖も優勝集團の社會的傳統に影響を與へるから、全く優勝集團そのままの傳統、文化を劣弱集團に採用せしめるやうなことはない。たとへば、米國人は米國に移住してインデアンと接觸し、それを征服したけれども、インディアンの社會的傳統は米國人にも影響を與へ四十種程の植物の耕作の仕方はインデアンより傳へられ、落花生、馬鈴薯、トマト、チョコレートをつかい、また、煙草をのむ習慣はインデアン人から傳へられた。自由を求めて移住した白人はインデアンから耕作を教へられてその社會的傳統を變化した。英國に移住せし羅馬人、ノルマン人も亦土着人の文化に影響を與へ、それを



變化した。如何に劣弱集團と雖も、それを包攝する優勝集團に何の影響を與へないやうなものはない。そこで包攝する集團に全く若くはそれを基準として社會的傳統を融合する義は單に優勝集團の社會的傳統を中心として融合すること、解しなければならぬ。包攝する集團と包攝せられる集團とは常に相互に影響を及ぼしながら融合の過程を進めるが、無論、多くの場合、優勝集團の社會的傳統を中心として融合が行はれる。但し、包攝集團と被包攝集團との社會的傳統、文化があまり隔絶せず、類似するのが最も安全なる融合をなす所以である。融合は一方的でなく、多く双方から影響し合ふのであるから、類似する傳統に依るものは類同意識によつて餘りはげしき對立となり抗争とならずして融合の過程をふむことができる。融合するには被包攝集團の組織體内に入り込み、その部分とならなければならぬから、餘りに集團意識を高めて對立し抗争しなければならぬやうな隔絶する傳統を融合するのは危険である。よつて、なるべく、融合は類似反撥しない程度の二の傳統によつてなされるやうにすべく、従つて、この類似する傳統文化は融合の條件となる。

融合は共通な社會組織共通な政治組織に達するを目的とする。融合にあつて、被包攝集團は包攝集團の社會組織政治組織に參與し、共同に組織を運営するから、先づ、共同なる社會的傳統の發達を促進しなければならぬ。集團の成員はいづれも共通な社會的傳統によつて集團人たるのであるから、新附の被包攝集團も亦包攝集團と共通なる社會的傳統を開發するにいたり、始めて共同なる社會生活國家生活をなすことができる。そこで、共通なる社會的傳統を開發する手段として、被包攝集團は先づ包攝集團の言語と歴史とを學ばなければならぬ。言語によつて共通な社會的傳統を傳達解讀し、歴史によつて共通なる社會的傳統を攝取了解する。この事は主として被包攝集團に於て行はるべく、被包攝集團は包攝集團の傳統を中心とし基準として、その傳統を多少いれてもらう程度で融合するのである。これが大體優勝集團と劣弱集團、若くは包攝集團と被包攝集團との關係交渉であるが、優勝集團、包攝集團に於ても全く劣弱集團被包攝集團の傳統を無視することができないから、包攝集團又被包攝集團の傳統と歴史とに通じなければならぬ。かくて始めて被包攝集團を共同なる社會生活、國家生活に參與せしむ、共同なる組織體内の部分となすことができる。



### 三 調和・適合

國內の集團生活は小集團の對立抗争する生活であるが、これが一定限度をこゆれば統一なる生活は不可能となる。國家内の小集團が分立をやめて純一なる一大國家集團たることは望みなきことである。戦時に於ては、國內に争ふ小集團は一時蝸牛角上の紛争をやめて一致協調するけれども、それでも純一なる大集團たることはできない。國內には無数の利害關係によつて結ばれて分立する小集團があり、それ等の小集團は一々分立して、各その利益を代表して抗争する。國內に於ける機能が無數に分れる限り、利害の同じようなものが寄り集るは自然であり、Process of becoming alikeによつて、類似するものは類同意識の統卒の下に一團となつて寄り集まらなければならぬ。かくて、國內に小集團の分立することは避けることができない。利益の一致せざる無数の小集團は分立するのであるから、その間に對立關係をつくらざるをえない。國內に於ける集團内の對立關係は二種となつて現はれる。

第一、國內の小集團は各固有な集團意識を高めて相争ひ合ふ。第二、國內の小集團は對立は

するが、交互協調して全體として秩序と平和とを維持する。前の場合には、統一なる國家生活をなすことはできない。國內の小集團は蝸牛角上の紛争を事とするから、集團意識は顯明となり、相次いで熾烈となり、統一ある國家生活を破るにいたる。たとへば、政黨の闘争が極度にはけしくなれば、國家的利益を度外して極端に自黨の立場より打算し反對黨を打ちのめすに手段を擇ばず、反對黨又政權獲得するときは同じく惡辣殘忍なる打撃を敵黨に與へ、かくて紛々擾々、底止するところを知らないから、統一ある國家生活はついに破滅に瀕するにいたる。但し、國內生活はかくの如き極端なる危機に頻するは稀れで、多く、争ひながら全體として統一ある生活をなすける。これを調和若くは適合 (acomodation) と云ふ。

調和、適合とは國內小集團の分立と對立とが、國家全體の秩序と機構を維持する限度に於て行はれ、闘争が協調殊に全體の協調にまとめられる状態を思ふ。パルク氏及バルヂェス氏は適合を限定して Accomodation has been described as a process of adjustment, that is, an organization of social relations and attitudes to prevent or to reduce conflict, to control competition, and to maintain a basis of security in the



social order for persons and groups of divergent interests and types to carry on together their varied life-activities. Accomodation in the sense of the composition of conflict is invariably the goal of the political process といふことである。

国内の小集團の利益は彼此犬牙交錯し、決して一致するものではない。一致する小集團は互に結合して共同の敵に當るけれども、何づれの小集團にも固有の立場があり、固有の持分があつて、それを伸ばさんとすれば、その他の小集團の利益を侵害しなければならぬ。然るに、集團は獸性に於て平等であり、利己的で、殘忍で、獨占をなさんとして焦心するから、互に對立する集團の權益を蹂躪し、それを掠奪するに一刻の猶豫をなさぬ。併し、極度に自己集團のみの權益を追求すれば、統一ある國家生活はできぬので、多少獨占を緩和しなければならず、また、国内の秩序と平和とを維持するに足る強制力と手段とを設け、その發動によつて国内の協調を維持しなければならぬ。国内の小集團はわづかに全體的秩序を維持するだけで、つねに反目し、つねに鬭争をなす。如何なる小集團と雖も敵對關係にあらざるものなく、居常、他の

間隙を覘ひつゞけて、それを排撃し排除せんと焦る。それ故、国内生活には最小限度の秩序と平和とがあるだけである。国内生活は國外生活と大差なく極めて不愉快である。國外生活は嚴密に敵對關係にあるが、国内生活も亦大體敵對關係で、わづかに全體の調子を整へるだけの協調が行はれるのみ。

人間の幸福なる生活は協調生活で、聯帶を押し進めるところに現はれる。但し、集團の聯合は今のところ國家以上には出でぬ。人間の生存は仲間によつてなされる。人間は仲間生活の最初の階梯として極小集團をつくつたが、極小集團では仲間生活によつて受くる利益を大ならしむることができない。よつて、仲間生活の範圍は漸次擴大して行き、ついに、現今、國家にまで達した。そこで、国内諸々の小集團は仲間生活の義に則り、夫々孤立しては受けえられぬ大なる利益を國家的集團生活によつて受けるにいたつた。但し、國家内小集團の仲間生活は極めて緩かなるもので、嚴密に仲間生活をなしつつあるのではない。若し、国内を限り嚴密にいふ仲間生活が行はれ、協調生活にひたることができれば、人類の幸福は今より急に幾十倍増大せられやうが、国内小集團は文字通り仲間たらず、一致提携せず、居常、自他互に侵害して狼の



本性を現はし底止するところを知らない。国内には数多き狼團體があつて、常に鎬を削つて殺し合ひつゝある。そこに、一瞬の休息も一刻の平和もない。国内に於ても、仲間生活によつて受くる利益と、その理解とは最小限度に止つてゐる。小集團としての仲間生活に於ても、孤獨生活には比べられぬ大なる利益は受けてゐるが、もし、その上、一切の小集團が一度び提携して、協調生活をなすなれば、全體の占得する利益の巨大なるは殆んど想像を絶するであらう。たとへば、國家的見地なるものを固持して、民政黨も政友會も協調し、軍閥も亦國家的見地から緊縮を肯じ、政府も與黨も面目だの、體面だの、行きがより上の魄魂などを捨て、一致協力、國運の伸張を圖つたならば、どれ程國家の偉大を期待することができるか知れない。もし、國內無数の小集團が各國家的見地から進退して、國家及國民全體の利益に専念すれば、社會を今のまゝに在りても、急に幾十倍の福祉が國民の上に落下し來るであらう。

今日、世界の有志はいろいろの考案の下に、いろいろの機構や組織を造つて、人類の福祉を増進し、社會の進歩を圖らんとしてゐるが、これに對し、人間の心理的變化を行つて、鬭争動物でなく、協調動物であることができたなれば、機構や組織をそのまゝにして在りても、今に

於て、想像すること能はざる程の福祉を招徠することができるであらう。人類の福祉問題に關しては、社會組織の問題よりも、人間の心理的變化の問題が重大であることはこの理による。如何に巧妙な理想社會をつくつても、狼の如く獐猛で、狐の如く狡猾な人間の集團では策の施しようがない。狼の如く、狐の如き人間の寄り集りが国内の小集團ではあるが、狼人間、狐人間の野性をそのまゝにして在りて、狼、狐の造つた社會的紛擾や鬭争を自づから收拾せんとするのであるが、その位なら、初より自他殺戮し合はない方が簡單であらう。野蠻なる獸性に恵まれた人類はその害毒の夥しきに堪えず、理想的社會組織や生活組織を造つて協調生活に入らんとし平和生活にひたらんとするのであるが、獸性そのものをその儘にして在りては無効であるのに今尚ほ氣づかぬとは笑止千萬である。

国内小集團の生活は協調生活にあらずして、大體、鬭争生活である。が、それでも、國家生活が可能ならしむる程度に於ての鬭争生活であるところに、純然たる鬭争生活なる國外生活と異るところがある。国内では諸集團は争ひながら、握手しつゝある。たゞ争ふのではなく、たゞ握手するでもない。實は、争ふのが本性であるが、握手しなければヨリ大なる利益をうる



ことができないので、自己集團によつて享受するをうる以上の利益を占得せんとして、ヨリ大なる集團としての國家にまとめられる必要上、他の小集團と握手するまである。狼の本性はどこまでいつても改まらぬ。

國內小集團は眼前の直接的利益によつて離合離散するに過ぎず、遠大な間接的利益を眼中にいれない。もし、この場合、遠大な間接的利益を見分けうる程度に人間が心理的變化を遂けたならば、協調生活は一層増大するであらう。實は仲間生活によつて受くる利益は何づれも間接なものばかりである。個人が直接に獲得する利益を一度び割愛し、仲間によつて間接に利益を増大せんとするのである。よつて、仲間生活による利益は間接なものばかり。されば、人類が仲間生活によつて生存する義を徹底すれば、國內小集團間の協調によつて受くる間接的な利益をも眼中に收むることができるはずである。併し、人間の仲間生活に於ける間接的利益の注視は未だこの程度まで進み來らぬ。そこで、國內無数の小集團は争ひつゞけて、拔けがけの功名によつて餘計利益を受けうると誤信し、これが爲め、却つて、その受くる利益を激減しつゝある。もし、國家の小集團が各争ふよりも、和することにより、握手によつて生ずる利益の方が

大なるを知るにいたり、これが集團的傳統のうちへ織り込まれるなれば、その時始めて世界諸國の福祉は今に於て想像することのできぬ程偉大なるものとなるであらう。

國內の諸集團は互に敵對關係にありながら、國家の統一を破らざる範圍の協調をなしつゝある。これ即ち、調和であり、適合である。國內の適合はカストの如き封鎖的團體に於ては恒久的なるをうるが、開放的階級にあつては一時的で、永久に維持することができない。適合が恒久的たると、一時的たるとに拘はらず、それが一定の限度に存在することを條件としてのみ、小集團と國家とが各安全であり平和でありうる。適合によつて諸集團の敵對關係は調節せられ、鬭争あれども恰も之れなきが如き姿態を呈す。すなはち、適合のはたらきを現はすや、諸集團間の鬭争は陽性より陰性に轉じ、表面平和であり安全であるが如く思はれる。

#### 四 隔離・分散

如何なる集團でもついに融合する。但し、人種を異にし、言語を異にし、風俗習慣を異にし、宗教を異にし、道徳を異にし、文化を異にする集團間の融合は容易ではなく、幾多の歲月



を要するであらう。人爲により、自然的な融合の過程を省略して急速融合することはできない。

我國に於ては分散主義が注視をひいているが、米國では隔離主義 (segregation, exclusion policy) にも注意が拂はれて居る。米國人種問題の研究家たるルーター氏はニグロに對し隔離主義も亦かなりとして、Effort at residential segregation by law and ordinance grew up to restrain individuals who for one reason or another wished to live outside the Negro sections. The present recognition that the exclusion policy by keeping race together and forcing them to develop their own institutions, operated to their economic welfare and to the development of self-confidence and self-respect led to its being advocated and extended not only as a device for avoiding racial disorder but as an effective legal method of inducing the Negroes to take some advantage of the wonderful economic advantages open before them (Reuter, The American Race Problem, p. 155)

と言つて居る。ニューヨークのハーレムには黒人の殖民地がある。それはたゞ米國に於て大なる黒人都市たるのみならず、世界に於て最大の黒人都市である。それはマンハッタンの中心に位し、快適な健康地帯にあり、貧民窟ではなく、百軒長屋の集合でもなく、舗装されたる道をもち、よく照明されたる街路をもつ美しい都市である。ハーレムには、教會もあり、劇場もあり娯樂場もあり、店舗もあり、社會的乃至市民的中心もある。かゝる立派な華麗な第七街を通じて百二十五街に出ればそこから突然黒人町となり、通行人も、賣子も、料理屋や劇場に出入するものも、窓からのぞいて居るものも皆黒人であり、そこが絶えたと、今度は又バット白人町に出る。但し、いづくに於ても町の體裁も家屋の様式も變らぬ黒人町で強いて區別さるゝものはたゞ皮膚の色だけである。これこそ改善されたるニグロであらう。この外、黒人町は市俄古にも、バルチモアにも、セント・ルイスにも、その他の大都市にはたいてはある。但し、これ等黒人町はハーレムと異り、薄穢い町か、貧民窟かである。かく隔離されてニグロは同じ言語を使い、同じ經驗と、同じ習慣をもち、集團意識と態度とを以て白人に對立するのである。



隔離されし黑人地域は Black Belt とか Nigger Town とか、Blackberry Patch とか言はれてゐるが、隔離主義をとつて改善を進むれば益々異なる集團として白人に對立するばかりである。米國では、黑人の任意的隔離の外、法律やその他の制限によつて隔離が行はれて居る。隔離の結果は、黑人に於ても、白人側より見るも、集團意識を高め、各異ふとする感を深くし、特に敵對的表出をなさざるまでも、敵對關係を明かにする。黑人は隔離によつて益々一般的生活をなす能はず、社會的接觸の機會を奪はれ、類似若くは同一となる過程をふまずして、永久に對立するものとして續くこととなる。米國では解放後と雖も、黑人に種々の制限を付し、奴隷たりし往時に比し、隔離生活に改善が加へられたと認むるべきものはなく、白人の黑人を差別待遇すること少しも衰へず、その上、黒人も亦その仲間のうちに怡樂と安易とを覺ゆるので、自づから隔離生活を營み、人種間の差別と偏見とは毫も改まるにいたらない。かくの如き状態に於て、黒人がその文化圏に立籠つて隔離生活をなすは避けえられざるところで、自他相俟つて差別と偏見とは益々深くなるばかりである。黒人は隔離地域に居住し、白人より排斥せられ、かくて、集團意識は益々煽揚され、白人の黒人を差別すること熾烈であり、黒人の白人

を見ること仇敵の如し。

隔離生活には固定するものゝ外、流動するものがある。黒人が白人から隔離して生活するのは恒久的であるが、類縁の近い移民が土着人と隔離して、分離生活するのは流動的である。隔離は自然的過程であり、自然發生に屬するから、安易の情を生じ、所謂 *feel at home* であり、その中に住みさへすれば、同一の風俗習慣があり、同一の言語があり、同一の道徳があるので、眞に自分の家と思ふことができる。そのところで移住民は友人を見出し、故舊に會ひ、各自同情し理解することができる。かゝる集團に足を止めて容易に他の集團に移り住まぬのは自然であり、何の無理もない。併しながら、融合によつて融和協調をはかり、奴隷の存続せざらんとする政策からは、隔離する間は包攝集團の社會的傳統と融合し、共同文化に參與する機會を失ふ。集團が同じ言語によつて寄り集まるものは言語集團 (*language group*) であり、同一の文化によつて綜合すれば文化集團 (*culture group*) であり、同一の人種によつて集合すれば人種的集團 (*national group*) であるなど、單一なる同一性によつて仲間生活をなすものが隔離してそれを固執すれば、他の集團の異質に融合して協調關係に入ることができぬ。一以



上の要素について異ふ場合には益々融和することが困難になる。移住民の齎らせし共通なる傳統によつて、集團として隔離するものは、本國の斷片として、本國には融和協調することができぬが、それだけ異なる傳統をもつ國民、集團に對しては調和し適應することができぬ。こゝに、協調政策上重大なる困難が齎らされる。

隔離生活が如何なる過程をとるのであるか、それが他の集團に融合するにいたるには、如何なる過程を経るものであるかについて、米國に於ける言語集團としての Little Sicily の自然發達史により例證することとする。

リッツル、シシリイは自然集團の面影をもち、同一な言語を用ひ固有な經驗をもつ。集團人の希望は集團によつて直接に支持され、他によつて受けるよりも安易の感を與へる。通常、物理的乃至文化的に他の集團と隔離せられる社會的距離は移民第一代間はそのまゝ續く。移民は學校を除いては、主として、専屬文化機關に依頼する。職業のためには集團外に出るが、これは成人に對しては外部と接觸する機會を與へる。第二代目の兒童は周圍の社會環境に影響され、それが爲め、言語集團は破滅の危険に會ふ。放浪や不良行爲が子供の間に行はれるのは、

二の異なる標準に住む兒童の適應難によつて起る現象である。かゝる過程を経て漸次移民集團は土着集團に融合するが、それは長き過程を経てからでなければ實現せられない。同じ國語を用ひ同じ文化をもつ移民は、特殊地域に夫々自から隔離するを常とする。その上、皮膚の色により人種的區別を帶び、黒人圏とか、支那町とかといふやうなことによれば、隔離はいつでも嚴然として、存在する。これ等の人種的殖民は沙漠のオアシスの如く、白人社會のうちに點在する。かくの如き集團は熾烈なる集團意識をもち、緩かなる集合や、白人に迫害せられない集團よりも、社會的聯帶感が強固で熾烈である。

リッツル、シシリイは、言語を同じくし、文化を同じくせし、白人社會に點在して強き集團意識をもつ移民團である。リッツルシシリイは Little Hell として知られた所で、屑物の堆積されて、犬や鼠や山羊が騒ぎ廻り、荷車が煙で見分けられぬ中を通ひ、行商や女子供の喚聲怒號に立ちのぼる、ある小き地獄である。カトリックの大寺院から鐘の音が響き、廣告音樂が騒しい。祭日の花火の響きが時々ピストルの爆聲と共に起つてくる。子供が叫びながら街頭に嬉遊し、地獄にふさはしき異様な惡臭異臭が各所にはびこる。これぞ小き地獄として知ら



れるリッツルシシリイの光景ぞと覺ゆる。

二代前にはこの地域は Kilgubbin と呼ばれたるアイルランド人町であつた。一代前にはアイルランド人と瑞典人との部落であつたが、當時異人種がそこにやつて來たのである。最初は少しづつ徐々と移住したから、格別に邪魔されるやうなこともなかつた。當時、シシリイ人が徐々その地域に侵入し始め、工業が安労働を要するので、かやうな下等な人間がその地域に集合したのである。シシリイ人は一九〇三―四年にかけて大舉來往したが、この年は伊太利人の米國入が盛なる年であつた。こゝに、アイルランド人と、瑞典人と、シシリイ人との生活の競争が開始せられたが、下劣な安賃金で働くシシリイ人のためにアイルランド人や、瑞典人は追ひ拂はれて、ついに北方に去つた。一九一〇年頃には、ギルグビンはリッツル、シシリイとなつた。

リッツル、シシリイは直接歐羅巴より移民を受取り、舊世界の言語と風俗習慣とをその儘移植し、特殊な集團を形づくつた。西部シシリイから移民が次ぎ次ぎに來り、同類と共棲し、ついにシシリイ町をつくつた。殖民地は St. Philip Benizi 教會と Jenner 學校とをめぐつて

つくられ、それにオペラ館や活動寫眞館が配置された。西部の町は殖民地の主要な町で、伊太利人の商業區域に店舗が立ち並んでゐる。そこには、青物屋、市場、花屋、藥屋、安料理屋、玉突屋、酒場などが立ちこめて、第二代目の子供達が我等の町として誇りげに眺める。エルムとラルラベイには市場があつて、青物、菓物、羊毛、むきかけの牡蠣を賣つてゐる。その間に、醫師や産婆が開業してゐる。オークとタウンセンドの近隣は殖民地の中心である。有力なシシリイ人はセチウツクに住んで居るが、殖民地の東部境界は繁華な町である。

リッツル、ヘルは交通が悪く河と工業地帯とに限られて居て隔離するので、近頃まで絶えて米國國風の影響を受けなかつた。シシリイの女は本國に在ると同じやうに暮し、本國人相互に交際するのみで、儀式や集會に列席する外には米國人と接觸するやうな機會はなかつた。其地域に衣服製作工場が數軒あり、これ等の工場から仕事を貰つてきて稼ぐので、米國人町に出かける必要はなかつた。近時、幾百となきシシリイ女がアメリカ町に出かけて仕事をとるやうになつたが女達は群をなして行き、米國人に出會はないやうに氣をつけて歸る。全地域にシシリイ流の食物を賣るのみで、アメリカ風の食物は買ひたくもなく、そこに本屋はなく、しやれた贅澤



な着物や家飾りを求めることもできない。そこでは教育は行はれず、老人達はいづれも無學文盲である。老人達は寧ろ無學なのが當然であると思つて居り、我等は文字を學ぶには頭が堅過ぎると言つてあきらめてゐる。裁縫師、理髮師、靴屋といふやうな下等な商賣を營むが、熟練を要するやうな職業や軍事については見たり聞いたりすることもなかつた。シシリイでは果樹園に労働して居たものは南ヴァオターア街にきて果實を取扱ひ、果實運搬、荷拵へなどをやり、また、仲間と一緒に果實の行商をする。かくて、果實の卸商に出世するものもできる。但し、伊太利人は日本人のやうにたいいてい鐵道工夫となり、建築受負となる。

シシリイ人は一體として狐疑心強く、因循で、臆病で、法螺吹きである。大の家族自慢で、家庭には血縁つよきものは勿論、法律で家つよきとなりしものをも包擁して得々たる體である。近親結婚は常習であるが、これから屢々カストのやうなものが出來上る。家族癖は極めて強く、どんなに不埒な真似をなしても不心得であらうと追放せず、我儘を寛恕し、腕なしは食はせ、脱線者をも保護するといふ有様である。老人は尊敬され、子供は愛撫される。出産死亡洗禮、許婚などが相互交通する機會を與へる。宗教の儀式が時折り行はれるが、牧師は寧ろ添

物である。殖民地の指導者が宗教の儀式を司り、葬儀などの差圖をなす。諸種の協會は月毎に集つて限りなく些々たる事柄について囀りちらす。年の祭は年中一大行事で全部落總が、りで行ふ。町内の祭は各戸念入りの準備をなし、各町競ひ合ひ、喧嘩口論をなし、屢々、射殺騒が起る。娘は十二歳に達すれば自由なものと見做され、子供らしき所作をすることができぬとせられる。結婚までは學校や仕事の外、家を外にすることができない習慣であり、母親は絶えず娘を監督しなければならぬ、結婚は勝手に決め、本人に相談しないことさへある。娘は結婚するまでどんな男に嫁ぐのであるかを知らぬやうなこともある。

かゝる社會的傳統をもつリツル、シシリイは近年大なる變化をなし、殖民は徐々崩解しつつある。如何に隔離しても、外圍と接觸するを避くることはできず、學校や仕事で白人に接觸するので、舊慣は徐々としてくづれ、男女兒は自由と新たな機會とに接して固有の傳統を失ひつゝある。但し、家族は未だ崩解せず、その内には深き愛好の情が漲り、老人は若物達の變化を見て進歩發達するのだと言つて喜んでゐる。若い夫婦はリツツル、シシリイを去る傾向を生じ、舊地域の北方に家を構へ、兩親と往來はするが、舊集團を離れ去る形勢を生じた。歐洲大



戦前には白人と接觸するは稀で、たゞ仕事で白人と往來するだけであつた。但し、なるべく、個人として働かず、群をつくつて働き、なるべく、白人と接觸しないように力めた。白人と接觸し始めるや、アメリカの風俗習慣や法律に抵觸するものを生じ、喧嘩口論が起り、屢々殺人が行はれるにいたつた。リッツル、シシリイでは法に對し尊敬の念を有せず、有力者が勝手出鱈目な裁判をなし、法は少しも行はれて居らぬ。リッツル、シシリイは惡黨の集屯所であり、犯罪人の巢窟である。この地域には貧乏人が多いので、慈善家はリッツル、シシリイに財寶を傾注する有様である。移住民は米國の政治生活に參與する能力がない。シシリイ人は自分の村を單位として、それ以外に出でない爲め、國家的政治には全く理解なく、無能である。そこでシシリイ人の投票は賣物として市場へ持ち出されるのである。

シシリイの家族生活は第二代目(兒童)にいたり、米國の生活と接觸して崩解の途を辿りつゝある。學校では家庭の風俗習慣と別のものに接し、シシリイ固有の傳統は亡び去りつゝある。第二代目の子供はこの別な世界に同時に住んでゐる。家庭と學校とに行はれる傳統は全く別のもので、彼此矛盾撞突する。子供がアメリカの風俗習慣をとれば、家庭からは不良として

見られ、家庭のそれに固着すれば、アメリカ人からは又不良と見られる。こゝに、第二代目にいたり、アメリカに融合せんとして正に一步を踏み出せし形勢が看取せられる。同時に二主に仕ふる能はず、二の風俗習慣をとり入れ、二の社會的傳統を併せもつことなどはできない。そこで家族と子供との間に絶えざる紛擾が持ちあがる。併し、子供達はその部落に住はざるべからざる必要上、アメリカの社會的傳統を捨てることを強要せられる。こゝに、兒童の社會的不適應なる現象が起り、従つて、不良兒、頑童の群れなどが現はれ、在來の社會的傳統の破壊を想見せしむる。この場合、不良癖、惡行の頻出は、在來の固定せし社會環境に適應する事能はざるにいたりし結果であつて、いつでも新時期に現はるゝ現象である。我國に於ても、明治維新以來固有の社會的傳統は崩解し、新時代の道德習慣の發達せざりし過渡時期に於ては諸種の社會的不適應 (social maladjustment) が起り、青年男女の混亂を見た。シシリイ部落に於ても固有な社會的傳統は米國のそれと接觸することによつて崩解し始め、少青年達は新なる米國文化に應接することにより、乃至、それにも未だ適應し兼ねることによつて、諸種の社會的不適應が現はれ、一見、墮落廢頽せしが如き觀を呈す。



シシリイの統治は凡て村単位で行はれてゐる。國家はシシリイ人には何の勢力をも及ばさぬ。近隣團體がシシリイ人に對しては社會的統制を行ふ。過度期に於ける少青年の廢頽は社會一般若くは法律によつて矯正せられず、近隣によつて村によつて統制せられる。村では有力者が捌き役を勤めるので、有力者は社會的勢力をもち集合力を表現する。都會は何の勢力も殖民地に及ばさぬ。その上、殖民地の牧師は北伊太利出身者が多いので、自然、シシリイ人には没交渉なのである。それでも、教會はある程度の影響を與へ、結婚死亡などに牧師が儀式を司どるなどのことも行はれる。但し、廢頽的な少青年の間には教會は急にその勢力を失ひつゝあり、また、社會に對し何の勢力をもつて居らぬ。殖民地で最も勢力のあるものは地方政治家達である。これ等の地方政治家は地方指導者、警察官と提携して權力を揮ひ、上層に就く。

リッツル、シシリイには殖民地を全體としての意識なく、共同な感情や共同な利害の感情がない。たゞ村單位の意識と共同感情とがあるだけである。シシリイ人はあくまで村本位であり、村の意識に終始する。シシリイ人を一例として隔離生活はいつれの集團にも行はれるが、やがて、それが四圍の集團に接觸するにいたるや、分散が行はれ、如何なる頑固なる隔離生活

も竟に分散されて包攝集團に融合するを見る。リッツル、シシリイに於ては、第二代は既に崩解の徴を發し、隔離生活より分散へ轉じつゝあり、不良癖、頽風、汚浴が現はれ、社會的不適應を見つゝあるが、これ即ちシシリイ固有の傳統の失はれる過程に於て先づ現はれるものであり、やがて、周圍の米國の傳統が勝を制すにいたれば、一般にシシリイ人にも米國文化が普及確立し、茲に融合の實を擧ぐるにいたるであらう。恒久的な社會の傳統より離れ、一時放浪状態にあるときは、浮浪的衝動現はれ、暗中摸索をなし彷徨ひまはるので、行爲が全く崩つれて一見廢頽せしが如く見える。如何なる集團でも絶對隔離生活をなすことはできず、周圍の集團と接觸するので、文化的交流を起し、傳統の交換となり、竟に融合するにいたる。融合は自然的過程で、これを遮り止むることはできない。如何にして融合を遮りとめんかと詮議工夫する方が、如何にして融合を實現せんかと焦るよりむづかしい。融合は自然的過程であつて、放つてをいても、いつとはなしに自然に行はれる。隔離は融合の勢力に反抗することはできぬ。集團が接觸しさをすれば必ず融合するときまつてゐる。融和に焦心し、腐心するが如きは、問題の性質を理解せぬためであるさへ考へられる。文化の研究について名ある Clark Wissler



氏はの著 Man and Culture に於て融合は接觸しさへすれば必然的に行はれ、それを遮ることは寧ろ困難であるとして It looks as if there is but one way to prevent cultures from mixing, viz., to keep them from touching. Conquest cannot do it unless it amounts to instant extermination. That this should be so is not strange, for the very accumulative nature of culture and its apparent tenacity of life require a readiness to inoculation, diffusion, or perhaps a better term is readiness to suggestion と言つて居り、文化は如何にしても、その交流を妨げる事ができず、融合を遮ることは相手の集團を絶滅するのでなければ行はれぬと極言してゐる。ウイツスラア博士は政治的區劃は文化的交流の妨げとならず、單なる接觸によつても、たとへそれが、敵對關係にあつても、文化は互に交流すると言つてゐる。個人が接觸することによつて、交互に個性を交換し合ふように、集團の文化、傳統も亦接觸さへすれば、交流作用を起して彼此交換する。政治組織は他の政治組織を征服して併合するが、文化は交互關係によつて融合する。文化、傳統の融合は社會的接觸によつて必然的に行はれる。接觸あるところ必ず融合

となる。社會的傳統は他の傳統と接觸しさへすれば融合するので、ウイツスラア氏の言ふが如くそれを遮る方法ではない。然らば、集團の融和協調は主として社會的傳統の交流によつてなされる限り、社會的傳統が接觸によりて融合し、一なるものとなることによつて、 a Process of becoming alike そのものが融和であるとする見地によつて、既にそこに融和協調が成し遂げられると考へることができやう。ここに、融和協調は自然的過程で、寧ろ、融和協調せざらんとする方がむづかしいと見なさねばならぬ。これによつて、奴隷の消滅は自然的過程であり、文化と社會的傳統との融合性の上より眺めたる奴隷の存在は一時的のものであるとさへ考へられる。

文化の通流 (diffusion of culture) は接觸によつて必ず行はれる。文化の交通を妨げる方法としてはない。ウイツスラア氏は文化の流通を自然的流通 (Natural diffusion) と意識的流通即ち組織的流通 (Organized diffusion) の二に分つてゐる。人間の集團によつて企畫されざる素朴な無意識な文化の流通は自然的流通であり、計畫し、熟慮をもつて流通させるもの即ち組織的流通である。但し、この二の間には截然たる區別なく、單に兩極端を表示するもので、その



間に無数の中間状態が介在する。如何なる場合でも、専ら自然流通はたかく、原始社会に見られるのみで、開明社会に於ては常に意識によつて指導流通される。

### 五 融合の過程

融合は形式的には集團間的態度（この事に關しては「階級闘争の研究」第四、五章を見られし）の衰滅を意味するが、内容的には血縁、風俗習慣、道德、宗教、經濟、政治、文化の類似若くは同一となることによつて融和協調する過程をいふ。人種、宗教、經濟、政治、文化の異なるによつて所謂人種的偏見を生ずる。

一集團のうちへ他の集團をいれるには危険が伴ひ時に人種並に國家の衰頹ともなるので、いづれの國に於ても移民政策には細心の注意を拂ふ。異人種の四方より集流する米國に人種的偏見があり、移民問題があり、各種の制限が行はれるのは當然である。もし、米國にして、無方針なる移民政策の下に、千客萬來を夢みるならば、國家的統一と人種的統一とは忽ち破り去られるであらう。殊に、東洋諸人種の如く人種も異ひ、社會的傳統も異ふやうな人種、國民を無

雜作に引き受けることは絶對にできぬので、現に移民に關しては重大なる問題を惹き起し、日本も亦問題の一中心となつてゐる。

もし、新來者とその國の文化、傳統に融合するを嫌忌し若くは無頓着であるとすれば、かゝる新來者を同化するは困難であるから、畢竟、好ましからぬ移民として待遇するが當然であらう。所謂好ましからぬ移民は少なくないので、諸々の形式的制度も設けられるのであり、歸化法などを設けて制限するのである。歸化は法の手段を通じて國民たるの權利と義務とを獲得する形式的過程である。米國などでも歸化やその他の法を設けて入國を制限して居り、屢々、不當なる法の解釋を施して外來者の入國を禁ずるが、如何に法によつて同化を妥當ならしめんとするも、この種の形式的方法及手段を通じては一國の同化政策を効果あらしむることはできない。たゞ、法によつて、強いて半疑半信であり、若くは進んで歸化せんと決心するにいたらない移民までも同化せんとするも好結果を得がたきは明かである。同化には進んでその國の傳統に參與し、國の統一を高むるが如き意向をもつものゝみを參與させなければならぬ。強いて歸化法を適用するが如きは却つて移住民の反感を買ひ、その意志を強制して、ついにその國の傳



統、文化に參與するを嫌忌するにいたらしめる。法的形式は同化に深入りすることはできず、それは同化策として基本たるべきものではない。單に法的に政治生活に參與するといふことだけでは同化は終をつけぬ。但し、法的同化を強いて拒むやうな政策をとれば、既に傳統、文化に同化して善良にして好ましき國民たるの實を示すに拘はらず、尙且つ國籍を有せず、従つて投票權もないといふようなことにもなる。日本人にして渡米後久しきに渡り、第二代目たる子供は既に十分米國化して居るに拘はらず、米國の市民權を得て居らぬ。かやうなことはいくらかもある。異人種の同化は慎重の用意をもつてなされなければならぬが、米國の現状は極端なる排外思想と、排外的態度とに禍ひされてゐる。

融合、同化は一見困難なる過程の如く見えるが、實は自然的過程で、人為改造せずとも自然に實現すべきものである。ウイツスラア氏の言ふが如く文化は接觸すれば必ず交流するもので、これを遮り止めるといふやうなことはできない。然らば、融合、同化は自然に行はるべきことで、寧ろ逆に融合せざらしめんとし、同化せざらしめんとする方がむづかしいと言ひうる。自然に融合、同化するやうな要因があり、その機能がはたらいて居さへすれば、自づから

融合、同化にいたるが、然らざる場合には、補助手段を動かして、一層速かに融合、同化に導くやうにしなければならぬ。これ即ち移民の傳統を減衰することによつての同化で *De-nationalizing policy* である。これには職業紹介所、案内所、教會、學校、社會中心、隣保館などがその職分をつくす。

移民の讀みうる國語にて新聞雜誌その他の刊行物を發行し國狀に直接間接接觸せしむることも一の補助手段たることができる。國狀の異つた國へ移住し、殊にそれが異人種でもあれば、新奇なる社會的傳統に突然接觸することゝして、たゞく混迷するばかり。その上、移民が農民又は工業労働者で、大都市の生活に馴れざるが如きものは、現代工業文明の錯綜紛糾に度を失して適應するをえず、徒らに混迷するであらう。これに對し、理解しうるが如き本國語で新たな國狀を紹介するあれば、一層速かに融合、同化の實を擧げしむることを得るであらう。教會や、隣保館や、俱樂部や社會中心や、學校なども亦融合、同化の補助機能をつくす。寺院や教會は一種の社會中心 (*social center*) であり、社會の縮圖であるから、そこで一般社會の事情をつくし、適應の過程をすゝめることができる。隣保館では異人種、異なる階級の人々が出入



し、異風異俗が接觸しうるから、相互理解するたよりとなる。かつ、その中に一般社會は明かに縮寫され描出される仕組みであるから、隣保館を通じて融合にいたらしむる方法は有効と思はざるをえない。學校や夜學校では異なる人種異なる階級の子弟が共に學ぶから、自他互に知り合ふ機會となる。そのため、子女の方が父母よりも新らしき國狀に急速適應し、子女は父母の通譯たり、道案内たり又説明役となる。米國では、教會は佛蘭人、獨逸人、伊太利人、アイルランド人、西班牙人、波蘭人などの社會中心となり、米國化の機能をつくしつある。我國の寺院が融和問題解決の急先鋒となり、著明なはたらきをなしつあることは東西兩本願寺の融和活動、社會活動を見ても分る。宗團は人類を一視同仁、四海同胞兄弟と見、一切一如平等と觀ずるところに内より融合、同化の契機を含み、自づからその仲介者として適役たるを示す。米國の教會には離籍の傾向が著るしく現はれて居る。現時文化の増進と共に科學的思想が民衆の間に普及し、その上、一知半解の科學思想に禍ひされて信仰に疑を抱き故ら迷信をあばくが、殊に少青年の間に無宗教の傾向増大し、いつれの文明國に於ても同様宗教に冷淡なる趨勢となり、教會に出席せざる風潮は一般的となりつあるが如くに見える。その上、自由思想旺んに

して、一定の型にはまるを壓ひ、益々教會より離れ去る風潮を誘發しつある。米國ではボヘミア人、猶太人のうちに教會離反の傾向が著明であるようである。教會、宗教團體が民心をつなぐに足る權威を失墜するにいたれば融和協調機關としても無力なものとなり、その他人生に對し百般の發言權を失ふことゝもなるであらう。宗教團體及其の機關はそれに入出入するものを感化してインスピレーションを與へ、異境に在つて心靈的慰安と希望とを與へ、個人的表現の機會を與へ、共同な作業をなし、自他知り合ふなど、宗團の融和協調の機能は顯著なるものがある。米國の教會は一國語で説教をなさず、全米たゞ一ヶ國語を用ゐるに過ぎざる州はたゞ一あるのみで、その他はいろいろの國語で禮拜をなしつある。ニュイングランドの一千二百の外國語使用宗教團體は信從百二十五萬人に對し三十種の國語で説教をなしつあり、中部大西洋諸州の二千六百七十五の外國語使用宗教團體では三百五十萬の信從に對し三十七ヶ國語を使用して禮拜をなし、ミネソタ一州だけでも二千七百六十宗教團體、六十萬信從に對し二十ヶ國語を使用しつある。かくの如き大がりの外國語使用によつて、如何に教會の宗教的雰囲気とその勢力とを通じて、無數の移民に對し米國を紹介し、米國民に親和させ、米國の文



物制度を愛好せしめ米國化を果しうるか測り知るべからざるものがあらう。教會は單なる心靈傳播機關ではない。本來、教會は専ら心靈を開拓する場所であるけれども、心靈生活と社會生活とは分斷しうるが如く便利に出來上つてゐない。人間の實際生活は綜合的である。かゝる綜合的な人間とその生活とに對し、現今の科學は分析的方法を用ひて實在を探明するのだと稱し、現に見るが如くわづかにトンボ學者蝶學者が恰も宇宙の奧秘でも知つたかの如く滿悦しつゝあり、眞とは何か、善とは何か、聖とは何かの問題には没交渉で、トンボの足をいぢり、蝶の羽根を調べつゝある。教會を心靈生活に局限せんとする有りふれた見解も亦人間生活を分析によつてどうかとい心靈を實生活から切り離しうるが如く考へ、無駄な無限に膚淺な見解に出たり入つたりしてゐる。

著者は心靈生活と社會生活との綜合については「輓近の社會事業」十章と「社會政策大系」七卷に詳説した。宗教政策の何であるやについては拙著「社會事業概論」第二編第七章を參照せられたい。

學校がその國の傳統、文化を傳達する機關となりうるは明かである。土着の子供と移民の子供

とが同じ學校で學ぶことによつて共通な風俗習慣を得、言語を共通にし、衣服を共通にし、歴史を通じて、共通な傳統を知り且つそれにひたることができる。融和協調せんとする二の集團が學校を利用し、これによつて目的を達すべきは決して少々ではない。なほ、補習學校、夜學校、講習會を利用することも亦一種の融和方法である。我國に於ても、この種の融和方法は既に詮議されて居るが、學校に於ては公平であり、愛好の精神が輝き、不遇なる地位にある人々に對し滿腔の愛情をそゝぎ、人間として尊敬の情をもたさせるやうに今一層努力しなければならぬ。我國の教育はあまりに形式的で、内容空虚なる憾みがある。異なる人類、異なる階級、異なる集團が各別に劇場をもち、音樂堂をもち、運動場、體操場などをもつことは宜いとして、融和協調の見地からは、共同なる劇場、音樂堂、體操場、運動場をもち、音樂その他の藝術の觀照を通じて、共同なる趣味を開拓するならば蓋し融和に裨益あること豫想外に大なるを見出すであらう。米國の音樂、繪畫、劇は歐洲諸國民によつて非常に豊富精妙なものとなつた。米國人は歐洲諸國民より音樂、劇、文學、繪畫、彫刻に關し高き趣味を與へられ、かくて、新開地の文化を高め、趣味を向上せしこと少々ではなかつた。



融和協調は諸々の補助手段によつて促進せられる。これ等の補助手段を通じ、それによつて徐々融和協調の方向を辿るのであるが、我國では未だ融和方法として知れ渡つた隣保館さへも利用するにいたらない。社會事業界は未だ草昧の時代で、實際家がすべて切り盛りをなし、天狗揃ひで、いづれの問題についても實際家が一バン物知りの如く妄想して居る。著者は融和機關として隣保館を解説して居るが、社會事業界融和事業界の現業家のうち、果して、どれ程その意義を體得しをるや不明である。従つて、隣保館の普及も今少しく上氣した熱度の下降をまたなければならぬであらう。

融合、同化の自然發達史に於て、最初現はるゝものは、たかゞ適合 (acomodation) であらう。接觸する數多き集團には各異る風俗習慣、職業、道德、宗教、政治、經濟、文化が支配するから、善意の場合と雖も紛糾錯綜して彼此矛盾衝突し、收拾すべからざる感を深ふするであらう。但し、善意さへあれば、これ等の相合はざる傳統を一の形體に組織して、一と先づ統制することができやう。こゝに、適合が現はれる。異る傳統、異る文化の接觸にあつては、無論直截に融合するなどといふことはできない。容易に彼此組織しえざる程異る集團の傳統は

相合はないのであるから、これを接合し、相次いで、適合せしめる事は決して容易なことではない。更らに、かやうなものは融合するなどといふことはできない。融合は一舉手一投足に來るにあらざして、徐々成長するまゝに育ち、自然に成熟する一途あるのみ、自然的發達は即ち融和協調の基本的方法であらねばならぬ。

融合、同化は「同一となること」であり、少くも「類似すること」であるから、同一と見られざるものを同一となすことに、主力が傾倒されなければならぬ。集團を分立するやうな基本的な差異よりも、通常、見立つものが、人種的偏見、集團的偏見の中核となるから、最も目立つものから除去して融和の歩を運ぶのである。人種の色は最もよく目立つから、これ程融和協調の妨げとなるようなものはない。色やその他の目立つ人種的態度 (feature) は人種間に對立的感情を煽り、敵對感情を激成する。これ程、異人種を調和させ融和させる障害となるものはない。但し、この問題は生物學、遺傳學が現今の如きひくき發達の程度にある間は如何ともすることができないであらう。人種の融合、交雜の問題はその解決を將來に遷延する外に策はない。原形質の交雜による融和協調方法の外に、もう一つのもは即ち社會的傳統、文化の流



通によつて共通なものとなり、よつてもつて、融和協調する方法である。

ボア教授に據れば、人種と文化とは其間には相關々係がないから (Baor, The Mind of Primitives Man, 1917) 人種と文化とを分離するは容易で、一の人種の所有する文化はわけもなく他の人種に傳播することができる。これによつて異なる諸人種と雖も同一文化を所有することができ。これに反し、同じ人種と雖も異なる文化を所有することはできず、また、いくらかも同じ人種が異なる文化を所有して居る。こゝに、文化は異人種間に融通し、交換し、移植することができるといふ原則が成り立つ。この原則に照らして、融和協調に蒞れば、異なる集團の社會的傳統文化を他の集團に移植して類似せしめ、若くは、同一ならしむることが能きるはずである。これを、米國について見るに、諸國の殖民は夫々異なる文化を荷つて米國に入り込み、文化の展覽會たる觀を呈するが、それでも、漸次、固有の文化を喪失して米國文化に融合するにいたつて居る。これによつて、社會的傳統及文化より見たる融和協調は打ちこえうべからざる天嶮であると思はれぬ。

社會的傳統は土着人と移民と包攝集團と被包攝集團との接觸によつて着々なし遂げられる。

移民が職業を求めて土着人の工場に通へば、そこで、多くの土着人に合ひ、風俗習慣の接近となるであらうし、子供が學校に通へば言語を學び、歴史を知り、速かに土着の傳統に應化するであらうかくの如く、音樂會へ行き、劇場にいつたり、教會に出席し、買物をしてまはるなど傳統文化の交換は一瞬の休みなく活潑に行はれる。こゝに不知不識最も有効なる融和協調が行はれる。これ即ち、自然的過程による融和協調である。自然發達史によるものは、何づれも、かくの如き自然的な過程によつてその實をあげる。

融合とは他の個人若くは集團の記憶、感情、態度を保有して交互入り込む (interpenetrate) 過程であり、かくて經驗と歴史とを共有し、共同文化生活に入るをいふ。然らば、社會的傳統若くは文化が異なる集團に流通し、それを採ることによつて、社會的遺産を共通になし、記憶と感情とを同一になし、もつて、共同文化生活 (common cultural life) に參與するにいたれば茲に融合、同化の成立を見ると考へられる。融和、同化の完成と共に融和協調も亦完成する。

### 六 今の社會と奴隷



近代現代に入つて人権思想入來し、我も人なり彼も人なりで、集團間の距離は減縮したやうに見える。併し、今の社會に於ても、國內國外の諸集團の對立は毫も改まらぬが故に、各種の奴隷は天下に累々として算を亂して苦吟しつゝある。今に於て、一見、奴隷は消滅せざるが如く見ゆ。人間の利己心は毫も改らず、心理的變化に注目するもの極めて少なく、わづかに社會組織問題が囂々として論議せらるゝを見るのみ。

併し、奴隷出現の淵源は既に分明し、奴隷消滅の原則も確立し、奴隷の消滅必ずしも不可能なるを覺ゆるにあらざ。たゞ、今に於て、これを實行に導くが如き心理的變化が與へられない。その上、集團圏の擴大によつて、自然に奴隷は消滅する性質のものであるが、今遽かに奴隷の消失するが如き一切包攝的集團出現せず、如何に現代人が世界の平和協調につとむるも、當然この事不可能なるが如く思はれる。今日の社會に於て、奴隷を減縮する政策は二となつて現はれるであらう。(一) 心理的變化あり、人間が聯帶によつて仲間生活をなす義に徹底することによつて、(二) 集團圏擴大して包攝關係年と共に大となることによつて。

然るに、現代人はたゞ社會組織の問題に没頭し、マルキシズム以下、集團的立場、階級的立

場を採つて喧々囂々たり。著者は最も明かに階級的立場に反對する。一部の人間の福利をいふが如き立場には著者は絶対に左袒せず賛同することができない。著者は人類全體の福祉問題に關心す。たとへ、多數なりとも労働階級といふが如き部分問題のまわりをめぐつて論議し努力するは著者の最も忌み且つ耻づるところ、著者は堅く人類的立場をとつて動かない。一部の人間よりも、世界大衆の立場が如何に大切であるかについて現代人は深く思念しなければならぬ。階級的立場からは部分的集團としての階級が互に撃ち合ひ攻め合ふのみで、無数の奴隷が代る／＼に出現登場するのみ。マルキシズム以下の階級主義によつては畢竟代る／＼別の奴隷が出現するあるのみ。たとへ全人類の名を僭して階級戦を行ふとも、それは畢竟資本家階級がその昔全人類の名によつて自由と平等と博愛とを要求したと何の異るところはない。全人類の解放を目標とするならば、須らく階級的立場を去つて、人類的立場に移らなければならぬ。全人類の名を宣して階級戦に従ふ人々は、階級戦を廢止して、一視同仁、世界大衆と福祉を分か合はなかければならぬ。こゝに、人類的立場が現はれる。

階級的立場からは必ず奴隷が代る／＼現はれる。奴隷の消滅は人類的立場に依らなければならぬ。



らぬ。今の社會が階級を基準として闘ぎ合ふ限り。奴隷と貧乏とは少しも減少せぬであらう。

参 考 文 籍

1. 海野幸徳 「階級闘争の研究」
2. 海野幸徳 「閥の偶像」
3. 海野幸徳 「社會政策概論」一 二章
4. 海野幸徳 「最近の社會事業」十五章
5. 海野幸徳 「日本人種改造論」
6. 海野幸徳 「興國策としての入種改造」
7. 海野幸徳 「社會政策大系」第七卷
8. Park and Burgess, Introduction to the Science of Sociology, 1924.
9. Park, Miller, Old World Traits Transplanted, 1921.
10. Commons, Race and Emigrants in America, 1924.

11. Bogardus, Immigration and Race Attitudes, 1928.
12. Dawson, Gettys, Introduction to Sociology, 1929.
13. Dixon, The Building of Cultures, 1928.
14. Drachler, Democracy and Assimilation, 1920.
15. Simons, Social Assimilation, American Journal of Sociology, Vol VI.
16. Gosnell, Characteristics of the Non-Naturalized, American Journal of Sociology, Vol XXXIV.
17. Gosnell, Non-Naturalization : A Study in Political Assimilation, American Journal of Sociology, Vol XXXIII.
18. Smith, Changing Personality Traits of Second Generation Orientals in America, American Journal of Sociology, Vol XXXIII.
19. Wissler, Man and Culture, 1923.



20. Sorokin, Contemporary Sociological Theories, 1928.

## 第十章 奴隷の心理

### 一 奴隷の心理

奴隷は異常状態若くは病的状態の産物である。かくの如き病的な異常状態は奴隷の心理を變化させずしてはをかない。個人としての奴隷の心理は異常なものであり、病的であるが、集團としての奴隷の心理も亦病的であり、異常である。個人心理が常軌を逸して病的なものとなるが如く、集團心理も亦一體として異常となり病的となる。

奴隷は社會的産物であつて、かたまりとして出現する。集團的鬭争の結果、優勝集團と劣敗集團に分れるが、劣弱な集團は劣敗することによつて、一體として奴隷の境遇に沈淪する。集團的奴隷は個人的な奴隷と同じく制壓されて自由を失ふので、自由人として心理をもたない。制壓されたる個人並に集團は一種の異常心理をもつこと女の如く、猶太人の如く、アイラン人の如く、又、凡ての被制壓者及び被壓迫集團の如くである。女の心理は一種特別のもので



主観的である。猜疑心嫉妬心の強いものであるが、これは制壓心理であり、男によつて制壓され虐待されて現はれたものである。猶太人やアイルランド人は女性の如き心理を有ち、一種不快なる心情をもつのは、矢張り、人種として集團として壓伏され虐待されたからである。壓伏されたるもの、虐待されたるものは、その個人であると集團であるとを問はず、制壓心理をもつ。

人間には他の上に力を加へ制壓を弄にするを喜ぶ性質がある。何でも他を支配し、他を操縦し、他を傾使し、乃至、他を虐待酷待するをもつて快とする野蠻な性質の持主が人間と稱する厄介なる動物である。人間世界には他の上に權力を加へることが流行し、制壓を弄にして快を貪り、みだりに操縦し傾使し虐待して喜ぶ。こゝに、個人と集團との自由が失はれる。個人の如く集團も亦力を加へられ、制壓され、虐待される。實は、力によつて壓伏され制壓されるものは個人でなく、寧ろ集團である。人類の活動は凡て集團によつてなされる。仲間生活後の人間には個人的行動といふものではなく、その一舉一動は集團的行動であるから、制壓又は虐待も集團に關してである。制壓とは一の集團が他の集團に全體として加へる力を意味する。こゝに

集團としての奴隷（個人としての奴隷に對して）が現はれる。これに従つて、制壓心理は個人心理ではなく、集團心理となつて現はれる。民族自決の問題が戦後やかましかつた。波蘭ではウキルソン大統領によつて民族自決權を與へられたので、先頃ウキルソン夫人の參列をえて、ブラーグにウキルソンの銅像をたて、その序幕式を行つた程である。民族が一體として制壓されるところに自由が失はれるが、他の加へる力を排除して、民族が一體として自由たるところに民族自決が行はれる。

集團的闘争の時代に集團として奴隷たるものは接應に追がない。波蘭が民族自決權を獲得して、集團としての奴隷たる境涯より免れんとし、猶太人もアイルランド人もその自由獲得のためには多年一日苦戦惡闘をなしつゝあり、然かも未だ酬られるにいたらない。集團としての奴隷はたゞに政治上から生れるのみでなく、經濟上からも文化上からも發生する。經濟的奴隷の境涯に沈倫したとして、集團的自決を得んとして今正に争覇をなしつゝあるものが即ち勞働階級である。文化的に制壓を加へ、文化的奴隷を産出しつゝあるものが學閥である。學閥は獨占と暴虐とを極める。



閥についての獨占、殘忍、獸性については拙著民衆綜合哲學第一卷として公刊せし「閥の偶像」に仔細に解釋した。

經濟的壓制、政治的壓制、文化的壓制によつて心的病理状態を生ずる。この意味より見れば、勞働運動に見る殘忍性、競争心理、鬭争心理、嫉妬、排擠などは悉く變體心理的現象に屬する。よつて、勞働運動については良し悪しの價值判斷を下すべくでなく、自然現象として冷かにその病理状態を靜觀するれば足りる。

## 二 自由喪失と集團的自決の心理

奴隷心理は變態心理若くは病的心理現象で、一の集團が他の集團を制壓し、虐待酷使するところに現はれる。すなはち、奴隷心理は domination によつて現はれる異常心理である。集團が互に制壓を逞ふすれば、劣弱なる集團は制壓せられる側に向ふが、こゝに本能として動向としての自決、自由が失はれ、それによつて異常心理を生ずる。何でも、人間の動向や傾向や本能を抑壓すれば軌道を外れて正常ならざる心理を生ずる。先天的な性情を抑へてその發露を妨

げると、それを正常なる途に進むことができないので外れて異常な途を辿り、抵抗となり、鬭争となり、爆發となつて現れる。自由は個人にも集團にも失はるべからず、絶對必要なる生存條件なるが故に、自由の喪失は破壊となり、非組織化となり、その代償を病的心理に求める。こゝに、異常心理が發現する。

自由を奪へば被壓迫者若くは被壓迫集團は受動的となつて忍従の態度をとるかと言へば、その反對に、激昂し、抵抗し、鬭争し、ついに收拾すべからざるにいたる。そこで、多くの場合、抑壓政策は失敗となつて現はれる。現時、資本家は勞働者を抑壓して私利を圖つて居るが、資本家企業家はいつまでも勞働大衆を壓迫することができると想つて居る。こゝに、遠算誤算が生ずる。勞働者は資本家に抑壓され忍従し、沈黙服従するようなことはなく、現時見ることが如く咆哮し抵抗し鬭争をつゞける。その競争心理鬭争心理によつて生ずるところのものは多く壓迫によつて生ぜし異常心理に屬する。

革命時に現れる異常心理については「階級鬭争の研究」第七章「革命の本質」を見られたし。



かゝる異常心理に支配せられる労働者が合理的で、打算的で、歩武堂々進むことのできないのは當然でこゝに革命時に現はれる病的心理が發現する。資本家の壓迫によつて、現時労働大衆のもつ心理は決して正常なものではなく、異常なるが故に、現代民衆を支配する心理現象は決して正常なものとは言ひがたい。こゝに、現代人の絶えず接觸する心理的病理的状態があり、これに應接するだけでも現代人は災厄の極である。資本家と労働者との争覇に於て、資本家が労働者を制壓して私利をはかり、資本家の利己主義の代償として、現代人は病的心理に取りまかれ毒瓦斯を呼吸しながら、不愉快なる生活をなすつゞけて居る。

階級闘争、集團闘争は心理的な毒瓦斯を製造して自他を禍ひし、人類一般を毒するが、人間は凡て持つて生れて來た集團本能によつて他を制壓する根生を根絶することができぬ。現時に於ても今を限りと政治的獨裁、經濟的獨裁、文化的獨裁を斷行し、何の躊躇も遠慮もなきが故に、政治的に抑壓される奴隷民族を生じて、民族自決權が喧しく、經濟的には抑壓される奴隷としての労働大衆を生じて革命の聲旺んに起り、文化的には抑壓される非學閥の反抗となつて、茲にも波瀾を捲起しつゝある。政治的抑壓と經濟的抑壓とに對しては既に被抑壓者と被抑

壓集團とが蹶起して前代未聞の闘争を捲き起したが、文化的抑壓によつて現はれたる文化的奴隷に對しては未だ問題が重大化するにいたらない。

文化的奴隷の正體を知らんとせらるゝ讀者は著者の近著「閥の偶像」全巻を通讀されたし。

抑壓は個人に加へられるよりも、集團に加へられる。これ、人間は個人生活をなすよりも仲間生活をなすから、抑壓を加へて有効ならしめんとすれば、個人よりも集團を壓迫しなければならぬからである。それに應じ自由の問題、若くは解放の問題は個人に關するものではなく、集團に關するものとなつて現はれる。個人解放の問題が大切なばかりでなく、ヨリ以上、民族自決、人種解放の問題が重大だと考へられてゐる。

抑壓は無限に續行することができない。然るに、支配階級はいつでも暗愚なるため、自己の慾望を充足するために無制限なる壓迫を加へる。こゝに、誤算が生ずるが、現代人は「社會の偶像」を奉持し、社會を萬能と考へて居る。こゝに、社會を重要な科學とする現代人の違算が生ずるが、それと共に社會主義などいふ社會本位の誤れる思想も生ずる。個人を投げ棄て



、社會を捨ふ現代人は何が人間生活の基本であるかを忘れ果て、居る。人間は社會の道具として生れてきたのではなく、社會だの文化の進歩だのと言つて、個人の生存を不如意ならしめるには及ばぬ。たとへば、産兒調節政策に對し、人口の過剰を條件としてのみ文化は増進するから人口を制限してはならぬといふが如き論法は現代人特有なもので根本より誤つてゐる。現代は凡て個人よりも社會を重しとして居る。著者は現代人の陥れるこの根本的謬妄を別の軌道に就くべく畫策し努力する積りであるが、本書と前後して「街頭社會大觀」第二卷として「社會の偶像」を公刊する考へである。

抑壓が集團に加へられる結果として、集團的奴隷が発生する。階級、國民、人種といふが如き集團に對して抑壓を加へるため集團的奴隷が生じ、世界を通じ病的心理が生ずる。病的心理は爆發性をもつから現時見るが如く、あらゆる文明國を通じて病的心理が発生し、それが爆發して紛擾、鬭争、革命となつて續々現はれてくる。かゝる事態をもつてして、協調と平和とを求むるは望みなきことで、現今、慣用の締盟國間の平和などいふ愛嬌たつぷりの空世辭が頻出して、益々武備を修めて次の喧嘩の準備をなす有様である。現時見る鬭争は個人的鬭争に

あらずして集團的鬭争であり、内には國內の小集團が絶えざる鬭争を續け、國外には民族、人種國民が野蠻なる鬭争を續行しつゝある。これによつて、世界を通して鬭争的偏執が生じ、異常心理、變態心理、病的心理が生じ、大戰後の經濟的不景氣と相まつて、世界の人類は今正に地獄のうちに坐しつゝある。然るに、これでも、未だ争ひ足らず、噛み合ひ、食ひ合ひ、竟に自他共に滅亡に瀕するを知らざが如き體であるのは笑止千萬ではないか。

世界の人類は今や自由を求めつゝあり、自決を求めつゝある。あらゆる國民、人種、階級は等しく自由と自決とを追ひ求めつゝある。如何にこれを遮り止めやうとしても、決河の勢力を以て滔々として押し寄せてくる。勞働者の自由熱求と自決運動とは竟に遮止せられるであらうか、弱小國民の自由と自決とは結局抑壓しつくしうるであらうか。國內の數多き被壓迫者は愈々益々力を加へこれを下層へ抑へつけ得るであらうか。各種の支配者は永久に下層者非特權者を抑壓しうるが如く妄想して、その特有な暴慢無禮な態度をもつて不可能なる作業に大汗を流して居る。地下から迸出する火氣を阻止する無益な勞働を嗤ふものは下層者と下層階級の自由と自決とを求めて爆發する解放を遮止するを頗る付きの愚擧として斷念する外はなからう。



然かも支配階級、列強は救ふべからざる亡靈に取りつかれて弱者虐めを斷念せず、愈々益々爪牙を磨き、これを屠りつくさんとする。これに對し弱者劣者は自由と自決とを恢復せんとして争ひつゞけ、多くの場合、その目的を達する。中世の素町人たる資本家は貴族と戦つて勝ち、支配階級の地位に昇つたが、往昔の境遇を忘れはて、今は労働者を壓伏しつくすことができると妄信し妄想してゐる。こゝに必ず、資本家の誤算が生ずる。

自由と自決とは相關連する。自由とは單に抑制の加へられない受動的な消極的な状態を言ふのではなく、能動的に積極的に自決 (self-determination) する状態を指し示す。

### 三 自由・自決・人間性

人間にとつては生命そのもの、寧ろ生命よりも大切なものが、たつた一つある。それは自由であり、自決である。自由と自決とは人間性の中核をなす。近代現代に澎湃として流るゝ人權思想とは何であるか。我も人も彼も人も的人權思想は何を意味するか。それは自由を意味し、自決を意味しないであらうか。自由と自決とのないところ、人間なるものなく、従つて、人間

性はありません。個人が他の個人に力を加へられることによつて自由は失はれ、自決の権利は剝奪される。自由と従つて自決とのないところに人間なるものなく、人間性なるものはありません。

自由と自決とを失つた弱者、劣者、被壓迫者、労働者、弱小民族が生命と運命とを堵して闘争するのはこれが爲めである。自由と自決とを剝奪されるれば、人間たることを抹殺されたるに等しいので、如何にしても、人間たることを恢復せんとして力争し、生命をかけて、闘争するは止むをえない。如何に微小なるもの、劣弱なるものと雖も、人間たることを無視せられ、人間性を剝奪されて、をとなしく黙つて見てゐる筈はない。自由と自決とを奪つて温順なるべきを豫想するは獨合點であり手前勝手な解釋である。通常優者強者といふ手合はかくの如き無茶な想像を逞ふして自分の天下が永久に續くと想ふので、竟に豫期に反し、悲惨なる運命が落ち來るのである。著者は支配階級はたいてい暗愚で如何にしても支持し得ざる特權を少しも讓渡せざることによつて支配階級の没落を來す所以を近著「階級闘争の研究」第七章「革命と進化」に述べて居る。革命の本質の義については今舉げて居る拙著によつて知られたい。進化論者たる



著者は社會は絶えず變動するを避ることができなければ徐々微小なる變化を積んで押し移る進歩を以て最も安全なる移動法だと考へてゐる。革命の勃發はソーキン氏の考へるが如く壓迫より來らずして寧ろ支配階級の統治と權力の減衰とより來る。人間が他の上に力を加ふる欲望をもつ生物たることに於ては、人間のうち一の例外なく、平等に分配せられて居るから、如何なる時代如何なる社會に於ても劣弱者に壓力を加へないやうな支配者はない。役所では上長官はふんぞり返つて下僚を睨みつけることに興味をもつ人間であり、上級の教師は下級の教師に我儘勝手な眞似をなし、實業界の大番頭小番頭としての重役は軍人よりも官僚的で専制であるといはれる。人間は一つの例外なく威張り散らして他の上に力を加ふることに興味を感じる動物ではある。如何なる支配者支配階級と雖も絶えず劣弱者、劣弱階級を制壓しないやうなものはない。壓制は常住不斷であると思はなければならぬ。壓制を加へることによつて革命の起るとする説の取るに足らざるはこの理による。壓制の大なることによつて革命が起るとすれば壓制は常住不斷なるに於て革命は不斷に行はれなければならぬはずである。然るにこの事なきを以て見れば、革命は別に説明しなければならぬ必要を感じず。著者は革命は支配階級の統治の

衰へし瞬間勃發するものと解し、支配階級の壓制が有効に行はれない間際に乗じ突發すると解す（この事については「階級闘争の研究」二五〇—二六四頁を参照されたい）

然るに、萬代不易な支配階級もないから、支配の間隙の乗ずべき機會は常に來るであらう。それに、過激なる壓制は極度に下層階級の敵愾心反抗心を高めるから被抑壓者は間隙の乗べきあれば、何の假借もなく、電光石火、打撃を與へ、これを潰滅するであらうし、無残に打ちのめすであらう。かくて支配階級の没落死滅が入來する。自由と自決との失はれたる奴隷階級をもつ社會程危険な社會はない。居常、支配階級の統治の間隙を覘ひつゞけつゞあり、いつ如何なる異變が天から降つてくるか分らない。こゝに、限りなき危機が包藏される。

#### 四 自由・自決と社會本位との矛盾

社會を本位とする現代に於ては個人の自由と自決とは極度に失はれる。不自由社會、奴隷社會とは現時の社會をいふのである。現代人は自由と自決とを生命としながら、社會を本尊として崇拜する。このことの根本的な謬妄であることについては別著「社會の偶像」で縷説する。